

守・破・離

ロータリー運動の原点と未来

地区大会・地区指導者育成セミナー

— 資 料 —

国際ロータリー第2510地区

2020-21年度

地区大会実行委員会

はじめに



国際ロータリー第2510地区

ガバナー 福井 敬悟

(2020-21)

昨年より続くCOVID-19感染症拡大により、我々の経済や生活面はもとより、ロータリー活動も大きな打撃を受けました。私のガバナー年度(2020-21)も、地区の主たる行事を中止せざるを得なくなり、皆様のクラブ運営に大きなご迷惑をおかけしてしまいました。

このCOVID-19感染症拡大により、顔を合わせての会合は、2月15日のガバナー補佐・地区チーム研修セミナーが最初で最後となつてしまい、PETSや地区研修・協議会がDVD・冊子での配布、YouTubeの配信で行われました。

その後の集まりもハイブリッド形式での開催となり、クラブ会長・幹事の皆様と一堂に会することなく年度が終わってしまいました。しかしそのような中、クナークRI会長テーマは

「Rotary Opens Opportunities」ロータリーは機会の扉を開く、そして私の地区目標・方針「守・破・離の心で初心忘れず、変化を恐れず希望の扉を開きましょう」を掲げて地区内70クラブの公式訪問を、無事に終えることが出来たのは私にとって、生涯忘れ得ぬ大事な宝となるでしょう。

地区最大のイベントである地区大会も無観客のリモートとなり、当初予定していた指導者育成セミナーも行うことが出来ませんでした。セミナーに於いて「守・破・離」の所以となるロータリーの原点について、私がロータリー入会以来「師」と仰いできました塚原パストガバーに御講演を頂く予定でしたが、それもありませんでした。

そこでこの度、塚原パストガバーの過去の論文を編纂した特別冊子を作成し、地区大会ご登録の皆様配布させていただくことにいたしました。

塚原パストガバーの多くの論文の中から、ロータリーの過去・現在そして未来をテーマに、「我々はどこから来たのか」「我々は何者か」「我々はどこへ行くのか」という題名で編集いたしました。この機会に是非、クラブの皆様にお読みいただき、ロータリーの真髓と、「守・破・離の心」をお汲み取りいただければ幸いに存じます。滋味掬すべき論文の数々を快く地区内クラブのために、ご提供していただきました塚原房樹先輩に心から謝意を表します。

フランスの詩人 ポール・ヴァレリーの詩に「湖に浮かべたボートを漕ぐように、人は後ろ向きに未来に入っていく」という一節がありますが、この詩は、ハーバート・テラーの「過去に学んで行動せよ」というスピーチをうまく補完していると思います。ヴァレリーは「我々は未来に後戻りして進んで行く」とも云っています。ご存知のように、手漕ぎのボートをまっすぐに進めるためには逆の方向をしつかり見つめて漕がなくてはなりません。人間の時間の歩みもそれと同じで「過去を直視」することによってこそ、まっすぐに進んでいくことができます。それではないか。それがこの詩の言葉の意味するところです。

過去を直視した時、そこに見えるのは「死者たちの風景」です。死者たちの英知をしつかり見ることによって、はじめて私たちは未来に向けて前進することができます。過去や死者を思うことは、単なる「保守思想」ではなく「未来志向」なのです。

我々の社会は死者たちが築いた歴史の上にある。つまり死者は生きている。しかし、今生きている人間だけで何かを変えようとしてしまい、それは過去を無視してしまいます。さらに人々は自分たちの根拠なき力を過信し、不安に突き動かされ暴力的になっ ていきます。『生きている死者』とは、いなくなったのではなく、『死者』として存在していると考えられます。生きている我々は何でも変えられると思っているが、よくよく考えてみると、私たちの現在には膨大な過去によって支えられています。それを無視して今生きている人間の都合だけで、

国際ロータリー第2510地区

パストガバナー 塚原房樹
(2005-06)

プロローグ

『人は後ろ向きに未来へ入っていく』

国際ロータリー50周年の時のRI会長は、「四つのテスト」の創案者のハーバート・テラーでした。彼はその式典で「過去に学んで行動せよ」というテーマでスピーチをしました。では、過去に学んで行動するとはどういうことでしょうか。ロータリーは時代の変化とともに変わるものと、いくら時代が変化しようとも決して変えてはならない不易なものがあります。ロータリアンは先輩が開発した「過去の英知」を大切にしながら漸進的に時代の変化に対応していかなければならないということでしょう。

これでもいいとばかりに飛びついて、新しいものによつてすべてを帳消しにしてしまい、変えてしまふというのは、実はとても危ないことではないのでしょうか。

単純化、そして過去を無視する時代となった現在、ロータリーは「先人の英知」をないがしろにして、自由結社から非営利組織への革命を経て、世界最強のボランティア団体になろうとしています。そしてその目的を達成させるためにR-Iは「過去の英知」を忘却して未来成形のプログラムを推進させようとしています。

あらゆる組織も存続するためには、変化が必要です。ただし、一気に赤から青へというように、自分の力を過信して、過去をひっくり返してしまふようなことは後に大きな悔いを残すのではないでしょうか。不完全性を抱えた、間違いやすく誤謬に満ち溢れた存在である有限な人間は、到底、理想の世界に到達できないでしょう。しかし中には、それは「保守思想」だという人もいます。だが「保守」とは「復古思想」ではありません。復古というのは単に昔に戻ればいいという考え方です。

人間が不完全であるということを前提とした思想が保守であるとするならば、人間は過去においても不完全であつた。それゆえ過去の一点に戻ればすべてうまくいくというような「保守思想」は取れません。なぜならば昔には昔の問題があつたでしょう。

また今生きている人間も当然不完全なものだから、「今のままが一番良い」ということもあ

り得ません。例えば過去に、どれほど素晴らしい社会保障制度があったとしても、昔のままその制度を運用しては、人口構成などが変わってくるのでうまくいかなくなるでしょう。その制度の趣旨を生かしていくためにはむしろ、変わらなくてはなりません。しかし理想的な体制を目指しても、未来もまた、不完全な人間によって営まれるわけですから絶対に理想の社会は完成しません。世界では毎日、様々な問題が起こり続けています。それに永遠に対応し続けていくのが人間の宿命なのです。

それでは一体我々はどうしたらいいのでしょうか。その時に範を求める先は「過去の厚み」の中です。それを踏まえて多くの人たちが積み上げた経験値に学びながら、「漸進的な改革」をしていこうというのが保守の発想でしょう。それが「Reform to conserve」（保守するための改革）……つまり大切なものを守るためには漸進的に変わらないといけないということです。

RIも、ロータリアンも、今一度ハーバート・テラーの言葉の意味をかみしめる時ではないでしょうか。

我々はどこから来たのか

ロータリーの黎明

ボール・ハリスを偲んで	16
ロータリーの揺籃 ニューイングランド	16
ボール・ハリスの学校生活	18
放浪生活 THE ADVENTURER	19
ロータリー発生前夜のアメリカ	22
シカゴより何の善きものか出さずべき	23
シカゴでの生活 孤独との戦い	24
ロータリー・クラブの創立	25
助け合いから奉仕活動へ	27
全美ロータリー・クラブ連合会結成	29
クラブ運動世界的に発展	30

最後の言葉 His last words to Rotary	33
--------------------------------------	----

日本ロータリーの発祥

ロータリアン1号・RC1号	35
関東大震災が一転機	36
大阪ロータリー・クラブの創立	38
48 RC 結成	39
第2回太平洋地域大会	41
ロータリー創立25周年記念	42
ポール・ハリスの来日	43
米山梅吉訣別の言葉	44

第二章

我々は何者か ― 職業奉仕に生きるロータリアン

『職業奉仕は菩薩の両願』	48
『職業奉仕』知る (to know) と成る (to be)	51
『アーサー・F・シエルドンとウィリアム・S・クラーク博士』	54
― 二人に共通した金銭感覚 ―	
『奉仕をシンプルに理解する』	61
『職業奉仕はロータリーの生命維持装置』その1	65
『職業奉仕はロータリーの生命維持装置』その2	68
『職業奉仕 (Vocational Service) のルーン』	71
『職業奉仕の終焉』今年度から始まった「会員特典プログラム」	76
続『職業奉仕の終焉』ロータリーは円形ではない。楕円形である。	80
『職業奉仕はロータリーのアルファ・オメガである』	83

我々はどこへ行くのか

『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』	世界は一つになるかⅠ	88
『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』	世界は一つになるかⅡ	92
『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』	世界は一つになるかⅢ	96
ポール・ハリスの選択的受容『天職とロータリー』		100
『ロータリーは非営利組織である』		103
『ロータリーの主役は誰か』		106
『ロータリー・ルネッサンス』		110
『ロータリー・NPO革命』		113
『ロータリーはNPOとなり、情緒性を失った』		116

第四章

小論収録

『奉仕のアウトソーシング』	119
『NPOとなったロータリーが失ったもの』	123
『新しい酒は新しい革袋に盛れ』	127
『ロータリーも免れ得ない組織の宿命』	130

『奉仕の出発点』	136
『寄付に対する日米の意識の違い』	140
『奉仕とは寄付のこと・アメリカは寄付社会』	144
『罪を裁きまた赦す神 突き詰めた緊張感』	146
日本とアメリカの奉仕観の違い	150
『ロータリーのバッジはいいバッジである』	150

「ロータリーを科学する・哲学する」	153
「見える世界と見えない世界」	157
「ロータリーは今や末法時代か」	160
—— ビチャイ・ラタクルさんの言葉 ——	
「“standard”から“optional”へ」	164
「ボランタリー経済」	167
「ロータリアン 二宮尊徳翁」日本の奉仕観の底流にある思考	169
「転轍手待望論」	171

第五章

私の“Rotary Notes”

始祖ボール・パーシー・ハリス	176
国際ロータリーのビルダー	180
ロータリーの哲学者	185
洞爺丸海難慰霊碑	190
Stigma 恥辱の烙印	195
気高き岩頭 (The Great Stone Face)	200
我々はどこへ行くのか	205
今こそ職業奉仕を！	209
寄付と喜捨	214
ロータリーの本 (忘れ得ぬ一冊の書)	220
ロータリーと否定の論理	225
悟後の悟り・ロータリーは生涯学習の場	231

米山梅吉論

.....

237

ロータリーの広報を考える

.....

252

第六章

最後に・・・

『自由の重荷に心をハッキングされないように』

.....

260

終わりに

.....

国際ロータリー第2510地区

パストガバナー

塚原 房樹

264

(2005-106)

第一章

我々はどこから来たのか

塚原房樹

ロータリーの黎明

ポール・ハリスを偲んで

1905年2月23日に、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴの一青年弁護士であったポール・パーシー・ハリスが、親しい友人3人と語らってお互いの政治・宗教に寛容で、思いやりと助け合いの心の溢れた集まりを始めようとしたのが、ロータリーの誕生となった。では、ポール・ハリスはどのような過程でロータリー運動についてのアイディアを得たのか。ポール・ハリス没後50周年を迎えた今、この運動の大河のような今日の姿を源流にまで溯り、ロータリー運動を構成しているいくつかの要素を探ってみることは、まことに意義のあることであろう。彼の生い立ちに関わった人々と、彼を育んだ自然風土を訪ねることは、ロータリー運動を理解するのに適切な方法だと思う。

ロータリーの揺籃 ニューイングランド

ポール・ハリスは、1868年（明治元年）4月19日シカゴの北60マイル、ミルウォーキーの南25マイル、北米第2の大湖ミシガン湖畔のラシーン市で生まれた。3歳の時、父親が事業に失敗して父母が別居したため、両親のもとを離れ父親の実家である、ニューイングランドの

バーモント州、ウォーリングフォードにやってきた。ニューイングランドは、メイ・フラワー号で旧大陸を逃れてきたピューリタンの祖先が拓いた土地で、森林や、入り江、湖沼は四季折々の異なる表情を見せる、豊かな自然に恵まれていた。特筆されるのは、その環境が孤独で思索的で、静かな生活を愛する詩人や作家達にとってもまた聖域であったことである。「緋文字」のホーソンを始めソロー、ロングフェロー、エマーソンなどニューイングランドの風土よりキラ星の如く輩出した文学者達は、彼らの作品を通してニューイングランドを頑固な宗教的迫害より救い出し、信教の自由を啓蒙した。その結果、戒律厳しい軍隊的宗教といわれたピューリタニズムと共にプロテスタントの諸分派が並びたつに至った。カトリック移民やアイランドと仏領カナダの移住者も数を増し、此処は宗教自由の揺籃の地となった。

ポールは厳格なニューイングランドの家庭の躰である犠牲、献身、名譽、真実、誠実、愛情を祖父母から知らず知らずのうちに身に付け、隣人愛、友人愛の大切さを学んだ。後にポール・ハリスがロータリー運動に身を捧げるようになった源泉を探っていくと、バーモント山脈の谷あいの故郷、村人の人情や宗教や政治に対する寛容な心遣いにまで溯ることができる。このことは、「ロータリーは故郷の谷間で産声を上げた」と述懐した彼の晩年の追想録に明らかである。グリーン山脈に挟まれたニューイングランドの自然は、ポールにとって冷ややかな非情物ではなく、森や湖水は有情そのものであり、ロータリーの心の揺り籃であった。

ポール・ハリスの学校生活

ポールは、ひどい腕白小僧で、村に何か異変が起きると村人は、まずポールを思い出すというほど、その腕白の度が激しかった。高等学校、専門学校と進むうち、腕白が過ぎて除名処分を受けたこともあり、バーリントンにあるバーモント大学に入学してからは、一時おとなしくなっていたが、その後彼のいたずらが又頭をもたげ、学友3人と共に再び退学処分になってしまった。その後は家庭教師について勉強し、19歳の春プリンストン大学に入学した。

1888年3月、プリンストンのポールは祖父危篤の報に接し、大恩人のもとに急行したが尊敬すべき祖父は、既にこの世の人ではなかった。翌年同大学を終えると、まず就職したのが、西ラトランドのシエルドン大理石会社の給仕としてであった。大学を出て給仕となったのは異例のことだが、彼はここで給仕という仕事は命ぜられた仕事をするだけでなく、命ぜられないことでも自分で捜し求めてやらなければならないことを、身に染みて教えられたと後日述懐している。ここで一年ばかり勤めたポールは、祖母の勧めで法律を学ぶことになり、アイオワ州立大学法律部に入り弁護士の道を進むことになったが、その途中シカゴ市に一週間ほど滞在した。

当時のシカゴは、いわゆる典型的な開拓者の町で、当時アメリカでもっとも急速に成長を遂げている都市の一つといわれ、ポールはあらゆる人種、信条、文化からなる人間のるつぼとも

言うべきシカゴの魅力に取りつかれてしまった。彼はシカゴには偉大な未来があり、将来アメリカの発展に重要な役割を果たすであろうことを直感で理解した。そして将来腰を落着ける時期が来れば、シカゴに住居を構えようと決意した。

放浪生活 THE ADVENTURER

1891年の6月ポールはアイオワ州立大学で法律の学位を取り卒業したが、在学中彼は、母代わりに彼を慈しみ育ててくれた最愛の祖母を失った。両親との縁に薄かったポールは、祖母をまたとなく慕っていただけに祖母の死で事実上彼は一人ぼっちになった。後に彼は人々に対する奉仕の新時代を開いたが、彼の人格を形成し、そうした資質をポールに植えたのは、祖父母であった。その意味からも祖父ハワード・ハリスと祖母パメラ・ハリスの名は決して忘れてはならない。この二人こそロータリーの基礎を築いた功労者なのである。卒業後ポールはすぐに、弁護士開業はせずに5年間の予定で放浪の旅に出ることにした。できるだけ多くの都市を旅行しながらいろいろな仕事に就いて人生を修業しようとした。

最初に足に向けたのは、サンフランシスコであった。そこで新聞記者になったが、間もなくカリフォルニアの果樹園などで働き、その後ロサンゼルスに出て実業学校の教師を経験した。デンバーでは、国民劇場の舞台に立ったり、再び新聞記者をやったり、一時はカウボーイの荒

仕事までもやったりした。フロリダに出てからは、ホテルの夜勤番頭、大理石会社のセールスマンなどやったが、この雇い主のジョージ・クラークとポールはたちまち親友となった。そして十数年後にジョージは、ジャクソンビル・ロータリー・クラブを創設し初代会長になった。こうしてポールは北米の各州を回ったが、かねてよりイギリスに行きたいと願っていたのでフィラデルフィアの新聞で英国渡航の水夫を募集していることを知り早速「ボルチモア号」に乗り組み大西洋を渡ったがなれない荒仕事に、言語に絶する辛酸をなめ、英国のリバプールに付いた。この航海では、ロンドンを見物する暇もなかったことを大変残念に思い、もう一度英国に渡ろうと再度、「ミシガン号」の船員を志願した。前回とは比較にならない快適な航海で、彼はロンドンその他、憧れの歴史的な英国の風物を見物して、満足して無事フィラデルフィアに帰港した。

アメリカへ帰り、シカゴの世界博覧会を見たあと、ニューオーリンズを訪ね、又新聞記者をしたり、オレンジ農園で働いたりしたがここで突然の大暴風雨や洪水に見舞われ、危うく生命を失いかける目にも遭った。やがてポールは、彼の良き理解者である大理石会社のジョージ・クラークのもとに帰り、セールスマンとしてキューバやバハマ群島まで足を延ばし、更に各地を回ることができた。するとジョージは「君のいわゆる5年間の放浪計画もそろそろ終わりに近いようだが、もう行きたいところはないかね」とポールへ親切に尋ねたので、彼は「実はも

う一度ヨーロッパに行きたいのだが」と答えたところ、それから2週間後にポールは大西洋上にいた。この旅行でポールは、スコットランド、アイルランド、ベルギー、イタリー、フランス、オーストリア、ドイツ、オランダなどの各国を訪問して、多くの友人を得て視野を広め米国に戻った。欧州旅行を終えたポールは、いよいよ落ち着いた生涯の生活設計をたてるため、シカゴへ行こうとしたので、親友のジョージは何とかして思い止まらせようと、「君がシカゴに定住することにどれほど利益があるか知らないが、もし君が僕のところに留まっていれば、必ずシカゴに行く以上に金ができると思うんだがね」と。ポールはそれにこう答えた。「君の言う通りかもしれない。しかし僕は金を作るためにシカゴへ行くのではない。一個の人生を生き抜くために行くのです」と。このようにポールは断固とした信念を披瀝したので、ジョージは了解すると共に、更に彼がニューヨークの知識を得たいと願っている事を知り、一時的に彼をニューヨークの支配人の地位に就けてくれるという友情と援助の手を差し延べられた。

ポールがこの善意に満ちた友人ジョージ・クラークを終生の恩人として尊敬し感謝していたのは、こうした経緯からであった。RIの公式名簿には、1912〜13年度の国際ロータリー会長はグレン・C・ミード、そして副会長には、ジョージ・W・クラーク（ジャクソンビル、フロリダ）の名が記されている。ポールはこのようにして親友のジョージの恩に報いたの

であつた。この放浪の旅で、異なつた国の大勢の人々と知り合いを深めることができたことは、後にロータリー運動を展開する上で大きな財産となつた。

ロータリー発生前夜のアメリカ

ここでロータリーの誕生を可能にさせた19世紀の末葉から20世紀の初頭にかけてのアメリカの歴史を少し振り返つてみたい。ニューイングランドその他の地方で、宗教自由のための闘争が、大規模の流血を見ずして成功したのに対して、政治上の自由のための闘争は、母国イギリスとの2回の血戦と嫌悪すべき内乱を経なければならなかつた。北部と南部の身内同志の流血、窮乏、極度に悲惨な4年間を戦い続けた所謂南北戦争（1861～65）であるが、その結果、南部における奴隷制度の廃止、合衆国における民主主義の発展と、近代資本主義の発展に大きく寄与した。特にアメリカにおける資本主義経済の発展は目覚しく、1880年頃から20世紀初頭にかけて独占体制の段階に入り、そうなると資本主義の欠陥と矛盾が至る所に姿を現すようになった。当時ヨーロッパの古い思想に変わろうとしていたのは、マルクスの「社会主義」とダーウインの「進化論」であつたが資本主義途上にあつたアメリカで広く受け入れられたのは、「進化論」であつた。その著書「種の起源」で有名なダーウインの「進化論」も生物学の分野にのみとどまつておれば単なる学問上の一仮説に過ぎなかつたものが、100%当

時のアメリカの社会に取り入れられてしまった。これが社会ダーウニズムと呼ばれ、「優勝劣敗」「適者生存」という弱肉強食の考え方は、当時の資本家階級には広く支持された。こうした事態の下では、当時の健全なる中産階級を中心に社会改良思想が生まれてくるのは蓋し当然なことであった。ロータリーの創始者ポール・ハリスは弁護士として、まさに当時のアメリカの健全なる中産階級の一員であったが、新大陸に理想の街を築こうと、ビルグリムファザーズたちが拓いたアメリカ発祥の地ニューヨーク出身の家柄であったことが、彼の思想を一層健全なものにしていたと考えられる。このポール・ハリスが、3人の友人と語らってフレンチ・ドロリーで、何か世の中のためになるような集まりを、シカゴのディアボーン街で計画したのがロータリーの誕生となったが、ちょうどそれがアメリカの初期資本主義がピークを迎えた1905年であったというのは、大変に興味深いことである。なぜならロータリーは、社会経済史的に見ると、誕生のその時から資本主義の欠陥を救う宿命にあったといえるのである。

シカゴより何の善きものか出さずべき…

ロータリーを産んだシカゴは、占くからFort Dearborn（ディアボーン砦）と呼ばれていた。冬には風が吹きすさび、Windy City（風の強い町）といわれ、すぐ側のミシガンのは、海のような灰色の大波を立てていた。では19世紀の末葉から20世紀の初頭にかけてアメリ

カのシカゴには、どのような資本主義の欠陥があったのであろうか。一握りの資本家が、政治・経済の主導権を握り、私利私欲中心の拝金主義が横行し、貧富の差の拡大、スラム街が至る所に姿を現し、シカゴは伝染病や犯罪の温床となり、商業倫理欠如の上に虚構の繁栄が築かれていた。しかし、このような悪名高いシカゴは、決して罪惡と腐敗の記録のみではない。シカゴから良いことはなに一つ生まれまいと言われてきたが、劣悪な勢力に対する輝かしい社会改良の諸運動が出現したのである。「シカゴより何の善きものか出ずべき」という疑問に対する立派な答えが数々出された。まずセツルメント運動では、ジェーン・アダムスの始めた「シカゴ・ハル・ハウス」が有名で、これはスラム街の中に拠点を移してそこで資本主義下の貧民の更生運動をするものである。他には3名の伝道者による貧民救済の社会福音運動が、シカゴはもとより全米ばかりでなく海外諸国にまで伝播した。「婦人キリスト教禁酒同盟」も一小村で教鞭をとっていた、若い婦人フランセス・ウィラー드의挑戦であった。シカゴ市民も立ち上がり大々的な浄化運動を展開、その活動的な努力により酒場、賭博場が姿を消していった。

シカゴでの生活 孤独との戦い

ポールが放浪生活を終え、かねての計画通り、シカゴに落ち着き弁護士を開業したのは、1896年2月、28歳の時であった。まさにシカゴは同族相食む(dog-eat-dogism)熾烈な

競争のつばであった。彼の法律事務所は、着々と繁盛していった。しかしポールの心は少しも晴れなかった。多くの知り合いがいるとはいえ、実際は天涯孤独な彼の寂しい心を慰めてくれる本当に親しい友達は、殆どいなかった。ポールは真の友人を求めた。田舎からやってきた、寂しい人々と一緒にさせるクラブのようなものを、作る方法はないものであるうか。徐々にポールの夢は実現に近づいていった。故郷バーモントの古き良き家庭の躰である犠牲、献身、名誉、真実、誠実、愛情を思い出していた。本質的にポールが欲したクラブの理念とは、素朴で平穩無事なニューイングランドの谷間の生活と家庭の躰、村人たちの打ち解けた真の友情と相互扶助の精神とを、シカゴに移し変えることであつた。ポールは祖父母から教つた寛容についての教訓を思い起こして、早くから寛容ということをクラブの理念を構成する必須の要件であると心に決めた。そして一人一人が自分の特定の職業を代表できるクラブにすれば、打ち解けた友情が生まれるだろうと考えた。ポールはこの構想を何年も温め、熟慮に熟慮を重ねた結果、遂に1905年の2月、3人の若い実業家に声をかけて集まつた。

ロータリー・クラブの創立

20世紀を5年過ぎたばかり、依然として景気の悪いシカゴの身を切るような寒い、その2月23日木曜日の夜、ポールは顧客でもある友人と夕食を共にした。友人は、石炭商をしているシ

ルベスター・シールであつた。ポールは当時有名なマダム・ガリのイタリア・レストランで食事をしながら新しいクラブの構想についてシールに詳細に説明した。シールはすぐにポールの構想を理解し、ポールと共に他の2人の実業家に会うことに同意した。2人は鉱山技師のガスターバス・ローアと彼の友人のハイラム・ショレーという洋服商であつた。4人とも皆都市生活の孤独に苛まれていて、彼らが後にしてきた故郷の連帯感あふれる生活に憧れていた。こうして舞台は整つた。時に1905年2月23日、場所はシカゴのノース・ディアボーン街127番地、ユニティ・ビル7階、ローアの小さな711号室から偉大な社会運動が呱呱の産声を上げた。第2回目（まだ会の名前は無い）の会合は、ハリスの法律事務所で2週間後の3月9日に開かれ、7人が出席した。第1回の4人に加えて、ハリー・ラグルスとウィリアム・ジェンセン、アルバート・ホワイトが出席した。5番目に入会したので、“No.5の男”と親しまれた印刷業のラグルスは、1911年に“National Rotarian”の第1号を印刷し、また会員の増強にかけては、クラブ随一でシカゴ・クラブの会員200人の3分の2は彼が集めたと云われている。3回目の会合は、3月23日にシールの事務所で行われた。この会合でポールはシールを初代会長に、ショレーを記録係に、ジェンセンを文書係に、ラグルスを会計に指名した。そして特筆すべきは、この時新クラブの名称が検討されたことである。いくつもの名称が「かんかんがくがく」真剣に討議され、「ロータリー」という名前が誕生した。また「連続

4 回欠席したものは、会員資格を喪失すべきものとす」と定められたのもこの会合であり、シールが「石炭業界について」話をしたのが、卓話の嚆矢となった。

助け合いから奉仕活動へ

シカゴクラブの定款・細則が作られたのは、1906年の1月のことであつた。起草委員は3名で、ポール・ハリスとマックス・ウォルフ、もう1人はチャールズ・A・ニュートンであつた。最初の綱領は、2カ条であつた。

第1条 会員の業務上の利益を振興すること。

第2条 性質として社交クラブに伴う親睦その他望ましい諸点を振興すること。

つまり、その内容は「会員の相互扶助」と「親睦」を掲げこの2つこそがロータリーの目的であり、特質であるといつてよい。「会員の相互扶助」とは、具体的に会員相互の取引を義務づけたものである。会員が石炭が欲しいときは、シールから買い、洋服を仕立てたいときにはショーレーから作る。印刷に関することは、ラグルスに依頼するという具合に無限に及ぶのである。しかし当初の物質的相互扶助の運動の中から、やがて徐々に「親睦」の「話し合い」に

よる、他人の不幸を、思いやる奉仕の心が芽生えてきた。

このきっかけとなったのが、弁理士ドナルド・カーターの物語である。オーレン・アーノルド著の「ゴールデン ストランド」によると、二代目会長のアル・ホワイトの時フレデリック・ツイードが、友人であるカーターにシカゴ・クラブへの入会を勧めて定款・細則の説明をしたところ、彼は即座に入会を断った。カーターは「この種のクラブはメンバー以外の人に利益をもたらしてこそ、社会的な意義があると思うよ。内部の利益交換に終始するクラブには、将来性がない」と自分の意見を述べた。多くの会員がこの提案に胸を打たれ、翌1907年、綱領に1カ条追加された。

第3条 シカゴ市の利益を推進し、その市民の中に市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること。

ここに初めてロータリーは、対社会への奉仕概念を持つに至った。そしてこの社会のために何かいいことをしようという目的達成のために、シカゴ・ロータリアンが実践活動として行ったのが、シカゴの町の公衆便所の設置運動であった。

全米ロータリー・クラブ連合会結成

我々は、ロータリー運動は1905年の創立の時より、秩序正しく斬新的に全世界に拡大発展して現在に至ると考えがちである。しかしその発展の初期の歴史には、ポールの自伝によれば、大革命があり、幻滅、焦慮、自暴自棄、傷心の時代を経験しなければならなかった。1907年2月、ポール・ハリスはシカゴ・クラブ第3代目の会長に就任したが、ポールはその時、抱負を3つ挙げている。1つはシカゴ・クラブを充実させること、第2は全米の重要な諸都市にロータリークラブを作ること、そして第3番目に対外的な奉仕理念の追求を目指した。

最初の抱負は余り問題はなかった。この新しいクラブの人氣は上々で入会申し込みが殺到していた。第2の目的については、まだ時期尚早だし、反対者もいるがやがて時が解決してくれるだろうとポールはみていた。もつとも厄介なのは、3番目の問題であった。社会への奉仕という概念は、会員同士の「親睦」と物質的「相互扶助」を柱とするクラブの創設理念から大きくかけ離れていた。確かにポール・ハリスが最初のロータリークラブを作ったときは、欠点の多い不備のものであったが、「寂しいから集まろうよ」といって集まったクラブ内には、「友愛」と「親睦」による温かい雰囲気は満ちあふれていた。しかし創立後、わずか2年にしてロータリー運動史上もつとも大きな波乱が起こった。

ポールは、旧来のロータリークラブ内部だけの相互扶助と友愛を目的とした地方集団から、他者への奉仕という新しい視野を充実させ、国際的に組織の拡大を図る新たな団体をめざした。当然、「物質的相互扶助」と「親睦」のみに専念しようとする（親睦派）と、「奉仕活動」に力点をおいて活動しようという（奉仕派）との対立を生み出した。この激烈な対立闘争は、1907年のポールの会長就任から1910年のラムジの会長就任に至る3年の間続いた。当時のクラブ幹事ウィル・ネフがハリー・ラグルス会長に語った次の言葉が、記録に残っている。「あと一カ月こんな状態が続いたら、このクラブもおしまいだなあ」“Another month of this and the club will cease to exist”。この闘争の妥協点として、クラブ内の争いの種となる奉仕哲学の追求とロータリーの拡大を主な任務とした機関として、全米ロータリークラブ連合会が設立され、事態は一応の解決をみた。このことに大いに貢献したのは、1908年に入会した二人、チェスレイ・ペリーとアーサー・フレデリック・シエルドンである。

クラブ運動世界的に発展

特にチェスレイ・ペリーは、1910～1942年の32年間国際ロータリーの事務総長を務めたのであった。ポール・ハリスは「もし私がロータリーの設計者と呼ばれるのならチェスこそ、その施工者と呼ばれるべきものである」と言っている。このチェスレイ・ペリーが司会

して14クラブの代表者を含む60名が、シカゴのコングレスホテルに集まって、全米ロータリークラブ連合会ができたのが1910年8月であった。この年の暮れポール・ハリスの「合理的ロータリー主義」と題する論文をもとにチェスが8頁のタブロイド型の“National Rotarian”を作り、翌年に配布した。これが今も続く“The Rotarian”の前身である。1911年シエルの演説の一説から“*He profits most who serves best*”が生まれ、同年ポートランド大会でのフランク・コリンズの言葉から“*Service, Not Self*”ができて、この2つがロータリーのモットーとなったのである。

1915年サンフランシスコの国際大会で11カ条からなる「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」が採択された。この倫理訓には、「綱領」や「四つのテスト」に含まれているおおよそ、職業人たるものが身につけなければならない行動規範が、ことごとく盛られていて、一時期のアメリカのロータリー運動の指針となったが、国際ロータリーは1927年その頒布を中止した。この倫理訓を土台として1916年にガイ・ガンディカーの「ロータリー通解」が出されて、初期ロータリアンの奉仕哲学の追求はほぼ完成を見た。

1921年のロータリーの国際大会は、初めてアメリカを離れてスコットランドのエジンバラで開かれたが、かねてからロータリー・クラブを律する一定の定款細則がほしいと言われていたので、委員会を組織して原案を作り、それが1922年のロサンゼルスで決定をみ

たのが今日の標準定款、推奨細則となっているのである。そしてこの時ロータリークラブ国際連合会もその名称を国際ロータリー (Rotary International) と改められた。

そしてロータリーは1923年のセントルイスの国際大会で、かの有名な「決議23-34号議案」が採択された時に成年に達したのである。では、ロータリーの先人の知恵の結晶とも言われるこの不滅の決議23-34の生まれた背景を訪ねてみよう。

ロータリーは創立以来一貫して職業倫理の向上をうたってきたが、1920年になって身体障害児のリハビリテーションの問題が全米に澎湃として起こった。そしてそれがついに国際身体障害児協会に発展してロータリーの看板事業となってくると、全米のほとんどのクラブは熱に浮かされたように身体障害児問題に夢中になり、まるで福祉団体の様相を呈し始めた。そこでロータリーの一業一人制は、職業を通じての奉仕によってのみ意義あるものとする者は、この際社会奉仕の項を綱領から削除すべしと極論するようになった。

さらに社会奉仕の主体をクラブにおくか、会員個々の活動に任すかについても論争され、やがてこれらの対立がロータリー分裂の危機を孕むに至り、ついに決議23-34ができたのである。この決議34号は当時の対立を見事ロータリー的に氷解させたばかりか、社会奉仕の概念をロータリーの世界で確立するとともに、ロータリーの深い哲理に基づく社会奉仕の行動基準を明らかにしたのである。

ウイル R・メーニャー・Jr の手による、全体で 6 項目からなるこの声明の中には、「一体何故ロータリーを必要とするのか。そしてロータリーの基本方針とプログラムは、何故かく定められているのか」という疑問にたいする解答が明快に示されている。特に第 1 パラグラフの「ロータリーは基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである」という美しいフレーズは、特に我々日本のロータリアンの心をとらえて放さない。それはロータリーの原点の集大成であり、不滅の原理の宣言である。

最後の言葉 His last words to Rotary

ポール・パーシー・ハリスは 1947 年 1 月 27 日に帰らぬ人となった。「The Rotarian」誌、1947 年の 2 月号に彼のロータリー運動に対する「最後の言葉」が掲載された。

「1905 年には、ロータリー運動がこんなに世界的な規模になろうとは予想だにできなかった。一本のか弱い苗木を植えたからといって、その木が必ずや力強い大木となると誰が確信できたであろうか。しかし、最初の蕾を目にしたとき、初めて私は大きな木陰を夢見るようになった」。最初の蕾とは、1908 年にサンフランシスコにできた第 2 のロータリー・クラブのことであろう。翌年にはオークランドに、引き続きロサンゼルス、シアトル、またさらに

ニューヨーク、ボストンとロータリーは拡大していった。創立から91年を経て今は、154の国家に28,000のクラブ、会員総数は1,200,000人に達しようとしている。

このロータリー運動の大河を溯り、小さな源泉を辿り、先人の心を訪ねたのは、その心を今のロータリーに活かしたいためである。ポール・ハリスはシカゴ郊外のマウントホープの墓地に、畏敬の友シルベスター・シールと並んで静かに眠っている。因にポール・ハリス未亡人ジーン・トムソンは、故郷スコットランドのエジンバラ・ダルケイス通りのニューイントン墓地に埋葬されている。二人は遠く海を隔てて離れていても、いつも一緒である。ハリス夫人が語っていたように「私たち二人は信仰によって、永遠の力の中に結ばれている」からである。

(1997年3月31日)

日本ロータリーの発祥

ロータリアン1号・RC1号

福島喜三次氏は、1881年佐賀県有田市で生まれた。東京高商（現在の一ツ橋大学）を卒業後、三井物産に入社してテキサス州ダラスの三井の子会社東洋綿花の社長に就任、在任中にダラスRCに入会をした。日本人として第1号のロータリアン誕生である。

当時三井銀行の重役であった米山梅吉氏は、財政問題調査団の一員として渡米した際、1918年の元旦を、案内役のダラスの福島宅で迎えたが、この時ロータリーの何たるかを聞き大いに心を動かされた。1920年1月福島喜三次氏は東京に転勤となったが、そのおりダラスRCは彼の送別会を開き、その席で日本にもロータリークラブを作るようにと勧められた。帰国後、国際ロータリー連合会の本部から、1920年6月末までに日本にロータリー・クラブを創立するようにとの委任状が福島氏に届けられた。そこで福島氏は米山氏に相談し、ロータリー・クラブ創立の準備にとりかかったが、当時の日本は、第一次大戦に連合国側として参戦、一時的な景気に沸いたものの、戦後は恐慌に襲われ、不景気の中で農民運動や初のメーデーが行われるなど揺れ動いていて、ロータリー運動に対する関心は全くなく、6月末の期限が切れてしまった。そこで、期限延期を本部に申請したところ、パシフィック・メール汽

船会社の横浜支店長のウィリアム・ジョンストンを世話役に加えることを条件に、改めて福島喜三次氏に委任状が届いた。このジョンストンは上海RCに居たことがあり、かなりロータリーには精通していた。

このようにして、米山梅吉を創立者として、福島氏とジョンストン氏が特別代表の資格でこれを助け、創立計画も着々と進展し、1920年9月1日には東京ロータリークラブの創立委員会を、10月20日には、24名のチャーターメンバーで創立総会が銀行クラブで開催されるに至った。初代会長には、米山梅吉、そして幹事には福島喜三次が就任した。国際ロータリーのチャーターの日付は、1921年4月1日で登録番号は855号である。ジョンストンは間もなくサンフランシスコに転任したので東京RCは、同氏の功労を記念して名誉会員第1号に推薦をした。また、日本人ロータリアン第1号の福島氏は、東京RCの初代幹事として米山氏を助けたが、大阪へ転勤のため、僅かに2回例会に出席したのみで退会をした。大阪に転勤した同氏はその後再び東京転勤となり、1932年東京RCのパストサービス会員として入会されクラブのために尽くされた。

関東大震災が一転機

創立当初の東京RCの会員は、「ロータリー日本50年史」によると定款細則などに対する関

心が薄く、出席も悪かったのでクラブの存続も危ぶまれるほどであったとある。活動はきわめて低調で国際大会に代表を送るでもなし、奉仕活動などもろくにやっていなかった。だがそれから間もなく東京RC、大阪RCは勿論のこと、わが国民にロータリー運動というものを強く認識させ、わが国内にこの運動を大きく展開させる事件が起きた。それは、1923年9月1日午前11時58分、東京を中心に突如として襲った関東大震災であった。

この時の国際ロータリーの活動によって、会員はロータリー運動の何たるかを初めて知らされたという。すなわち大震災の報が外国に伝わるや、国際ロータリー会長ガイ・ガンディカーと事務総長チェスレー・ペリーは直ちに電報で、救済基金として2万5千ドルの送金を行い、また世界中の503のロータリー・クラブから総額8万9千ドル余の見舞金が到着した。この義援金によって、まず東京市の孤児院の敷地内に、別棟「ロータリーの家」を新築の上寄贈することを決定、さらに東京、横浜の小学校188校に備品送呈、殉職警察官遺族への援助などを繰り広げた。ここに東京及び大阪RCの会員は、「社会奉仕」及び「国際奉仕」の何たるかを身をもって理解し、これからロータリーについて勉強もし、真摯に奉仕の実践活動に取り組むようになったというのである。関東大震災後、東京RCは一変して月1回の例会を週1回とし、国際大会にも代表を送り、国内の拡大(Extension)にも大いに努めることになった。

大阪ロータリー・クラブの創立

大阪に転勤した福島喜三次氏は、星野行則氏と話し合う機会を得、ともに英米訪問実業団の一員となって渡米し、1922年にシカゴ国際ロータリー本部を訪れ、チェスレー・ペリー事務総長から、ロータリーに関するいろいろな教えを受け、そこで大阪にもロータリー・クラブを作ること委任されたのであった。こうして1922年11月25名で大阪ロータリークラブが、わが国二番目のクラブとして創立された。会長星野行則、副会長村田省三、幹事福島喜三次であった。登録番号は1349号でその日付は、1923年2月10日であった。

初めは暗中模索であったが、まず会員間の親睦を深めることから始め、時間励行と出席の義務とで会員を例会に引き付け、さらに当時は珍しかった家族同伴の小旅行や運動会、それに趣味の同好会などを盛んに催したので、それが効果をあげ和気あいあいとした愉快なクラブとなつて評判を取つたのである。このように大阪RCは東京よりはるかに進歩的で、星野会長、福島幹事は、国際ロータリー連合会の本部から拡大委員会の委員を囑託されたのを機に、神戸の松方幸次郎と語らい、1924年8月に神戸RCを結成させた。この間にも1924年アメリカでは排日法案が強化され、また、その頃国内では、ロシア革命の成功が強い刺激となつてマルクス研究が盛んになっていた。このような時代に友愛と奉仕とを説いて、シカゴの市井の庶民の中から生まれたロータリークラブが、日本においては東京、大阪の一流の実業家、名士

の中から選ばれた人たちによって最初に受け入れられたということは、極めて特異なことであった。

48 RC 結成

震災を契機として、日本全国の大都市にもロータリーを認識させ、ロータリー運動の拡大は本格的になっていった。しかし当時の日本は、まだいわゆる「地区のない地帯」(Non-district Territory)で、ガバナーが居らず、クラブ拡大には不便な状態にあったので国際ロータリーは、1924年に米山梅吉氏をロータリー・クラブ拡大の初代特務代表者(Special Commissioner)に任命しロータリー運動の拡大と指導に当たらせた。同氏は、更に2年間これに在任して、名古屋と京都にロータリークラブを結成した。2代目の特務代表者には井坂孝氏(1926-27)、3代目は平生飢三郎氏(1927-28)が任命され、井坂氏の時には横浜、朝鮮の京城に、平生氏のときには満洲の大連、奉天の各RCが結成された。これら国内六大都市すべてにロータリークラブができるとともに、その後、台湾に台北RCもでき、かくしてロータリー拡大の波は、当時日本の勢力下にあった東洋の諸国におよんだ。

米山梅吉氏は1926年7月から1年間国際ロータリーの理事となったのを機会に、日本の全ロータリー・クラブは一堂に会して、初めての第1回の会合をインターシティ・カンファラ

ンスとして大阪で開いた。第2回インターシティ・カンファランスは1927年東京で開かれ、この会合で会員の選考を一層厳格にすることや、ロータリーの襟章を必ずつけることが申し合わされ、また日本、朝鮮、満洲を合わせて一つの地区を設定してもらいたいという要望が決議されたが、国際ロータリーは時期尚早との断を下した。

この年1927年、国際ロータリーでは、総合企画委員会“*Aims and Objects Committee*”の制度ができて、クラブ奉仕、職業奉仕、社会奉仕、国際奉仕の四大部門“*Four Avenues of Service*”が生まれた。

翌1928年再び地区設定の要望が高まり、平生夙三郎スペシャル・コミッショナーは強硬に“*Great dissatisfaction and disappointment*”と書いた書状を送って、ついに国際ロータリー理事会に日本、朝鮮、満洲を合わせた「第70区」を容認させた。わずか7クラブでの地区設定は相当無理であったと言わねばなるまい、そして初代ガバナーには米山梅吉氏が就任した。なお米山氏は、初期の地区活動の育成のため、3期連続してガバナーに就任された。わが国内のクラブ拡大は、東京クラブ創立の1920年から1940年のRIを脱退するまでの20年間に結成されたロータリー・クラブは48クラブに達したのである。

第2回太平洋地域大会

太平洋地域大会の目的は、太平洋沿岸にある各クラブが集まって国際親善を図るとともに、世界平和に貢献しようとするものである。第1回目は、ハワイのホノルルで開かれ、次いで地区が新設された1928年、第2回目が東京で開催されたが、これは地区設定を要請したとき日本におけるロータリーの成長ぶりを披露するために計画されたものである。東京RCでは、他からの応援も合わせてわずか170名の会員により、関東大震災のお礼心もあって運営に万全を尽くした。海外からの出席は9カ国109名で国際ロータリー会長サットン夫妻も参加された。特筆すべきは、この太平洋ロータリー地域大会の第3日に大阪クラブの土屋大夢が、「ロータリー以前の偉大なるロータリアン」と題して二宮尊徳の話を英語でスピーチをして、至誠、勤労、公平に触れ、その報徳の教えはロータリーと同じではないかといって一同に感銘を与えたことである。

1928年日本が第70地区として発足したので、1929年4月米山ガバナーのもとで第1回70地区年次大会が京都で開催された。このとき、「He profits most who serves best」というモットーの“profits”は物質だけを指すのか精神的なものが含まれるかについて論議が集中した。また米山ガバナーはロータリーの6つの綱領と11の倫理訓を翻訳して繰り返し読んでいるという大連クラブの古沢文作の報告を激賞している。1930年第2回地区年次大会は、

米山ガバナーのもとで神戸にて開催された。国際ロータリーから派遣されてきた元会長のフランク・マルホランドはその間こえた雄弁で一同を魅了した。同じく関東大震災のときの恩人である元会長のガイ・ガンディカー夫妻も前後して日本を訪れた。

ロータリー創立25周年記念

1930年は、世界最初のロータリー・クラブがポール・ハリスとその友人たちにより米国イリノイ州シカゴに誕生して25年目、またこの年は東京RCが作られて10年目に当たった。そこで誕生の地シカゴで盛大に記念の国際大会が開かれ、58カ国から11,000人の登録があり、日本からは東京RCの名誉会員徳川家達公が出席し、「民族の勃興」と題して日本の成長を英語でスピーチしたが、シカゴ市も最高の礼をもって迎え有名な儀仗黒騎馬隊をもって送迎した。

1931年第3回地区年次大会は、横浜で行われた。この時ガバナー・ノミニーには新しく井坂孝が選ばれ第2代目のガバナーになることになった。井坂ガバナーによつて初めてガバナー月信が送つてこられたのは、1931年8月であった。また井坂ガバナーはこの中で特に業務遂行上の賄賂の厳禁を求め、かつロータリーの活動はその6つの綱領の達成に限るべきで、慈善に走つたり、寄付集めに浮き身をやつすことのないよう要請している。

1931年9月満洲事変は突発した。その翌年3月に満洲国建国が宣言された。世界の非難に反発して日本は、1933年に国連を脱退した。孤立に走る母国を前に、日本のロータリーの前途が安穩であり得なかったのは当然のことであった。第4回地区年次大会は1932年大阪において、井坂ガバナーのもと村田省蔵が大会幹事となって開かれたが、厳しい暗い時代で、この只ならぬ雲行きはついに5・15事件となって犬養首相の暗殺にまで及んだ。しかしまだそこには、平和の姿が残っていた。このような時代背景の中で、北海道にもロータリー・クラブが誕生した。1932年12月3日井坂ガバナーを迎えて豊平館で日本8番目のクラブとして「札幌ロータリー・クラブ」は発会式を行い佐藤昌介を会長に選んだ。国際ロータリーのチャーターの日付は1933年1月18日で登録番号は1621B号であった。

ポール・ハリスの来日

ロータリーの創始者ポール・ハリスが夫人と来日したのは1935年2月9日である。当時の国際ロータリー会長ボブ・ヒル夫妻とともに、マニラで開かれる第5回太平洋地域大会に向かう途中日本へ立ち寄るという知らせがあった。

東京では委員会を設けて歓迎の準備をしたが乗船が荒天のため予定より3日遅れて横浜に入港した。そのためあわただしい日程となり、横浜で小憩の後上京して帝国ホテルで記念植樹を

行い、芝公園の中にある紅葉館での純日本式の午餐会に臨んだ。その夜は、東京会館で行われた東京・横浜両RCの歓迎晚餐会に出席、余興の桜踊りなどを楽しんだ後船で神戸へ向かった。翌日も京都見物の後、新大阪ホテルでの歓迎午餐会に出席、歓を尽くす間もなくその夜のうちに神戸を出帆した。

ポールの来日は、その後の国際情勢の変化のため、これが最初にして最後の機会となった。この来日のおり、歓迎に馳せ参じた日本のロータリアンがポールに「あなたは、何故ロータリー・クラブを作ったのですか」と訪ねたところ、ポールは「只、寂しかったから」と答えたことは有名である。またこの時ポールが帝国ホテルの中庭に植えた月桂樹は、1968年にホテル旧館が取り壊される際、神奈川県の大井町に移されたが残念ながら枯死寸前であった。しかし東京RCの矢野一郎氏が挿し木によって育てた数本が二世となって、そのうちの一本が皇居の北の丸公園で今も元気に繁っている。

米山梅吉訣別の言葉

ポール・ハリスを、慌ただしく迎え、送った日本のロータリーには、その後苦悩の年月が待っていた。札幌RCの創立後の1936年には、いわゆる2・26事件が起き、そして翌年の7月に日華事変が勃発した。ロータリーは反戦的であり、亡国的であると断じる一般の誤解は

重圧となり、機構改革、日満ロータリー連合会、そしてクラブ解散と非情なる時の動きはあまりに早く、それは止まるところなく、ついに1941年12月太平洋戦争へと繋がっていった。1940年9月11日東京RCはついに解散した。創立者米山梅吉は、重い足を引きずるようにして壇上に立った。そして20年に亘ったロータリー歴の最後の言葉を残した。

「……創立以来20年を顧みる時、誠に感無量である。この間ロータリー・クラブが、いかに国家に貢献してきたか、その歴史はさんと輝いている。また、その間において幾度か有難い思し召しを戴いている。私の暇には、絵巻物の如くにそれらが彷彿として来る。私は只皆様方にお礼を申し上げ、自分の不行き届きの点をお詫びしたい。……1940・9・11」

第二章

我々は何者か

— 職業奉仕に生きるロータリアン

塚原房樹

『職業奉仕は菩薩の両願』

奉仕団体は数多くありますが、職業奉仕という考え方は、ロータリー独自の主義主張です。しかし職業奉仕という考え方は、ロータリーの専売ではありません。職業を通じて人のためにお役に立ちたいという思想はロータリアンばかりでなく、日本ではだれでも身に付けています。儒教、報徳、石門心学など東洋哲学の影響で自分の仕事を天職と心得、職業に貴賤を設けず、誇りを持つて相手の立場にたつて商いをする商人道が江戸時代から確立されていました。

職業奉仕はロータリーに入会して初めて教えられるものではなくて、最初から身に付けた素養なのです。ロータリアン以外の人々でも、自分の企業を大切に、これをもって世のため人のために貢献しようという人は枚挙にいとまがありません。ただロータリアン以外の人々はそれを職業奉仕と呼ぶなかったただけなのです。今や、職業奉仕の考え方は一般の経営者の常識となり、職業奉仕は判らないの、難しいのと議論しているロータリアンより、はるかに進んだ考えで社会に貢献されています。

また職業倫理の高揚に勤め、自分の人生上の成功を自分一人のものと思はず、これを広く社会に還元しようとする人も大勢おられます。またその奉仕のスケールも、一地区内のロータ

リアン全員の奉仕に匹敵するような大きな奉仕を実践される方もおられます。

そこで、ロータリーは何をもって自己の独自性を主張するのか、つまり非ロータリアンとロータリアンとの職業奉仕は一体どこが違うのか、こここのところの整理がつけば、ロータリーで言うところの職業奉仕、すなわちロータリーとは何かが理解できます。職業奉仕は判りにくいというけれど、企業の管理者はロータリーに入会する前より、職業奉仕の素養は皆身に付けています。判りにくいのはロータリーにおける職業奉仕なのです。

自分の仕事を通して社会に奉仕をする、このことは非ロータリアンもロータリアンも同じです。ただロータリアンにとつては奉仕の実践は十分条件にしか過ぎません。ロータリーにあつては、奉仕の実践に先立ち、例会で自己の奉仕の心を磨き、自己の精神的境地を高めることが必要条件なのです。ロータリーでは奉仕の実践に先立ち、例会での親睦を通して、切磋琢磨して奉仕の心を作ることが職業奉仕の第一の目的なのです。

職業奉仕の話をするとき必ず心に浮かぶのは、宮崎RCの岩切章太郎氏であります。氏は自分の職業観は「菩薩の両願」だといわれました。仏教では「菩薩の両願は、解脱と浄仏国土である」といわれます。菩薩とは最高の悟りを開いて仏になろうと発心して修行に励む人のことで、解脱とは悟りを開くこと、浄仏国土とは衆生を済度することです。つまり菩薩は二つの願いをもつ、第一の願いは仏道を修行する、そして修行が成就したなら、第二の願いとして生き

とし生けるものを皆済度したいという二つなのです。

ロータリーの職業奉仕も菩薩道と同じです。第一は、ロータリーの例会出席を通じて自己の精神的境地を高めること、第二は、この高められた境地で自分の職場を中心に世の中を明るくしていくのです。職業奉仕とは各ロータリアンに奉仕の行動を要請する高められた内心的境地のことです。

(2014年11月17日)

『職業奉仕』

知る (to know) と成る (to be)

今年度も、職業奉仕の講演の依頼を数多くいただいております。いつも思うことは先達が開発した職業奉仕の文献をそのまま、あるいは他人の言葉を孫引きして伝えることではないのかという疑問です。自分の言葉で職業奉仕を語りたいと最近思うようになりました。ロータリーの職業奉仕の本質は、職業奉仕がロータリアンの生活の中に生かされてくるのでなければ、いかに理論に卓越していても無意味であります。

以前（1977年）、私がロータリーに入会したころはロータリーの勉強をするということは大変なことでした。

ロータリー運動の根幹である良質で優れたロータリーの思想・職業奉仕を学ぶために、当入手の可能な限り内外の先達の文献資料を読み漁りました。「職業奉仕とは何か」を咀嚼して自信を持つて語れるようになるために、古文獻に埋もれて努力しました。そのころに比べるとネット社会の今は、いつでも簡単にどんな資料でも一瞬で手に入ります。昔の職業奉仕委員長さんは、限られた資料しかなく苦労しましたが、今はネット上に職業奉仕の情報は氾濫してい

ます。PPTによる講演の内容も簡単にネットから「コピペ」できます。

おそらく今はどこの地区の職業奉仕委員長さんも、職業奉仕に関する情報はネットから得られていることでしょう。熱心な方は、ネットをくまなくアクセスして内外の膨大な資料を蒐集され勉強されています。しかし職業奉仕委員長さんの役目は単なる資料の蒐集ではありません。職業奉仕を勉強するために委員長に選ばれたのではなく、職業奉仕の実践方法を会員に伝えるために選ばれたのです。

職業奉仕は、知る (to know) にとどまっていはいけない。成る (to be) に移らねばなりません。

私たちは自分を中心として、その外側にあるもの―客観的に存在するものについて知るのを知識／ナリッジ／と言います。単に新しいことを知るのは知識が一つ増えただけです。何の発明も発展ありません。

しかし自己の内側にあるもの、つまり物事の本質を学ぶのを知恵／ウイズダム／と言います。職業奉仕委員長さんの役目は、単に職業奉仕の知識／ナリッジ／の伝達だけではない、ロータリアンが職業奉仕を自覚して (to be) の段階に移ってもらわねばなりません。

馬を水辺につれていくことはできて、馬に水を飲ませることは難しい、という言葉があります。

いくら職業奉仕哲学を説いても、職業奉仕をいかに実践するかは、各ロータリアンの叡智に任されています。ではどうしたらいいのでしょうか。

人は皆生まれつき仏性・叡智を持っています。しかし「珠磨かざれば光なし」という言葉のとおり、私は結局、職業奉仕とは各人の「自覚」「自我と非我」「ザインとゾルレン」の問題だと思っています。紙数が尽きたようです。また機会があれば愚見を申し上げたいと思います。

(2014年9月8日)

『アーサー F. シェルドンとウィリアム S. クラーク博士』

—二人に共通した金銭感覚—

ロータリーの原点は、ポール・ハリスの父祖の故郷、ニューイングランドのピューリタンの人々の生活信条が基となっています。ニューイングランドはアメリカ発祥の地です。またその生活信条は遠くピルグリムファザーズから宗教改革者のルターにまでさかのぼります。ロータリーという職業奉仕という概念は、ルターの「職業聖召観」に基づくもので経済的活動は宗教的活動の延長線上にありました。しかし時代を経てロータリー誕生の頃には、神の国を求める情熱が功利的実業倫理主義となっていたのです。

厳しい職業倫理は、経済的發展に不可欠です。やがて「正しい手段で利益をあげることは、神のみ心になう。神はリッチになるなどとは言っておられない」という解釈がなされるようになります。

「人が懸命に働いた結果、富を集めることになっても、それはそれでよいことだ」とピューリタンは伝統的に経済的利益の追求を是認していました。職業的成功、つまり貨幣の獲得はそれが合法的に行われる限りでは、天職における有能さの証であると考えられました。このよう

に仕事の成功に向けて励むという態度が、合理的、組織的な極めて抑制のきいた行動をもたらしました。

そこで、ロータリーの哲学者シエルドンと北海道におなじみのクラーク博士の二人を取り上げ、その金銭感覚の共通点を探ってみました。

アーサー・フレデリック・シエルドンと言えば、ロータリーに「サービス・コンセプト」をもたらしたロータリーの大恩人です。1908年にチェスリー・ペリーと共にシカゴクラブに入会しました。ポール・ハリスはこの二人の入会を「天祐を得た」と表現しました。チェスは国際ロータリーの初代幹事であり、ハリスは自分がロータリーの設計者（デザイナー）なら、彼はロータリーの組織管理の建設者（ビルダー）であると述懐しています。一方シエルドンは、シエルドン研究の第一人者、「源流の会」会長、田中毅氏の翻訳文献によりすでに皆さんはよくご承知のことと思います。

彼はミシガン大学卒業後シカゴでビジネススクールを創立して、学生たちに教えたのは商業道德の重要性でした。その頃のシカゴは弱肉強食の最悪な時代で、混沌たる実業界の状態を若きシエルドンは深刻に憂えたのでした。シエルドンはこのような初期資本主義の私利私欲が横行する中で、サービスの科学、すなわち「人に対してもよくサービスするものこそもっとも多く報いられる」"He Profits most Who Serves Best"というロータリーの主概念となっ

たモットーを提唱したことは、皆さんよくご存じの通りであります。しかしこのモットーは當時から、世俗に過ぎはしないかという批判がありました。またシエルドンがいうところの報酬は、物質的なものかそれとも精神的なものかと問う人がいました。

ハリスの自伝的ロータリーの回顧録、『ロータリーの理想と友愛』によると、「自分の信ずるところ、シエルドンは彼自身に関する限りいわゆる精神的報酬に主眼をおくものである。ただし彼の目的は最大多数の人々に最大限の幸福をもたらすにあつて、その最大多数の人々は物質的利益に多くの関心を持つという事実を彼はよく認識していた。かつてニューヨークのロチェスターのある教会の聴衆に向かつてシエルドンを紹介した牧師の言葉は、善意に出てしかも誤っていた。シエルドンのモットーは、金銭上の利益を欠くも、ただ正しいことをしたという精神的満足によりいっそう大きく償われるのであるといったからである。このようなことはシエルドンの本旨ではなかった。

シエルドンは、その日の講演に与えられた時間の大半をその打ち消しのために費やせねばならなかった。」

このようにポール・ハリスは一貫して、シエルドンの標語も実業倫理主義をその中心とするものであると説いています。宗教は「神への奉仕」すなわち「自己滅却の世界」ですが、実業倫理主義にあつては利益追求の行為が、どのようにして世のため人のためになるかという思考

なのです。金銭を卑しむという思想をシエルドンはもっていないのです。

ハリスやシエルドンのロータリー観は世界のロータリアンを団体として眺め、平均的、一般的基準としての個人倫理の向上を目的としています。

次にウィリアム・スミス・クラーク博士と言えば札幌農学校の初代教頭（明治9～10年）として有名です。彼はポール・ハリスと同じく、ロータリーの故郷ニュイングランドの出身で敬虔なピューリタンでした。「Boys, be ambitious : 青年よ、大志を抱け」と英文で記されたクラーク博士の胸像は全国的に有名です。もう一つ、北大事務局の玄関横にクラークの直接の薫陶を受けた「初代総長佐藤昌介先生」という銘板をつけた胸像があります。佐藤昌介氏は北大の歴史そのものでした。

札幌ロータリークラブのチャーターメンバーで初代から三期連続会長を務めた後、米山梅吉氏の推挙により第70地区ガバナー（1936～37）に就任しました。

ロータリーの始祖、ポール・ハリスはニュイングランドでピューリタンの祖父母の驕のもとに、少年時代を過ごしましたが、札幌ロータリークラブの初代会長佐藤氏もニュイングランドから来たクラーク博士から、ピューリタニズムの教育を受けたことに、浅からぬ因縁を感じます。「青年よ、大志を抱け」という言葉は、クラーク博士がアメリカへ帰国の際の島松における、あまりにも有名な別離の場面の言葉で、「馬上の訓言」という記録には次のように記

されています。「見送りに来た教え子達と力強い握手を交わし『元気で常に祈る事を忘れないように』と力強い口調で別辞を述べ、ひらりと馬に跨ると同時に、"Boys, be ambitious!"と叫び長鞭を打ち振るい振り返り振り返り、雪を蹴立てて林のかなたにその姿をかき消された」この名文により、ボーイズ・ビーアンビシャスは日本中に不滅の金言となりました。

しかしクラーク神話と言われる数々のエピソードの中で、事実反しているものもあります。クラークが島松における別離に際してかなり長い演説をしたという話もその一つです。「青年よ、大志を抱け、それは金銭や我欲のためでなく、また人呼んで名声という空しいもののためであつてはならない……」

北大本部にクラーク博士の言った全文を教えて欲しいという照会が、今もあるようですが、その人々が求めるのがこれなのです。『北大歴史散歩』（岩沢健蔵著）によると、この文章は、「北大略史」の中にあり、執筆者は北大予科の英語教師のポール・ローランド氏ということですが、「金銭や我欲のためでなく……」以下の部分は執筆者の主観的解釈と見るべきでありましょう。それにクラークが金銭や名声を貴からずとする発言をしたという説は、内容的にもひどい誤りとあります。シェルドンが、ロチェスターの教会の牧師に真意を誤解されたようにクラーク博士も真意を誤解されていました。

札幌農学校の開校式でクラークは学生に対し、壇上の黒田長官への注目を促し、諸君も努力

次第では、長官の如くに名声と高い報酬を得る可能性があるのだと述べました。また農場における実習作業に対しては一時間五銭の賃金を支給し、労働と報酬の観念を教え、学科においても各科目別に第一等者に八円、二等者に四円と言う奨金を与えることを制度化しました。すなわち金銭を卑しむという思想を彼はもっていないのです。

シエルドンはミシガン州ヴァーノンで生まれましたが、彼の理想主義は往時のフレンチ・インディアン戦争に従軍した、ニューイングランドの祖先達から受け継いだものです。

クラーク博士もニューイングランド出身で来札の15年前、アメリカ南北戦争（1861-1865）時の北軍の大統領リンカーンの奴隷解放の呼びかけに応じ、自ら志願して出征しました。「あの忌まわしい奴隷制度をこの地上から払拭したかった」と北軍が大義とした独立宣言の思想はクラーク博士の確固たるバックボーンとなっていました。

クラークとシエルドン、ニューイングランドにゆかりを持つ二人に共通していることは、「富を自力で得たものは、神の特別な恩恵を得たものと正当化されている」という考えです。シエルドンは日常の企業活動の中で、利益が得られるからこそサービスができるのだという次元からサービスを説きました。職業奉仕とは自分も成り立ち、他も成り立つという思考なのです。

クラークの発言として受け入れられるようになってしまった予科英語講師で宣教師でもあつ

たボール・ローランド氏の全文をご紹介します。

少し長くなりますが、なかなかの名文ですので興味のある方はお読みとりください。

"Boys, be ambitious!" "It has become proverbial in the school.

"Boys, be ambitious!"

Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, nor for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. This was the message of William Smith Clark.

この小文を書くにあたり、残雪がわずかに残る北大キャンパスを訪れました。札幌が今日あるのは、クラーク先生を通して、ニューイングランドの気風が大いに貢献したのだと思うときに札幌はいっそう貴いものになります。

(2014年5月1日)

『奉仕をシンプルに理解する』

《手あかにまみれた奉仕という言葉》

2560地区小山楯夫さん（新潟）の「service」と「奉仕」を考える」を興味深く拝見しました。

私は以前にも書きましたが、どんな言葉でも長い間使われていると手垢にまみれふやけてしまうものです。ロータリーの「奉仕」という言葉はその代表格といえます。ロータリーの世界では右を向いても左を見ても奉仕、奉仕の掛け声ばかりで、何か大切なものが失われてしまったようです。「奉仕」はもともと宗教上の言葉ですが、神への奉仕から「祈り」が失われたらどうなるでしょうか。ロータリーの奉仕から相手の幸せを祈る心が失われたらどうなるのでしょうか。今のロータリーは相手の幸せを祈る心を忘れた財団寄付が主流となったことは残念です。

また日本では奉仕という言葉は、主に年末大奉仕、奉仕の大バーゲンセール、奉仕品という風に商店の売り出しの時によく聞かれます。英語の「Service」の訳語「奉仕」という言葉は日本語にはなじみません。

“Service”の日本語訳を色々考えましたが、「親身になる」って。これが“Service”の日本

訳語」として一番ぴったりに合うように思います。

たとえば、社会奉仕とは“Community Service”の訳語ですが、社会奉仕というとか立場の上のものが、下のものに施してやる、恵んでやるというようなニュアンスがぬぐえません。社会奉仕とは「良き市民たれ」ということで、本来は自分の住んでいる市や町に「親身になる」ことでありましょう。

今、奉仕とは「親身になること」といいましたが、それなら職業奉仕とは自分の商売に「親身になる」こと。これが職業奉仕のすべてです。仕事をするとき職業奉仕などという言葉が頭の中をうろついているようではまだ本物ではありません。仕事をしているときは、自分の仕事に親身になること。職業奉仕をシンプルに考えてみてはいかがでしょうか。

前回、職業奉仕は知る (to know) より成る (to be) が大事だと申しました。ロータリーの職業奉仕の本質は、職業奉仕がロータリアンの生活の中に生かされてくるのでなければ、いかに理論に卓越していても無意味です。そこで職業奉仕をいかにしたら日々の生活の中に生かせるのかを申し上げてみます。

《職業奉仕を日常に活かすために》

職業奉仕を日々の生活に活かすための秘訣はあるのでしょうか。「四つのテスト」の【三

省】(さんせい)はいかがでしょうか。【三省】とは「論語」の学而篇に「吾日に吾が身を三省す」とあります。その意味は一日に何度も自分の言行をふりかえってみて、過失のないようにすることです。職業奉仕を会得するためには、毎日の行動が「四つのテスト」に倅っていないかどうか、一日三回は無理ですが、せめて一日に一度は反省したいものです。

私はあるロータリアンから次のような話を聞きました。「自分は永年出席100%を続けております。仕事が忙しかつたので、会長・幹事はなれませんでした。ただロータリーに入会して以来「四つのテスト」だけは30年の間、仕事をするときいつも心の中に持つておりました。そのおかげで私のような小さな商売をするものでも、ロータリーをやめなくてすみました」私はこの言葉を聞いてこれこそが職業奉仕の極意だと悟りました。

「真理とは単純にして平凡である」という言葉があります。同じように職業奉仕も単純にして平凡なものです。しかしこれを実践できる人は非凡な人でしょう。因みに三省堂書店の店名はこの論語からつけられました。

ロータリーの職業奉仕の最も大きな存在価値は、職業奉仕を常に心の中に置いておくことと無限に地獄に落ちないで済むということです。職業奉仕の究極の目的は自己滅却の奉仕“Service, not self”のことと云えます。エゴの否定はロータリアンに課せられた永遠の課題です。

今の自分にはとてもロータリーの唱える自己滅却の奉仕は無理だが、自分はその理想にいつ

か近づき、その理想を実現しなければならない。大切なことは、ロータリアンは常に理想と現実の距離を測ることにより、無限に地獄に落ちないで済むということです。

参考・引用文献 『私のロータリー』 森三郎氏

(2014年11月10日)

『職業奉仕はロータリーの生命維持装置』その1

〈ビジネスとノンビジネス〉

営利組織Ⅱビジネスは利益が結果のすべてです。構成員は利益の中から生活の糧を配分されます。構成員の行動は、利益追求のための行動となります。企業の場合は、「利益」という分かりやすい尺度があるので、利益追求のメカニズムは単純です。どんなに社会的に意義のある活動をしていても、利益を上げられなければ企業は存続できません。

しかし、ロータリーは非営利組織Ⅱノンビジネスです。この場合は、利益に相当する明瞭な尺度はありません。つまり、非営利組織（以後 NPO）は損益という明確なコンセプトがなく、ビジョンを共有するロータリアンの「自発的な寄付行為」のみによって支えられています。だからこそ、NPOにはマネジメント以前に大事なものがあります。それはパートナーの自発性を鼓舞するために「多様な物語」をマネジメントに織り込む必要があります。

NPOの無給のスタッフとなったロータリアンは、NPOのパートナーとして、組織の使命達成のために努力を惜しみません。その努力を支えるエネルギー源は、自発的なモチベーションにあります。「ロータリーの目的」（綱領）にあるとおり「奉仕の理念」を奨励し、育むこと

にあります。彼らの奉仕理念を鼓舞するものは、フェローシップに裏打ちされた同志としての連帯感です。それは何によって生まれるのでしょうか。

〈自発性と連帯感を強めるもの〉

どんな組織にも活動を始めた時の神話があります。その「物語」を共有することによって、同志としてのきずなが生まれます。我々はロータリーの物語を消してはなりません。ロータリーの心を鼓舞し続けて120年を経ても、ロータリー誕生の物語は今も、ロータリアンの胸に熱い灯をともし記憶されています。どのような志でスタートしたのか。誕生の時の難局をどう乗り切ったのか、時代の荒波をどのようにして切り抜けたのか。会員減少の危機を救ったのは何だったのか。「そのような物語が、ミッション達成のためにパートナーとしての連帯感を高め、救いを待つ顧客へのフィードバックを強力なものにしていけます」

我々は、より良い世界を築こうと、どれほど多くの不幸な人々に救いの手を差し伸べてきたことでしょうか。その努力を支えてきたエネルギーの源をたどれば、カルバンの職業天職論にまでさかのぼります。天職論に基づき、初期のロータリアンが開発したのは輝かしいロータリー哲学、「職業倫理訓」であり、「決議23-34」でした。

1929年の世界大恐慌の中でもロータリアンは、職業倫理訓を信奉してきたおかげで倒産

を免れ、ロータリーの職業奉仕の存在価値を世に広く知らせました。その結果、ロータリーの職業奉仕は不況に強い哲学だと評判になり、入会者が後を絶ちませんでした。職業奉仕はロータリーの生命維持装置です。この認識を忘れてはなりません。NPOのマネジメントに力点を置きすぎると、奉仕の心も干からびそうになる時もあるでしょう。そのような時、ロータリーをロータリーたらしめてきた職業奉仕の輝かしい栄光を我々の心は求めているのです。先輩が築いてきた偉大な幾多の「奉仕の物語」は、我々の心に潤いと力を与えてくれます。

(2020年5月6日)

『職業奉仕はロータリーの生命維持装置』 その2

〈ロータリーの語り部〉

ロータリーの物語を継承していくためには、語り部の存在が欠かせません。2003年の国際協議会でグレン・エステスRI会長エレクトは「ロータリーは世界最大のNPOである」と宣言をしました。ロータリーがNPOへの道をまっしぐらに進もうとしているとき、時のRI会長はピチャイ・ラタクル氏でした。ラタクル氏は、NPOとして国連と共に弱者救済という人道的奉仕に最重点を置くRIに対して警鐘を鳴らしました。

氏はタイの敬虔な仏教徒でした。私は、氏を近年まれにみる「ロータリーの語り部」として心から尊敬しています。ご存知の方も多いと思いますが、今一度、ラタクル氏のスピーチを紹介させていただきます。

『ロータリーは障害者、貧困、飢餓、疾病、識字率、世界の子どもたち、何十億人もの人を救い、豊かにしてきました。ロータリーが人道的経済的プログラムで嵐を切り抜けどれほど貢献してきたか、それは誇るに足ることです。しかしそれは立派なことであっても所詮外面的な

行いを見ているに過ぎません。ポリオとの戦いには勝つでしょう。あらゆる病氣、教育、貧困になおも手を差し伸べなければなりません。この世に善を成すためには、自らの力の限界を知らなければなりません。しかし力の源となる奉仕の哲学が事々に裏切られたのが今の世代なのです。私が申し上げたいのはロータリーの内面の問題です。ロータリーに課せられたもつとも重大な挑戦課題でありながらこのところずっと無視されてきた問題です。いく年もいく年も話題にもされず討議もされなかった挑戦課題、それはロータリーの金看板「職業奉仕」です。今もこれからも職業倫理の提唱と慈愛の心をロータリアン以外の人々に分かち与えていかねばならないのです。残念ながら私たちの多くがこの最も重要なロータリー哲学の真髄を忘れてしまいました。なんと恥ずかしいことではありませんか』

「古来、金を求めて失敗した例は枚挙に暇がないが、金を求めて失敗した例は寡聞にして聞かず」という例えの通り、善意の心を伴わない金銭奉仕には限界があります。RIが現代の社会はこうあらねばならないとして、ロータリーの会員がそのための道具に使われただけでは間違っています。またロータリーの基本理念を忘れて、社会の変化に対応していくだけでは人類の幸福は実現できません。正しいロータリー運動とは、ロータリーの会員が、運動をしながら成長していく場合であり、またロータリー思想が世間に広まり、世間の人々が成長していく場合

が、正しいロータリー運動であります。自らの存在理由を見失い、NPOとして自らを定義しようとしたときに、RIという組織は、組織の構成員であるロータリアンとの関連性を失い迷走するでしょう。

まさに「職業奉仕はロータリーの生命維持装置」であります。

(2020年5月12日)

『職業奉仕 (Vocational Service) のルーツ』

ロータリーはアメリカで生まれました。したがって当然、キリスト教神学の教えがその根底にあります。ロータリーで言う「奉仕の理想」とは、新約聖書のマタイ伝の「己の欲するところのものを相手に施すこと」という黄金説（ゴールデンルール）の事なのです。ではロータリーで言う職業奉仕 (Vocational Service) のルーツをマックス・ヴェーバーの『エートスの倫理』を引用しながら探ってみましょう。

『ピューリタンの伝統—ニューイングランド気質』

ロータリーが結成されたのはシカゴですが、そのアイディアが形成されたのはアメリカ発祥の地であるニューイングランドでした。ポール・ハリスは、ニューイングランドの自分の家系をたどるとピルグリムファザーズ（巡礼始祖）までさかのぼると、漏らしたことがあります。エリザベス一世統治下のイギリスで、宗教的迫害を逃れてオランダに渡ったピルグリムファザーズは、さらに1620年に意を決して「メイフラワー号」に乗り、アメリカに移住しました。40人の船員と102人の乗客を乗せ、3000マイルの冬の海を航海した全長90フィ

ト、180トンの「メイフラワー号」は、アメリカ史上もつとも有名な船です。

アメリカの歴史は、ピルグリムファザーズ、つまり流浪する父祖たちがプリマスに上陸したときから始まります。

ピューリタンたちは、英国国教会の腐敗に反対して、清潔で厳格な倫理的な生活態度を徹底的に求め、ついにクロムウエルはピューリタン革命に成功、1649年にはチャールズ一世の処刑という前代未聞の事件がありました。クロムウエルは神の栄光を増すため、世俗的な楽しみ、娯楽を一切退けてしまふのでした。

そもそも利潤追求を自己目的として天職とみなすような見方は、どこから来たのでしょうか。古代も中世もこのような天職の意味は全く知られず、むしろ労働をすることは、下品な根性として軽蔑されていました。天職という言葉は宗教改革のルターが作り出しました。自分と神との関係、自分の魂の救い、彼岸における自分の運命をこそ重視して、世俗的な日々の労働を道徳的実践の最高の内容として神聖化するものでした。この「職業聖召観」こそロータリーの職業奉仕 (Vocational Service) なのです。

〈カルヴァンの「預定説」〉

そしてまたピューリタンたちが拠り所としたのが、スイスのジュネーブで起こったカルヴァ

ン主義でした。カルヴァンのあの超絶した恐るべき「預定説」とは、神はある人々には永遠の命を、他の人々には永遠の死を定め給うたのです。人は自分が選ばれた人に属しているか、それとも永遠の罰を承けた人に属するかと、自ら恐怖と戦慄をもつて問うことになります。カトリックの場合、平凡な人間の欠陥は教会の恩寵手段、例えば懺悔の制度によつて贖われうるようになっていますが、カルヴィニストの場合はそうではありませんでした。

こうしてピューリタンたちは一切の感覺的文化や感覺の喜びを避けると共に、ひたすら彼岸に向け、自己の魂の救いについての不安に戦きながら、自分のこの世における仕事を神への奉仕として営むのでした。ポール・ハリスもまたピューリタンの末裔である祖父母より、禁欲的な生活態度と、勤労に対する意欲を学びました。それと共に村の人たちの政治や宗教に対する大らかな心づかいも学びました。ニューイングランドの厳しいピューリタンの宗教的戒律が、後のロータリーの実践倫理の道徳となつて開花したのです。

《フランクリンによる倫理から営利への道》

このように「宗教的活動」そのものが実は「經濟的活動」で、営利事業は各人の私的な営みでありながら、しかもそれは神の所有物であり、各人は神からその管理を委ねられているのにすぎないのです。しかし鉄の意志をもつピューリタンといえども、聖書の説いたように「神と

富とに兼ね仕えること能わず」であります。高貴な精神によって支えられた生活様式は、富の蓄積によって破壊されることになりました。

そしてその宗教的な根が枯れてしまつて、初めて職業義務の思想と禁欲的態度は、その効果をこの世で發揮し始めました。もはや燃えるような宗教的情熱ではなく醒めた冷静な職業義務の思想が、神の国への思いでなくこの世への思いが、ベンジャミン・フランクリンに引き継がれていったのです。神の国を求める激情が次第に冷静な職業道徳にまで解体し始め、宗教的根基が徐々に生命を失つて功利的現世主義となつていったのです。

フランクリンの場合には、富裕に至る道は、同時に道徳的完成への道だと考えられていました。すなわち、勤労、質素、周到と言つた道徳の実践の結果は必ず利益獲得となつて現れるほかはなく、利益は倫理的な諸徳性を現実に実践したことの結果であるとみなされました。つまり、営利のための努力と道徳的完成のための努力が同時に一つの事柄の二つの側面として存在していると云えます。フランクリンは宗教的レベルの天職論（神のみ心にかなう隣人愛）を、道徳として日常生活の中に職業義務の思想として提唱しました。彼は「ニューイングランド精神」を具現した人物というよりは「典型的なアメリカ人」、「すべてのヤンキーの友」、「賢人」などの呼称が示すように、アメリカ全体の「精神的父」のような存在でした。その影響力は大きく、ポール・ハリスの「ロータリー」は宗教でもなければ、その代用物でもない。古くからあ

る道徳観念を……」という言葉は、ロータリーにおける信仰の自由の表明であり、フランクリンの功利的現世主義に根ざすものでありました。またフランクリンが「自伝」に記している「徳を得るための13の項目」は、ポールが祖父母から習った道徳、すなわち、犠牲、献身、名誉、友愛、誠実、勤労、質素と同じものでした。そして、ロータリーにサービスという概念をもたらし、アーサー・フレデリック・シェルドンの「奉仕に徹するものに最大の利益あり」というモットーもこの実業倫理主義に基づいたものと思われれます。ロータリーは「神を抜いたピューリタニズム」と言えましょう。

(2014年11月25日)

『職業奉仕の終焉』

今年度から始まった「会員特典プログラム」

すでに、御存じの方もおられると思いますが、ラビンドランRI会長が、サンパウロでの国際大会最終日に、突如今年度の7月1日から新たに導入される会員特典プログラム「ロータリーグローバルリワード」に関する次のような発表をされました。

『ロータリーの会員は世界中の数百もの企業・ビジネスから提供される特典を利用でき、参加企業の数も現在も増えている。このプログラムには、「ロータリアンが日々の生活のさまざまな場面で利用できる特典が含まれており、利用の度に財団に寄付が送られる特典もありません」そして、このプログラムは、会員の満足度を高めて会員増強につなげることを目的としています』

組織にとって会員数の停滞は衰退と死の始まりであります。そこで起死回生の策としてこのような特典プログラムが生まれました。これを知って、職業奉仕論に固執するネオコンロータリアンの私は、ついに「来るべきものが来たか」という思いが一瞬頭をよぎりました。しかし、このプログラムは唐突に現れたものではなく、その前に数々の伏線がありました。以前か

ら職業奉仕はR-Iでは死語となり、すでに落日の職業奉仕となっていました。

2011年11月R-I理事会は、地域社会のリーダーや、退職した人や、現在専門職や仕事に従事していない人が含まれている、現在の多様なロータリー・クラブの会員に配慮して、ロータリー・ブランドを強化するために『ロータリアンの職業宣言』を修正して、職業人にも一般の人にも通用する『ロータリー行動規範』を創設しました。このことは事実上職業奉仕の終焉であります。

次いで、2014年10月の理事会において、ラビンドラン会長エレクトの提案によって、ロータリアン同士の物質的金銭的な相互扶助が認められるようになったため、長年ロータリー運動の精神的支柱であった「事業や職業における特典をほかのロータリアンに求めない」という「職業奉仕の中核精神」が消えてしまいました。

次いで、各地区のガバナー宛にラビンドラン会長より『サンパウロ国際大会にて発表したように、2015年7月1日より、新しい会員特典プログラム「ロータリーグローバルワード」が全世界で開始されます。各地区でこのプログラムの周知と推進を行うために、皆さまのご協力を賜りたく「地区ロータリーグローバルワード委員長」を7月15日までにご任命ください。この重要な会員特典プログラムの開始にあたり、皆さまのご協力を何とぞお願いいたします』というメールが届きました。

これによりロータリーの使命を日本人が職業倫理に求め、アメリカのＲＩ本部が財団拡充に求めるという意識の違いが明瞭になりました。ＲＩ会長の方針は尊重されるべきであります。

しかし、源流の会の皆さんは、「ロータリーリワード」に対して、ロータリーのリーダーとしてどのようなご意見をお持ちでしょうか。新しい酒は新しい革袋にという言葉の通り、このＲＩの変化を容認されているのでしょうか。あるいは等閑に付されている方もおられるでしょう。日本のロータリアンにとって職業奉仕というのは愛の実践であって、あくまでも「個人の規範」たる倫理の問題です。

しかし我々職業人はＲＩという集団の構成員として組み込まれています。集団には集団を維持、発展させなければならぬという使命があります。この使命に応えるのが集団構成員に課せられた義務であって、これが「集団の規範」たる道徳です。

ここで問題になるのは、理想的な社会としては本来、愛の実践という「個人の規範」が優位に立つべきなのに、これは心の問題にとどまり、現実の社会は権力を伴う「集団の規範」が上位にあるということです。

問題は、個人の規範と集団の規範の乖離をどうするのか、どうアウフヘーベンするのかということでしょう。ラビンドラン会長により、ロータリーの金看板は降ろされました。源流の会の諸賢の方々はどのようにこの問題をお考えでしょうか。各クラブからこの問題についての質

問があれば、どのようにお答えになるのでしょうか。お聞かせいただければ幸いです。

私は次の機会にこの問題を、理念的に、組織体として、経済史的な視点から考えてみたいと思います。

(2015年8月4日)

続『職業奉仕の終焉』

ロータリーは円形ではない。楕円形である。

これからの職業奉仕の在り方を皆さんにお伺いしましたところ、早速私の畏友、同期の廣畑PDG、日頃敬愛する服部PDG、刀根さん（敦賀RC）から、示唆に富んだご意見や資料をいただき感謝しております。

職業奉仕は“Vocational Service”の訳語です。本来ロータリアンにとって職業は“Vocation”（天職）だったはずです。

この初期ロータリーのプロテスタンティズムの倫理が、日本の伝統的職業観と見事に共鳴して、私たちの先輩は熱狂的にロータリーを信奉しました。職業奉仕こそロータリーの金看板だ、などというのは日本の風土が生んだ言葉です。

長らく日本では、ロータリーとは何かという問いは、職業奉仕とは何かという問いに置き換えられてきました。個人の規範としてロータリー運動を一元論的に形而上の問題としてとらえてきました。

しかしロータリーには、個としての個人の働きと全体としての組織の働きがあります。その

働きが均衡するところに組織は成立し維持されます。

「真理は円形に非ず、楕円形である」という内村鑑三の残した好きな言葉があります。円は中心が一つですが、楕円形には中心が二つあります。世の中のことは、中心が一つしかないという考えからは争いが生まれます。常に全体と個、現状維持と改革、といったように二つの中心ものを考えることによって、調和を維持しながら、現状から発展させていくということが可能になるのではないでしょうか。

ロータリー運動にも2つの中心点があります。それは前回も書きましたが1つはロータリアン個人の規範と、もう1つの中心点は集団の規範です。それぞれの規範は、没交渉の中心ではなくて、ロータリアンとR.I.という関係性の中で繋がっている中心です。個人と全体というのが、切り離せない関係の中にあって、どうすれば我々のロータリーが良くなるのでしょうか。そのためには、個は全体を思い、全体は個を思う必要があります。

ロータリーは創立当初より、たがいの文化的な価値の違いが唱える「否定」を潔しとせず、これを超越することによって障壁のすべてを乗り越える生き方を求めて努力してきました。ロータリーは意見の異なるものと対決するのではなく、これらが持つ価値を止揚**アウフヘーベンするものです。

アウフヘーベンとは、違った考え方を持ち寄って議論を行い、そこからそれまでの考え方と

は異なる新しい考え方を統合させてゆくこと、より高次元の段階を導くことです。

ロータリアンが自分の職業に誇りを持ち、自分の職業を通じて地域社会に奉仕するという基本的態度をとりながらも、本質的にはロータリー運動は国境を越え、人間を人間として結び付け助け合うようにさせるものです。

職業奉仕は日本のロータリアンの精神的支柱であり、日本ロータリーのアイデンティティーです。職業奉仕の精神をできるだけ堅持しつつR Iの方針に協力してゆく道を探りましょう。最期に元R I理事の言葉をお伝えします。

「そもそもわれわれ日本のロータリアンは、ロータリーがどうあるべきか、今R Iがどんな方向へ舵取りをしたいのか、を恒常的にしっかり議論する場を持つ必要があると思うのです」「日本のロータリーの存在価値を示していきたいものです」と述べられていました。

(2015年9月24日)

『職業奉仕はロータリーのアルファ・オメガである』

今年のサンディエゴの国際協議会では職業奉仕に関する講演は予期した通り皆無でした。しかし、マイケル・マクイーン氏の『21世紀における会員組織』という講演は私に大きな共感を与えてくれました。講演の要旨を抜粋します。

『今後、ロータリーが変化を取り入れるにあたってとても重要なのは、ロータリーをロータリーたらしめているDNA、つまり、決して変わらない価値観、優先事項、奉仕への献身を絶対に見失わないことです。つまり決して変わらないロータリーの本質と存在理由を念頭に置いて変化することです。そのための最良の方法は、『ロータリーのDNAは何か』という問いへの答えを明確に理解することです』

マクイーン氏の言葉のとおり、RIの方針がいかに変化しようとも、我々日本のロータリアンは、ロータリーをロータリーたらしめているDNA、つまり、ロータリーの本質と存在理由を大切にしてゆかねばなりません。「ロータリーのDNAとは何か」という問いの答えを明確に理解することです。

そのためには、あくまでも愛の実践という「個人の規範」である職業奉仕への献身を絶対に

見失わないことです。ここで大切なのは「時代に即すことと、妥協することは違う」ということです。時代に即すためにその組織のDNAをあつかりと捨ててしまうような組織は長続きしません。信じる土台がなければ、たやすく流されてしまいます。

ロータリー運動とは、慈善団体、寄付団体ではありません。奉仕とは相手の不幸を自分の不幸としてとらえる純度の高い心の境地のことを云います。自らの存在理由を見失い、代わりにボランティア団体として自らを定義しようとしたときに、RIという組織は、組織の構成員であるロータリアンとの関連性を失い衰退・迷走するでしょう。

現在のロータリー運動は、国際ロータリーの提唱する実践プログラムばかりが前面に押し出され、先輩が開発した優れたロータリー哲学が忘れ去られ、それを正当化するようにRI理事会では「いつまでも1923年代の考えでは困る」「過去に耽溺するよりも未来の夢を」と考えているようです。しかし歴史というものは各時代の課題の解決に向けて、その体験的知識の上に、現在と未来とを考えようとするまことに貴重な思考であるという事実が、どういうわけか、最近、忘れられてしまい、ロータリー運動の実情は単なる偽善的かつ断片的な金銭的奉仕活動となっていました。

職業奉仕はロータリーの《アルファでありオメガ》であります。アルファとはギリシャ語アルファベットの最初の第一字、オメガとは最後の文字を表します。アルファでありオメガであ

るとは、事の始まりであるとともに事の究極であるという意味になります。（※ヨハネの黙示録）

職業奉仕はロータリーのアルファでありオメガであるということは、職業奉仕はロータリーの始まりであるとともにその行き着く究極である、すなわち、ロータリー運動にとって職業奉仕は「全て」であり「普遍」であるという意味です。

（2015年10月21日）

第三章

我々はどこへ行くのか

塚原房樹

『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』

世界は一つになるか I

「ロータリアンの広場」には大変ご無沙汰してしまいました。

2017年6月、源流の会で発表した「ロータリー、来し方行く末」に多くの方々から反響がありました。「ロータリーの未来」、特に情報革命後、市場経済がますます透徹してゆく流れと、もう一つは市場を否定するがごとき「ボランティア経済」の進展の流れについて皆さんから大きな関心をいただきました。ただ講演時間の制約がありましたので、舌足らずの感が否めませんでした。

そこで改めて加筆の上、広場の原稿として書き直すことにしました。

ロータリーソングの一節に「世界を一つに結ぶロータリー」というくだりがあります。果たしてロータリーは世界を一つに結ぶことができるでしょうか。

私と同期のガバナーの石黒R1理事から『ロータリーは岐路に立っていることを実感。会員数の偏在に伴うゾーンの再編成や多様性という価値観の変化は従来の日本のロータリーの心と大きく変化していることを実感。日本のロータリーが世界と乖離しないように理事として微力

ながら精一杯努めてゆきたい』という便りをいただきました。

しかし世界は一つになることが難しい。もう20年前になりますが、ハーバード大のハッチンソンの著書『文明の衝突』により、世界に八つの文明圏があり日本文明はその一つであることを知らされました。我々日本人は、我々文明のユニークさには少し酔いますが、他方ではその孤立性に慄然とします。

『文明の衝突』は20年も前の本なのにまだ新鮮さを失っていません。本書に予言された事の多くが現在現実になっているのに驚きました。出版の数年後に起きた9・11の背景・要因もよく分かりました。さらに私がざっと思いつく限りにおいて「的中」したと言える事象を列挙しますと、以下のとおりです。

- ・ 米国を含む西欧キリスト教文明とイスラム文明の衝突
- エジプト、リビアなど「アラブの春」＝民主化を経験した大半の国で国内の対立や衝突が起きるなど混乱。遅れて反政府デモが盛り上がりを見せたシリアでは泥沼の内戦状態に突入、IS（イスラム国）の誕生につながった。
- ・ 西欧キリスト教文明とロシアを中心とした東方正教会文明の衝突。
- ・ 中華文明と西欧キリスト教文明の対立と航行の自由作戦。

・日中・日韓間における歴史問題。尖閣・竹島の領土問題。

「文明の衝突」の中の論点は、アメリカは過去の西欧の歴史から、自分たちの文明こそが普遍的なものだと錯覚し、多文明の存在を十分に理解せず、反発を招いているということです。

そして何が衝突の根本的な原因になるかについて、それはイデオロギーや経済や人種ではなく、「文明」という言葉で表現されています。

このように宗教・言語・生活習慣・社会制度などによって特徴ある文明社会が、世界中の地域で勢力を持つことによって、対立が発生しているのが、現代社会です。「いずれ世界は統一され、人間は共通の価値観を共有できる地球市民になるだろう」という観測に対して徹底的に反論する内容でした。人類の歴史と今世界で実際に起きていることを客観的に観れば、そんな希望的観測は殆ど実現しないことがわかります。

ネットが普及しようが経済的にボーダレスになろうが、混ざり合って価値観が似通ってくるなんて事はありません。厳然として民族紛争・宗教紛争・隣接する国家間の衝突や不仲が多いのが現状です。人種等の観念が薄れる気配も、国境がなくなる気配も、世界のどこにもみえません。逆に世界は「カオス化」する。ますます複雑化した先の見えない場になっていくようです。

欧米が生き残れるかどうかは、自分達の西欧的アイデンティティを再確認しているアメリカ人や西欧人が、自分達の文明は特異であり、普遍的なものではないということを認め、非西欧的社会からの挑戦に備え、結束して、みずからの文明を再建して維持していけるかどうかにかかっています。また、異文明間の世界戦争を避けられるかどうかは、世界の指導者が世界政治の多文明性を理解し、力を合わせてそれを維持しようと努力するかどうかにかかっています。この様な地球環境の中で、RIはどのようにして文明の異なる国のロータリークラブを管理してゆくのでしょうか。次回はそのあたりのことを考えてみたいと思います。

(2017年10月31日)

『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』

世界は一つになるか II

文明がそれぞれ異なる世界各国のロータリアンは、RIのグローバルなクラブ管理にどう対応していけばいいのでしょうか。

ロータリー章典には国法の順守として「各ロータリークラブは、クラブが存在している国の法律に従うことが期待されている。ロータリアンの間の理解と親善を深めるにあたって、ある国においては合法的であり、慣例として行われている多くの事柄が、他の国においては違法であったり、慣例的行為でない場合が存在することも認識されなければならないロータリアンは他国の法律や慣習を批判したり、干渉したりすることを避けるべきである」とうたわれている。我々ロータリアンは、このことを踏まえて、それぞれの出身国の文明は違うが、インターナショナルな組織の「目的」を推進するために選ばれたのです。

では、RIは「文明の衝突」する地球環境の中で、どのようにして文明の異なる国のロータリークラブを管理してきたのでしょうか。

国連と長い関わり合いを持つロータリーは、民族的、国家的、社会的、宗教的緊張が高まっ

て平和を脅かしている現在の世界が直面している諸問題はよく承知しているはずです。

もともとR Iは当初から各クラブの自治権を尊重して、寛容と多様性を柱にクラブを管理してきました。従ってクラブ定款を、国家法を解釈するように解釈したら間違いです。R Iの基
本方針には『管理に関する定款及び手続き上の制限は、ロータリーの根本的かつ比類のない特徴を保持するために必要な最小限度にとどめられている。特に地方的実情において、国際ロータリーの方針を解釈し実行するにあたり最大の融通性を認めるものである』と明記されています。

とにかく今日のようなロータリーを築いたのは、ポールの寛容を重んずる温かい人柄による
といってもよいでしょう。彼は喧嘩になるような問題の議論は避けて通れといっています。国際ロータリーの決議ではしばしば「推奨されている」=recommended、奨励されている=advisable、勧告する=urge、反対するものではなく=not adverseなどと柔らかな表現を使っています。

ローカリズムに対する配慮がうかがえます。さらに、2016年の規定審議会では各クラブに大幅な柔軟性が認められるようになりました。

話は変わりますが、1905年、初期資本主義がピークを迎えたとき、資本主義の欠陥を補うために「何か良いことをしようよ」とロータリークラブは四人で始めました。

もともとクラブは、アメリカ移民がフロンティアで助け合って生きてゆくためにつくられた数えきれないほどの「結社」の同義語と考えられます。

しかし、フロンティアの開拓民達が助け合って生きてゆくために、各種の「結社」をつくる必要があつたことは分かるにしても、それだけではアメリカにおける「秘密結社」の隆盛を説明することにはなりません。フロンティアという条件のほかに、アメリカという国の基礎を作ったアングロサクソン系、つまり英国系文化に触れなければなりません。ロータリークラブの歴史をたどつてゆくと、「フリーメイソン」という古い結社に行き当たります。さらに「フリーメイソン」のひもをたどつてゆくと、ひもは大西洋を渡りイギリスへとつながっています。その源は、WASPの人たちです。

WASP（ワスプ）は、ホワイト、アングロサクソン、プロテスタントの頭文字をとった略語で、アメリカ合衆国の白人のエリート支配層をさします。

フリーメイソンはWASPの支配階層の集まりを意味するようです。「メイソンでなければ出世できない」という言葉はWASPの支配を象徴しています。アメリカの国語が英語であることに典型的に表れています。

フリーメイソンの会員になるには、現在でも難しい手続を必要としますが、アメリカの初期のフリーメイソンの中には当時最高の名士やエリートの名が多数見受けられます。たとえば、

ベンジャミン・フランクリンやジョージ・ワシントンのような当時のアメリカを代表する人物の名前が見られます。ちなみにポール・ハリスもライオンズの創始者のメルビン・ジョーンズもフリーメーソンの会員でした。

かつてポール・ハリスは、自分の祖先をたどってゆくと、ピルグリムファザーズにまでさかのぼることができると語ったことがありました。ピルグリムとは、1620年、メイフラワーでアメリカのプリマスに上陸した英国のプロテスタント（清教徒）でWASPの人たちです。

ロータリークラブもWASPの人達が集まって誕生しました。今のRIのクラブ管理手法もやはり、エバンストン本部の欧米中心主義に偏っているように見えます。「世界を結ぶロータリー」になれるかどうかは、前回、「文明の衝突」の中でも申し上げましたが、エバンストンの人たちが、自分達の西欧的アイデンティティを普遍的なものではないということを認め、非西欧的社会のロータリアン達のために、より柔軟に多文明性を理解し、力を合わせてそれを維持しようと努力するかどうかにかかっているといえれば言いすぎでしょうか。ロータリーを愛するがゆえに、つい辛口のことを申し上げてしまいました。

（2017年11月3日）

『日本のロータリーと世界のロータリーの乖離』

世界は一つになるかⅢ

前々回、ハッチントンの「文明の衝突」に敷衍（ふえん）して、世界は一つになることは難しいと述べました。何か私がロータリーの話を忘れて、「文明の衝突」の話にばかり熱中しているように思われるかもしれませんが、変わりゆくロータリーを考えるためにハッチントンの著作を引き合いに出しました。

又前回は、RIのクラブ管理とアメリカの精神的支柱となった「WASP」に触れました。確かにロータリーは、一つの国際組織として、人種宗教の相違を超えて、他人のために奉仕するという理想のもとに結集した団体ですが、これを具体的な行動に移すにあたつて、それぞれの国と風土の中で培われた国民的情緒を無視し、一律の規範、指針を押し付けようとするならば、それは極めて危険であります。その背景として「WASP」に触れました。

ロータリー運動は、奉仕を志す人々の「集まり」であつて、国連と違い、力で文明の衝突する「世界を一つ」にしようとするものではありません。

今回は、視点を変えて、非営利組織に変身したロータリーについて述べてみます。世界史

上、近代になって我々は三つの産業革命を経験しました。今起きている第三のそれは情報革命といわれますが、これは前の二つと違って、さっぱり社会全体に雇用を増やしません。革命のかなめになる技術体系に雇用創出効果が少ないのです。

その上現代経済の立役者は多国籍企業です。彼らは国境を越えて無政府的に行動します。国際的にこうした厳しい時代にこそ、ロータリーは存在意義を高めるべきでしょう。

なぜなら上述の二つの怪物「市場経済」と「多国籍企業」の支配する環境の中では、必然的に大失業、大規模の資本過剰、価格破壊、そして大不況が出てくるからです。こうした「弱肉強食」の社会から生じるアンバランスは、これまではケインズの福祉政府が救済の手を差し伸べてきました。しかし現代の「市場経済」という怪物は、性質上、小さな政府を求めます。

もはや、行政には頼れないとすれば、社会的ひずみを補修する主体は民間しかありません。市民の地域社会に根ざすボランティア活動です。RIは、ロータリー活動をNGO、NPOの重要な一環として積極的に位置づけるようになりました。我々は、こういう時代の流れ、国際環境の動きを見極めながら、ロータリーの理論と実践を進めてゆかねばならないと思います。ボランティア経済の旗手として、ロータリーは前進しなければなりません。

次に、RIの非営利組織のマネジメントについて触れてみます。今や、ロータリーは世界最大のNPOを自負する非営利組織となりました。これは昔から続いてきた慈善事業とは全く違

います。かつてのロータリーは隣人への善意があれば、十分だと思っていました。

慈善事業が目指しているのは人々の苦しみを和らげることであつて、これが慈善活動をしている人の心の癒しとなっていました。けれどもその施しを受ける人の人生が変わり、それが永続的に続くなどという幻想は誰ひとり持っていないませんでした。

非営利組織の最優先課題は、良いことをするのは目標ではありません。良いことをするというのはお金を与えることを意味します。非営利組織では「成果」を上げるために、私たちは自分の目的、納得のいく「成果」を定義し、それを達成しようとする方向に変わりました。

我々はロータリーに入会するとき、NPOの会員になるとは思っていませんでした。情緒的クラブの中で親睦活動を大切にし、地域の人々に奉仕することで満足感を味わいたいと思っていた人々でした。

しかし、RIの非営利組織を支援するのも彼らですが、ただ彼らはRIが提供しようとするものを肯定することも否定することもできません。金銭的対価のない非営利組織において、RI理事会のマネジメントはとてつもなく高い水準を求められることとなりました。支援してくれるロータリアンが、何を価値あるものかと考えるかということを理解しなければ「成果」を上げることはできません。

そこでロータリーのリーダーたちは、2001年、国際ロータリーが奉仕の第二世紀を迎え

るに当たり「戦略計画」を成文化し、新しい組織のニーズにこたえることにしました。これは全世界のロータリアンが示した戦略的懸念に対応するためのものであるということです。「世界を一つに結ぶロータリー」にするために、ロータリーは時代とともに変化してゆきます。

《脱皮できない蛇は滅びる》というニーチェの言葉があります。日本のロータリーは世界のロータリーと乖離している。そのためには我々は脱皮をしなければならないといわれます。しかし、物事には必ず表裏があります。脱皮しても蛇は蛇です。我々は日本のロータリアンとして個人の基本軸はしっかりさせた上で、時代とともに変化するR Iの集団の規範に対応していかなければなりません。

(2017年11月10日)

ポール・ハリスの選択的受容『天職とロータリー』

1905年、ポール・ハリスがロータリーを作り始めたころ、シカゴの街には、「インチキ弁護士、やぶ医者、ペテン事業家」が横行していた。これらの人たちは、「3大疫病」と言われていた。ポールは「時代は挑戦している」と書いている。「昔は、事業家は金もうけばかりを考えていた。しかし、今は顧客、従業員、同業者、仕入れ先、一般の人々に対しても公正でなければならぬ」ポールはこのように職業倫理を強調した。

そしてこうも言っている。「社会に役立つ人間になる方法はいろいろあるが、最も身近でかつ効果的方法とは、自分の職業の中に見出すことができる」と。

ポールはかつて、自分の祖先をたどるとピルグリム・ファザーズまでさかのぼることができると言っていた。ピルグリム・ファザーズとは、イギリスの清教徒（ピューリタン＝プロテスタント）で、イギリスを追われて、メイフラワー号でアメリカにやってきた巡礼始祖達を指す。

ポールはこのような敬虔なキリスト教の家庭で育ち、プロテスタントの職業観をロータリーに取り入れた。それは職業への対処の仕方だけは取り入れるが、キリストの教えそのものは拒

否するという、選択的受容であつた。このために、日本人にもロータリーは抵抗なく受け入れられることになり、普遍性を持つことになった。ロータリーの成功の一つはキリスト教的色彩を抹殺したことである。成功の第二は、プロテスタンティズムの特にカルビニズムの「天職」理念を取り入れたことだ。

それでは「天職」理念とは何か。ルターもカルバンも職業に貴賤上下の区別なし、職業は神から授けられたものだから、これを汚してはならないと説いた。「祈りなさい、そして励みなさい」。禁欲的な合理主義に基づいて働くこと、その結果として得られる富を罪惡視する必要はない、というのがプロテスタンティズムの「天職」観である。

プロテスタントが出てくる前までは、アダムとイブが禁断の実を食べて楽園から追放された失樂園の世界であつた。人間は罪深く、苦しい労働を運命づけられている。だから労働や仕事は苦役である。それは自由や幸福の犠牲だとされていた。

しかしプロテスタンティズムは、神から授かつた仕事を成就する行為を推奨し是認する。これは、革命的大変化であつた。ポールはこのような「職業倫理」をロータリー哲学に注入した。それは他の組織には見られない独特のものであつた。

それでは日本の社会風土に、天職理念はなかつたのであろうか。答えはイエス、そしてノーである。が、どちらかといえば日本では、明治以前の時期には家業繁盛、家内安全、勤儉貯蓄

の社会雰囲気が強かった。言い換えれば、私的自分を公的自分に発展させる社会的土壌がなかった。私益から公益へという視点は薄く、世のため人のためという社会的心情を裏付ける理念には乏しかったのではないかと思う。

というよりも、近代以前の日本では、町人や農民は、経済活動の中にそれぞれのレベルで互酬的あるいは贈与・交換の共同体的伝統を温存していた。したがって、私的なものは、公的なものと離れがたく融和している状態といえる。ロータリーは私的なもの、私益に始まるがそれが「天職」理念を通じて公的利益、すなわち社会貢献につながることを重視する。ロータリーは4人のプロテスタントの信徒達から始まった。

次回は、プロテスタントとカトリックについて触れてみたい。

(2019年10月31日)

『ロータリーは非営利組織である』

社会セクター、非営利セクター、NPO、呼び名は何でも構いませんが、そうしたセクターの出現は近年の現象です。これは昔から続いてきた慈善事業とは全く違います。慈善事業が目指しているのは人々の苦しみを和らげることであって、これが慈善活動をしている人々の心の癒しになっています。けれども慈善事業によつて、その施しを受ける人の人生が変わり、それが永続的に続くなどという幻想はだれ一人、これっぽちも持っていない。

慈善事業はおよそ、150年ほど前に活動が始まりました。その後、ロータリーが誕生したころ、資本主義の欠陥あふれたシカゴの街にセツルメント運動、女性キリスト教禁酒同盟、救世軍などの社会改良運動が数々現れました。それらの中で救世軍のスープ接待所に注目してみましよう。

スープ接待所は今夜一晚、貧しい人々の飢えの苦しみを和らげるためにある、それが活動のすべてです。そしてその必要性がなくなることはないでしょう。街角に二人の子供を抱えた貧しい女性がいたとします。スープ接待所がこの三人に食事と一晚夜露をしのぐ場所を与えます。少なくとも今夜だけは、この貧しい女性と二人の子供は十分な食事をとって、おなかをす

かせたまま眠りにつかなくて済むのです。

これは苦しみを和らげることであつて、生活を変えることではありません。そして、そうした必要性が消えてなくなることはないでしょう。必要最低限はそれでいいのかもしれない。

「よいことをする」のは目標ではありません。「よいことをする」というのはお金を与えることを意味します。飢えに苦しむ人々がいなくなるような目覚ましい仕事をするというのが目標です。納得のいく結果を残すべきだ、大きな効果を上げるべきだ、そして最終的には、人類やコミュニケーションの変革につながるべきだという昔からの要求課題は、今、非営利組織に受け継がれました。

ロータリーの会合で、ロータリアンから、「近年のロータリーは会社経営と同じですね」という言葉をよく耳にします。非営利組織となつた現在のロータリーを理解する近道は、ドラッカーの非営利組織のマネジメントを学ぶことです。つまり企業と同じくロータリーの世界をビジネスの世界としてとらえ、「経営とは何か」というビジネスの論理を、ロータリアンは理解しなければなりません。

経営の神様、ドラッカーは50年前から、病院、大学、オーケストラなど「非営利活動の経営」に取り組んできました。最初のころそれらの人たちは驚いていました。「私たちが経営しているのは非営利組織ですよ。何のために経営しろとおっしゃるのですか。経営が必要なのは、ビジネスの世界ではありませんか？ 私たちは粗利益のことなど考えていませんよ」そこで

ドラッカーはこんな風に答えました。「損益を考えていらっしやらないからこそ、ますます経営というものが必要になるのです」

ロータリーはもちろん、あらゆる組織には戦略を考え抜くためのヘッドクォーター的組織が必要です。つまり組織のゴールを実際に達成できる手段を考える組織です。

財団法人を中心に活動する国際ロータリーの最高責任者（CEO）は目標を設定し、その後の行動計画と予算に責任を持ちます。理事会は事業を執行する部門に対し、計画ではあまり干渉せず、柔軟に対応するのが望ましく、成果を導くための人材や資金の配分、事業の進捗状況と業績評価について責任を持ちます。事業の執行部門は、事業の実施、目標、行動計画、予算に責任を持ちます。

ロータリーはかつて情緒的自由結社でした。しかし今はロータリー財団の使命達成のために、募金活動を主体とした非営利組織となりました。ロータリアンはもはやボランティアではない、非営利財団法人のために募金活動を行う無給のスタッフとなりました。立派な心構えだけでは足りないのです。ロータリアンは組織の経営手法として戦略計画とマネジメントを学ばなければならぬのです。今回は、寄付に対する日米の違いを述べてみます。

参考・文献 P・F・ドラッカー著 非営利組織のマネジメント

（2020年4月4日）

『ロータリーの主役は誰か』

イタリア・モンツァ市の市議会は、金魚を丸いガラス鉢で飼うことを禁じました。金魚鉢の側面が曲がっていて金魚には外界が歪んで見えるから、そんなところに入れておくのは残酷である、というのが提案の主旨です。ロータリー運動は金魚鉢の中の運動ではない、外界の変化と運動していなければなりません。

しかし、我々は、金魚鉢の中の金魚のように限られた非日常の世界から、自分を中心にロータリーの世界を見てきたのではないでしょうか。非営利組織となった現在のロータリーの大きな変化についてゆけず戸惑っているような気がします。思い切って金魚鉢の外へ出て、国際ロータリーとロータリークラブの構造変化を見てみましょう。

〈国際ロータリーの誕生〉

国際ロータリー（以後RI）は、シカゴクラブ内の喧嘩の火種を取り除くために1910年に全米ロータリー連合会として生まれました。シカゴクラブの喧嘩の種とは「奉仕哲学の追求」と「ロータリーの拡大」にありました。この二つはクラブには、荷が重すぎて、内紛が起

こりシカゴクラブは分裂の危機にありました。その危機を避けるためにチェスリー・ペリーは、RⅠを立ち上げ喧嘩の火種であった「奉仕哲学の追求」と「拡大」の二つをRⅠに委託しました。

RⅠはロータリークラブから委託されたことを行うための受託機関であり、連絡調整機関でした。ロータリアンはRⅠのために人頭分担金を負担します。ロータリアンはRⅠの主人公でした。

《主人公からパートナーへ》

しかしロータリーは先回、書いたように非営利組織となりました。非営利組織になったロータリーにとって第一に問われるものは、「われわれの使命・ミッションは何か」ということです。組織とは必ず何らかの目的があつて生まれます。ミッションとは組織の「存在理由」です。かつて、ロータリークラブの委託機関であつたRⅠは、今やミッション達成のために戦略を考え抜くためのヘッドクォーター・本部となりました。そしてミッション達成に欠かせない二種類のお客（クライアント）を持つようになりました。

第一のお客はロータリアンの活動によって生活が改善される人々です。ミッションは非営利組織の究極の行動目的であり、使命を達成させるためには、それを必要としている外部の人た

ちの存在があればこそで、組織外の人たちが第一に必要なのです。もう一方の第二のお客は資金を提供してくれる組織内のパートナーとしてのロータリアンです。パートナーは組織の活動に参加することで満足感や達成感を味わいたいと思っている人達です。

そのロータリアン達は組織が提供するものに「ノー」と言える人たちです。気に入らないことがあればさっさとやめてしまえる人たちです。

特に非営利組織は自発性を基礎としています。そのため、パートナーが満足しなければ成果を上げることではできません。パートナーとしてのロータリアンは大事なお客です。そのため、非営利組織のマネジメントにあつてはつい、内部の組織の論理を優先したくなります。しかしＲＩは「パートナーとしてのロータリアンを外部の活動対象としてのお客と同一視したくなるのは人情ですが、ミッションを達成させるためには、その焦点はあくまでも活動対象としての第一の顧客に絞らなければならない」と、くぎを刺します。

ロータリアンは、かつてＲＩの主人公でした。ＲＩのクラブに対する直接監督権は、職業分類と例会出席のわずか二つでした。例会は、異業種の会員と切磋琢磨して己の限界を知り、自分の職業への転機を見出す場所でした。職業奉仕はロータリーの「目的」に明記されており、ＲＩの指導指針でした。

ロータリーが非営利組織となった今、先人の知恵が開発した優れたロータリー哲学は希薄に

なり、ロータリアンは自発的に寄付をするRIの第二のパートナーとなりました。

《金魚鉢の世界》

「金魚鉢の中に生きている」金魚にとつては、その世界は、何の不都合もなく、生活の一部であり、整合的で理論化が可能なものです。金魚が見ているロータリーの世界は、今、私たちが見ているロータリーの世界とは違うと云いましたが、金魚の見える世界が今の世界より本質的に劣っていると断言できるのでしょうか？

非営利組織となつたロータリーにとつては、職業奉仕は、もはや過去の歴史的遺物となつてしまったのでしょうか。ドイツの文化相は、コロナウィルスにアートが蝕まれていく中で、『芸術は人類の生命維持装置である』という発言をしました。私は、どのようにロータリーが変わろうとも、『職業奉仕はロータリーの生命維持装置である』と信じています。折を見て職業奉仕の是非に触れてみたいと思います。

(2020年4月27日)

『ロータリー・ルネッサンス』

「ロータリーがその適正な運命を理解するとしたら、ロータリーは必ず進歩しなければなりません。時には革命を起こす必要があります」（シカゴ（1930年RI国際大会）

ハリスのこの言葉はロータリー史上、具体的にいつのことを指しているのでしょうか。それはロータリーが誕生して間もなくのことでした。ハリス自身の言葉によるとそれを「復興（ルネッサンス）」と表現しています。

ではロータリーの「復興（ルネッサンス）」を振り返ってみましょう。ハリスによるとルネッサンスの足音はロータリーの誕生間もない、1906年の後半ごろから始まり、1907年になってその響きようやく高く、1913年まで騒擾は継続したとあります。初期のロータリーにとって最大の変化は、会員相互の友愛と親睦にあふれた相互扶助の考え方が新しい考え方にとって変わられたことでありました。1906年といえばロータリーが誕生した翌年のことです。最初のロータリー・クラブに欠けているものを誰よりも最もよく認識していたのは創始者自身でした。

明敏なハリスは、早くも将来に目を向けていました。最初のクラブが成功裏に発足したからには、やがて第二、第三のクラブが続いて作られるだろうと確信していました。

会員が80名を超えた時点でハリスは、「互惠主義」の後押しをするよりも、クラブを新しい方向へ導くために手綱をひくことに重点を置きました。ハリスによる「復興（ルネッサンス）」の目的は、まず、第一にクラブの拡大を図り、第二に社会奉仕の理念を導入することでした。

しかし大多数の人々がすでに相互利益と友愛に満足している現状をたちどころに改革することとは至難の業でありました。そして、その復興は他の革命の場合と同様に幻滅、覚醒、焦慮、希望、杞憂、自暴自棄、乱闘、傷心の時代を経過し殆ど革命であったとハリスの著書（*This Rotarian Age*）にあります。

「同一の土地において二度預言者となることは困難である」、「先見の明のなかったことを告白せざるを得ない」、「わが希望を理解しえない友の冷淡な面影ほど世に寂しいものはないであろう」…復興の賛同者もほとんど無くハリスは孤独でした。

弁舌だけでは、ロータリー・ルネッサンスの目的を達成することはできませんでした。このような時、シカゴクラブは最初の公益事業に挑戦しました。それはシカゴ市内に公衆便所を創設することでした。これによりシカゴクラブはシカゴ市の文化事業団体として認められまし

た。そしてシカゴの一地方的集団から国際的に拡大し、大きな奉仕団体に発展しました。

もし「ロータリー拡大すべし」という主張がなければ、シカゴロータリークラブはどうなっていたでしょうか。ハリスによる初期の困難に満ちた「復興運動」が、世界中のロータリアンに「奉仕の理想」の上に、共に行動するという輝かしい特権を与えてくれました。ロータリーの現在があるのはすべて、ハリスの「ロータリー復興」の決断にありました。

本来、ルネッサンスとは14世紀イタリアに端を発し全ヨーロッパに広まった、美術、建築、文学における古典様式の復興運動でした。ハリスは初期の改革を「ロータリー・ルネッサンス」と表現しました。やはりその言葉に多少の違和感があつたのでしょうか。次のような言葉を補填しています。

「ルネッサンスは革命と違う。然れども両者は共に文明の進歩に与つて力あるものであつた。中世期の終幕を画し欧州諸国民の道徳的並に智的水準は完全に変化をきたした。文芸復興又は復活と称せられるその時代に於ける変化は殆ど革命であつた」と。最後にこの孤独なハリスの改革に協力を惜しまなかつたチェスレイ・ペリーとシエルドンの二人も、「ロータリー・ルネッサンス革命」の立役者であつたことを忘れてはなりません。

次回は、「ロータリー・NPO革命」について触れてみます。

(2020年8月17日)

『ロータリー・NPO革命』

「世界は絶えず変化しています。そして私たちは世界とともに変化する心構えがなければなりません。ロータリー物語は何度も書き換えられなければならないでしょう」

(This Rotarian Age)

このハリスの言葉は、ミレニアム・イヤー西暦2000年頃から2020年度の今日に至るまで、大勢のクラブ会長さんの就任挨拶に引用されました。

なぜ大勢のクラブ会長さんは、この言葉を引用したのでしょうか。それはクラブ会長さんにとってロータリーが、今までのロータリーと180度変わったように感じられたからでしょう。今までは、「ロータリーの目的」に明記されているように個人ロータリアンのつとめは職業奉仕を推進することでした。クラブには自治権があり、ロータリー・クラブが主人公であつて、RIはクラブにサービスをするための連絡調整機関であると思っていた会長さんが多かったと思いますが、現在のロータリーは「主権在民」が無視され、「主権在官僚」のようなシステムに組み上げられてしまったのです。つまり主権は、ロータリー・クラブからRIに移りロータリーはRI主導のNPOに変質しました。主権の交代を革命といいます。

クラブ会長さんは、PETS、地区協議会で次年度の戦略計画に沿ったマネージメントを学びます。そこにはかつての情緒的自由結社としてのクラブの面影はもはやありません。クラブの会員にとっては、なぜRIはそうに変化したのかという疑問が当然起こります。その疑問に答えるために、会長さんは「ロータリーがその適正な運命を理解するとしたら、ロータリーは必ず進歩しなければなりません。時には革命を起こす必要があります」という創始者ポール・ハリスの言葉を引用しました。創始者の言葉は、ロータリアンを説得するのに千金の重みがあります。

シオスタコーヴィチの革命交響曲は、1937年11月ロシア革命20周年を祝う演奏会で初演されました。「ロータリー革命」の序章はミレニアム・イヤー西暦2000年から始まりました。

2750地区の新藤信之PDGの「国際ロータリーの変質」「ロータリー失われた10年」によると、2001年規定審議会でロータリー組織の基本的要素を根本から変えようとしたRI理事会からの提案に端を発し、以後の規定審議会を通じてその後の10年余の間に、RIが本質的に変化しました。そして2019年の規定審議会では、RI戦略計画を新たに位置付け、財務を強化することによって、RIがクラブに代わって実質的な活動主体となり「世界的なネットワークを利用したグローバルな活動」を展開する新たな出発点に立ったと分析されております。つまり、ロータリーのNPO革命はミレニアム・イヤー西暦2000年頃から始動を始め、2020年までに徐々に外堀を埋めて体制変換がなされました。

では、なぜロータリーは非営利組織になったのでしょうか。それは情報革命後の社会変化が原動力となつています。情報技術の浸透は市場における情報流通を活発にさせます。そして完全情報に基づく市場経済を生み出していく力を持っています。ビル・ゲイツは「摩擦ゼロの資本主義世界」が生まれると表現しました。

つまり、排除性、競合性がなくなつてゆき、市場経済という怪物は、性質上「小さな政府」を求めます。もはや行政には頼れない。とすれば社会的ひずみを補修する主体は民間にしかない。市民のNPO活動です。

そしてNPOとなつたロータリーに、何より大きな影響を与えたものが、経営の神様、PFDラッカーでした。彼によると、『教会にせよ、病院にせよ、非営利組織には、「良き意図」で十分とする風潮があつた。良き意図には良き成果がなければ意味がない。誤つたことを正しく行うのも間違いだが、正しいことを誤つた方法で行うのも間違いである。それはミッションや理念が立派であつても、「マネージメントが不在であつた」の一点に尽きる』

かくして、RIはロータリー活動を「ミッション」、「資金源開拓の重要性」、「人の育成・トレーニング」を柱としたマネージメント主体のNPOとして位置づけ、ロータリアンは非営利組織の中の無給のスタッフとなりました。

(2020年8月20日)

『ロータリーはNPOとなり、情緒性を失った』

前回、ロータリーが非営利組織になった外的要因の一つとして、市場経済と小さな政府をあげました。しかしもう一つ大きな内的要因があります。それは、ロータリーの拡大によりロータリーの勢力地図が大きく変わったことです。急激に拡大の進んでいる国々の民族は極めて多様で、社会構造も宗教も価値観も、従来のキリスト教社会とは著しく異なる上に、その民族間の利害も錯綜して容易に一つにまとめることなど出来ません。ロータリーはもはやRIの手に負えなくなりました。成熟社会と未成熟社会を全く同一に律しようとする所に、そもそも無理があります。

また今後ますます進む価値観の分裂、多様化に対処する現実的解決策として、官僚的管理機構が強化されました。その結果、ロータリーは官僚による財団中心のNPOとなりました。

本来、ロータリークラブは情緒的結社でした。RIも、それが個々のロータリークラブの集合体である限り、何よりも情緒を大切にしなければなりません。しかし、アメリカ流プラグマティズムとでもいうのでしょうか。非営利組織となったロータリーは「情緒」に変えて「論理」という武器でクラブをマネージメントするようになりました。もともと、異民族の入り

交った多民族国家のアメリカでは、人々の価値観の相違から来る必然的帰結として、論理で相手を説得しようとはします。

しかもその論理は、それを行動に移した結果の有効度によって測られるとするプラグマティズムの立場を取りますから、論理の構築は自分の欲する結果を予定して立てられるのです。分り易く言えば、裁判に臨んだ時の弁護士の理論構成と同様だということでしょう。論理には常に出発点が必要です。そして、その出発点は常に「仮定」であります。だから、論理は論理だけで自己完結していません。みんなそのことを忘れていきます。論理の出発点の仮定となりうるものは、ミーイズムやエゴではない、日本が育んできた情緒という、優れて普遍的な価値でなければなりません。

では情緒とは何を意味するのでしょうか。お茶の水女子大学教授の藤原正彦氏によると『情緒という言葉は、意味が広くやや漠然としている。喜怒哀楽などの一時的情緒だけでなく友情、勇気、愛国心、正義感など、さらにはより広い高次なものまで含んでいる』としたうえで藤原氏は特に重要な情緒として、「他人の不幸に対する敏感さ」と「なつかしさ」をあげています。これらこそ、ロータリーの求める「奉仕理念」ではないでしょうか。ところが、ロータリーは拡大とともに情緒性を失い、今度は内部の組織の改革が、会員個人、個人の情緒を押しつぶしてしまいました。

そしてロータリーの価値を計る尺度は、それまでの内なる「情緒性」を封印して、ロータリー財団への寄付という現実的な眼に見えるものとなりました。管理社会化、個人疎外は世界の大勢ですが、ロータリーまでその波に飲み込まれるというのは悲しむべきことです。いつも云うように、クラブというものの存在価値は、むしろそういう管理社会の中の自由なオアシスたるところにあるはずです。

ロータリーの会合で、シニアリーダーの方々が、戦略計画について立て板に水のごとく、体系立てて、堂々と論陣を張られたりしたら、多くのロータリアンはもう神様みたいに、遠く畏敬の念を持って見守るでしょう。しかし、何かが違うぞという思いを持つ人もいるでしょう。リーダーは論理的に正しいことを説明しているということは分かっている、何かしっくりしないのはどうしてでしょうか。それは戦略計画の論理に「情緒性」が欠落しているから、ロータリアンは共感できないのではないのでしょうか。

大切なことは、論理ではなく「情緒力」なのです。

(2020年8月28日)

『奉仕のアウトソーシング』

ロータリーが生まれた、20世紀は資本主義経済が興隆爛熟した100年であったといえる。産業革命後の自由競争は優勝劣敗、弱肉強食の世界で、結果として格差が生まれる。更にその格差がまた格差を増幅していったのである。当時のヨーロッパでは、都市化、人口集中、労働条件の悪化などから過酷な労働環境で生活する労働者階級が生まれていた。

19世紀半ばに、カール・マルクスは見事な経済学的予見をした。彼はその見識に基づいて、労働者階級と資本家との争いは次第に暴力的になり、最後に前者が必然的に勝利し、資本主義体制は崩壊すると予測した。

イギリスやフランスやアメリカといった、産業革命の先鋒だった国々で「革命」がはじまり、それが全世界に広がるとマルクスは確信していた。ところが「資本主義者も字を読める」ことをマルクスは忘れていた。彼らも資本論を読み、マルクス流の分析の方法やその見識の多くを採用した。そしてマルクスの経済学に猛烈に反発した筋金入りの資本主義者たちでさえ、マルクスの知見を利用しながら、それに倣って自分たちの行動を変えた。イギリスやフランスの資本主義者は、労働者の待遇を改善し、福祉政策を導入した。おかげで資本主義は「革命」

を免れることができた。

だから二十世紀は自由開放市場主義経済と公的・私的慈善事業の世紀だったと言ってもよい。

慈善事業は宗教的または道徳的動機により、資本主義以前より古くから社会的に賞賛すべき善行として存在している。然しそれはあくまでも個人個人の善意によるもので、それぞれが分に応じて喜捨することによって成立っていた。ところが万人平等の自由競争、市場経済が想像を絶する様な巨大なものになり、それが国際的な格差にまでなってくると、通常の市民による個人的善意などでは手が及ばなくなってしまう。

そこに生まれたのが「他人の金を集めて善行をする」というフィクション（虚構）である。然もこのフィクションは公的国家的なものもとより、民間組織であっても、一見建前はまことに立派であつて申し分ない……だから虚構というのだが……。

RIも非営利組織となり構成員の金を集めて奉仕する、奉仕請負業となった。つまりロータリアンは自分自身の寄付を、ロータリー財団にアウトソーシング（外部委託）して奉仕の代行をしてもらうようになった。ただし、そこに問題がある。他人の金を他人のために使う場合、少数の個人が金を集めて、これをお互いに自分たちの知っている人に託して使うという場合には、金の出し手と受益者と受託者との関係はお互に顔が見えている。だから何も問題は起こら

ない。問題が発生するのは、そういう善行を志す人々の組織が大きくなり、顔の见えない仲間が主体性を持つ様になった時である。組織が大きくなって金の流れが見えにくくなる程不祥事の発生も多くなるし、その規模も大きくなる。勿論そういう大組織ではそれなりに規則も作り情報も公開している。

しかし、今度は情報というフィクション（虚構）も発生する。そしてこの情報統制の「ウソ」は金のおし手と受け手とその運用組織との個人的関係が稀薄になるほど大きくなってゆくものである。そもそも人間は、互に顔の見える相手との関係があつて初めて人間らしくあるという存在で、顔が見えなくなる程自己中心的になる。

そこに経済先進国の繁栄に潜む壮大な虚構がある。組織とは言うまでもなく人間の集団である。しかも大きな組織を維持運営するための必要経費は自分が払うわけではない。みんな自分の腹が痛まぬ他人（ひと）の金である。

その虚構の最大のものが国連を頂点にいたく多くの国際組織だが、最近、コロナを巡りWHO事務局長の発言が中国寄りだと問題になっており、国連について、批判の声が聞こえてくる。日本では国連というと、「世界平和に貢献する」素晴らしい組織だとの幻想があるが、国連というのは第二次世界大戦で日本、ドイツ、イタリアに勝利した戦勝国連合であり、第二次世界大戦の勝敗の結果を固定化するために組織された。

My ROTARYによると、ロータリーは、国連の特別機関の多数を監督するために、非政府組織として最高の位の諮問資格を与えられている。国連の各種機関やプログラム、各委員会や各局との関係を維持し深めているのが「ロータリー代表ネットワークである」と記されている。

我々はNPOの構成員として、人道的奉仕を世界的規模で行うために、ロータリー財団へ「奉仕のアウトソーシング」することとなった。

(2020年10月30日)

『NPOとなったロータリーが失ったもの』

不遜な言葉ですが、私はロータリーの始祖ハリスの歳をすでに超えました。米山さんの歳も超えました。畏れ多いことですが、釈迦牟尼は80歳で入滅されました。私はいたずらに、ただ馬齢を重ね85歳となりました。やがて、自分も束の間にしてその歴史の中に埋没してしまうことを知ります。いまだ、開眼できずにいる自分の不明を恥じ、忸怩たる思いに責められています。

人生とは何かという大きな問題に私は答えることはできません。しかし自分の過去を振り返り、なるほど、これが人生というものであるかとはつきり感じさせられるものがあります。私は自分ひとりの力で生きているわけではなく、自力で成長しているわけでもありません。書物を通じて接した様々な師、そしてロータリーの先輩・友人のおかげで今があります。人生を人生として私に確認させるものは、一言で言うなら邂逅：出会いであると言ってもいいでしょう。「ロータリーの目的」の第一に「奉仕の機会として知り合いを深める」とあります。私はロータリーによって結ばれた友情に人生の人生たる証を学びました。若しロータリーの会員に選ばれていなかったら、若しロータリーで巡り合えた友人たちがいなければ私の人生はどうなっていたであろう、そこに生ずるのは身の引きしまるような感謝の念と歓喜であります。

そのロータリーが変わりました。この世の中の一切のものは常に生滅流転して、永遠不変のものはないということは知っておりました。時代の変化に応じてロータリーの奉仕プログラムも変化していくのは当然と思っておりました。しかし、自分の人生の中で「NPO革命」を経験するとは思ってもおりませんでした。組織とか制度というものは、それが成長し膨張拡大すれば、その本来の目的を離れて独り歩きし始めるものです。

組織は常に「大きさ」を求めます。その本能的欲求を満たすために、RIは戦略計画の採用と組織構造の変革を進め、ロータリーは情緒的自由結社（クラブ）から非営利組織（企業）へと変わりました。

さらに今年度は、コロナウイルスのパンデミックにより、急速にロータリーは変わりました。国際大会、地区大会はもちろん、クラブのフェイスツーフェイスの会合は影を潜め、代わって、Web会議が主流となり、ロータリーが短期間でよくもこれほど大きな変化を遂げたものかと思ひ知らされました。ボルガー・クナークRI会長は『ロータリーが“オールド・ノーマル”（過去の常識）に二度と戻ることがないのははつきりしています。それは、胸躍るチャンスだと思うのです。ロータリーを見直し作り直す中で、革新と変化があらゆるレベルで起こっています。新たな柔軟性がデジタル文化と融合して、これまでに見たことのないような変化を引き起こしています』と述べています。

確かに、これからのロータリーの会合は、オンラインが主流となるでしょう。しかしデジタ

ル化と共に、かつてR Iの指導指針であったロータリーの優れた思想の数々も、二度と戻らない“オールド・ノーマル”(過去の常識)となってしまうのでしょうか。

ロータリーは優れた思想の殿堂です。その思想はロータリアンの「生きる糧」であり、「みちしるべ」でした。昔、私は札幌東ロータリークラブの会員に推薦された時、心の躍るような感激を覚えました。ロータリーに入れて頂いたという感謝の気持ちが心に湧きました。

私は自分自身に問いかけました。選ばれて何をするのか。いうまでもなくロータリーの目的と精神を実現するためであります。そのためには「ロータリーとは何か」を知らねばなりません。「ロータリーとは何か」という、この疑問ほど私を悩ませたものではありません。当時はロータリーの文献は少なく、いたずらに私の模索が続きました。

そのような時クラブの長老から「決議23-34」の存在を教えられました。その第一項は、私が求め続けていた「ロータリーとは何か」という疑問に「ロータリーは人生哲学である」と明快に答えてくれました。私は覚醒しました。

“Fundamentally, Rotary is a philosophy of life”

(ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学である)

それは利己的な欲求と義務およびこれに伴う他人のために奉仕したいという感情とのあいだ

に常に存在する矛盾を和らげようとするものである（決議23―34）

この決議は「セントルイス宣言」という愛称が与えられるほど、情緒と論理の均衡が見事に調和しています。しかし非営利組織となったロータリーの論理からすれば情緒などは単なる空論にしかすぎないでしょう。RIの云う通り、この決議の人生哲学など今のロータリアンには無縁であるかもしれません。

しかし、現実がそうだからといって、ロータリーがその理想まで捨ててしまっていないのでしょうか。現実がそうだからこそ理想の光は一層輝かさなければなりません。建国の精神、建学の精神というように、いかなる組織においても、その『初心忘るべからず』です。それを弊履のごとく捨て去って現実に押し流されるのなら、もはやその組織の存在意義はありません。ロータリーは非営利組織となりました。しかしロータリーはあくまで奉仕の人生道場としての使命を忘れてはなりません。今は昔のように、厳しく新会員を指導してくれる長老会員は希少となりました。またおられても、「物言えば唇寒し」で発言されなくなりました。私は、馬齢を重ねましたが、限りある残りの時間の中でこれからも、オールド・ノーマルとなってしまうた優れたロータリー思想を、再び新たな常識（ニュー・ノーマル）として検証してまいりたいと思います。

（2020年11月12日）

『新しい酒は新しい革袋に盛れ』

12月17日にロータリーの未来形成「Shaping Rotary's Future」のオンライン会議が開催され、日本のロータリーの指導者に（少し大げさですが）激震が走りました。かねてより予想はしていましたが、RIのガバナンスもいよいよそこまできたかという思いに駆られました。

しかし「未来形成委員会」の提案は官僚支配となったロータリーにとっては至極当然の成り行きです。ポール・ハリスは「ロータリーがしかるべき運命を切り開くには、私たちは常に進化し、時には革命的にならなければなりません」といいましたが、その言葉の通りロータリーは、ロータリークラブが主人公でしたが、西暦2000年「ミレニアムイヤー」を機にロータリークラブに替わり、RIの官僚が主人公となりました。組織の支配者層の交代を革命といいます。革命というと武力闘争が想像されますが、もちろん、今回のNPO革命はRI理事会主導の無血革命といえます。

100有余年の間、「人生の道場」として職業人が信奉してきた情緒的結社であるロータリーは、官僚支配の非営利財団として革命的に変わってしまいました。我々はロータリーに対する旧来の認識を新たにしなければなりません。ロータリー革命以前の職業奉仕、ロータリー

道徳律、決議23-34の根底にあるロータリー哲学はもはや過去の歴史的資料となりました。ロータリーを隆盛に導いた比類なき「職業分類制度の原則」と例会への「規則的出席」もないがしろにされ、地区組織もグローバルなガバナンスモデルが提案されました。革命とは過去の思想、体制の否定です。

RIの未来形成委員会の新しいガバナンスの提案は、辰野RI理事の言葉を要約すると、「地区はなくなり、世界を102の地域にする。日本はその一地域となり地域リーダーが配置される。2030年にはガバナーを廃止」ということでした。

『新しい酒は新しい革袋に盛れ』（マタイ伝）にあるこの言葉は、組織の体制が変わり、新しいガバナンスを実行するには、それに応じた新しい形式が必要だということです。いつまでも古い形式にばかりこだわってはいならないという「例え」でしょう。

ロータリーの未来形成プランは、非営利組織となったロータリーの新しい革袋なのです。ドイツが生んだ今世紀最大の思想家、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の著者M.ヴェーバーの『支配の社会学』によると、

①「官僚制」とは「合法的支配」の最も合理的な純粹型である

②「合法的支配」は「法の支配」であり、制定規則の順守が貫徹される

組織への協力は標準化された手続を順守し、標準化の完成度を高めることにありま

す。組織の標準化とはグローバリズムにあります。グローバリズムの特徴は世界規模での単一性・効率性・同質性・経済性の増進にあります。

まさに今回のＲＩによる「未来形成」の発議は、官僚制によるグローバルな組織の標準化にほかなりません。ロータリーの未来形成について「それはおかしい」とか「それは我々の目指す方向ではない」と云う職業奉仕に固執するネオコンは淘汰整理されるでしょう。もちろん、ロータリーの未来形成のガバナンスを受け入れ新しいロータリーとともに歩むという選択肢もあるでしょう。

ロータリーが非営利組織となり、かつてのロータリーの栄光が失われるということが、避けられない事実となっても、その事実に対してどんな態度をとるか、その事実はどう適応し、その事実に対してどうふるまうか、『夜と霧』の著者 فرانクルは、「その運命を自分に課せられた「十字架」としてどう引き受けるかに、生きる意味を見いだすことができる」と云いました。態度価値とは、人間が運命を受け止める態度によって実現される価値であります。

人間に残される最後の自由は、自分の態度を選択することだ。

(2020年12月28日)

『ロータリーも免れ得ない組織の宿命』

凡そ人間の営む組織というものは、政府であれ民間団体であれ、大きくなればなる程官僚化してゆきます。そして官僚化すれば官僚の本能として無限に拡大膨脹を求め、他の組織の領分まで侵奪しようという欲望に駆られます。

これはもう善悪の論理を超越した本能ですからどうしようもありません。人間のやることなど「初めに本能ありき」で、理屈は後からついてくるものです。ロータリーの増強にしても同じで、「先ず初めに増強ありき」です。

そもそもロータリーは二十世紀初頭の資本主義爛熟期に於ける頽廃の極に誕生しました。職業奉仕というロータリーの優れた哲学は、資本の論理に対する歯止めだったのです。奉仕を志す職業人たちが、資本主義の欠陥を補うという目的のために集まりました。個人の運動より組織の運動の方が効果的であるとの判断です。集まった人が考えるのはもちろん、目的達成のために活動する事を考えます。そのための組織化ですから。

また、奉仕は担い手が多いほど効果的であることも分かります。必然的に組織の運動の方向性は、目的達成のための運動と効果をあげるための組織の拡大という二つに分かれます。この

二つは特に当初は表裏一体ですから、矛盾無く存在し、活動の活発化と組織の拡大は両輪として動いていきます。この時点では、あくまでも目的の達成のための補助手段として増強拡大が存在します。

ある程度の規模であればこれでなんの問題もないのですが、組織がある一定以上に肥大化すればしばしば変質が生じます。組織が目的達成のための単なる装置から、大きくなった組織を維持発展させる事に意義を大きく置きだす現象です。

だいたいこの時点で内輪もめが起こります。ロータリー本来の目的達成派と組織拡大派の路線闘争です。「R-Iの目的」はロータリーの拡大ですので、当然組織拡大派が勝利を収めます。組織拡大派が勝った時に運動の目的も変質します。本来は目的さえ達成すれば組織は不要のはずです。ところが組織拡大派にとって目的とは達成されてはならないものになります。目的の達成は組織の死を意味するからです。組織はこの時点で人の手を離れ、組織が人を使う状態になります。

組織は自分が生き残るために目的を引き上げていきます。目的達成に近づけば意図的にどんな目的をかさ上げしていくのです。目的が無ければ人は集まりませんし、人を惹き付けるには尖鋭的である方が受けがよく、さらに単純化した方が理解されやすくなります。そのいい例がポリオの根絶活動です。

官僚化した組織は目的達成のために存在するのではなく、達成不可能な目的のために肥大化するのが目的になります。目的の尖鋭化、単純化は果てしもなく進みます。ここまでくれば組織の拡大のみになります。

こういう状態に陥った組織は非常に厄介です。組織の発展段階で「それはおかしい」とか「それは我々の目指す方向ではない」とロータリー哲学に固執するロータリアンは淘汰され、残っているのは巨大化した組織で食べている人、変質した目的が達成できると信じ込んだ人ばかりになります。さらにどちらの比重が多いかといえば組織で食べている官僚達です。彼らはロータリーの目的達成などどうでもよく、組織が肥大化することにのみ関心があります。彼らにとって目的達成を信じ込んでいる人も組織の宣伝道具に過ぎません。

組織の主導権が、組織で食べている官僚に移れば、旧体制に対し一切の妥協はなくなり、妥協しても組織の肥大化にとって何のメリットもなく、妥協しない事で旧体制派と紛争状態になる事の方が望ましいと言う事です。

敵対し争っている方が組織は結束しますし、新たな構成員を呼び寄せるのが容易になります。ダラダラと戦争が続くほうが儲かる軍需産業みたいなものと言えばよいでしょうか。組織がすべてそうなるのはもちろん言いません。そこまでの段階で自制している組織もたくさんあります。ただロータリーだけは、そんな心配が杞憂に終わればいいのですが、確実にそうなり

つつあります。

《官僚（英：bureaucrat）とは国民と呼ばれる羊から搾取した税金などを自分の好きなように消費する権力を与えられたサナダムシである。税金では足りず企業と癒着し資金を集めることがある》とあります。（ウィキペディア）

引用・参考『ある小児科医の呟き』より

（2020年12月30日）

第四章

小論収録

塚原房樹

『奉仕の出発点』

新聞や、テレビや知り合いの話などで何らかの困難に直面している人のことを知った時、我々のほとんどは心が動くのを感じます。「さざなみ」のようなかすかなものか、深い実感を伴ったものかはその時によるとしても、人としてごく自然な気持ち（憐み、慈しみ、思いやり）といった「見えない世界」が奉仕の出発点であります。

何かしらの気持ちを持ったとしても、しかし次の瞬間、次の日、次の週には、日常の忙しさと自分自身の問題に埋もれて、そのことを忘れてしまいます。

または気になっているとしても、忘れたふりをして済ませてしまうというのが、私を含め、我々のほとんどの毎日でしょう。ロータリアンは心の「さざなみ」を直ちに実行することが期待されています。

そのためには、自分の心の中の「奉仕の心」を訪ね、その心を涵養しなければなりません。特に“Solidarity of The race”（人類連帯）というロータリーの主概念を徹底的に学び、自分の血肉としなければなりません。

今、新聞や、テレビや知り合いの話などで何らかの困難に直面している人の情報を知った時、我々のほとんどは心が動くのを感じますと申しました。

養老孟司さんは著書『バカの壁』の中で『五感から入力した情報を実行する間、脳は何をしているか。入力された情報を脳の中で回して動かしているわけです。この情報をX、出力をYとします。すると、 $Y \parallel aX$ という一次方程式のモデルが考えられます。何らかの入力情報Xに、脳の中のaという係数をかけて出てきた結果、反応がYというモデルです』

脳の中のaはロータリアンの場合は「奉仕の心」と考えられるでしょう。
そこで養老孟司さんの一次方程式をロータリーに当てはめてみましょう。

奉仕の一次方程式 $\Downarrow Y \parallel aX$

$Y \parallel$ 奉仕の成果

$a \parallel$ 奉仕の心 憐み、慈しみ、思いやり

$X \parallel$ 貧困・疾病・飢餓など困難に直面している人の情報

$Y \parallel$ 奉仕の成果はaの数値に比例して変わります。

つまり奉仕の成果は「奉仕の心の大きさに」比例するのです。

ロータリアンにはおりませんが、非常に特殊なケースとしてa（奉仕の心） $\parallel$ ゼロというこ

とがあり得るでしょう。この場合は、どんな情報が入力されても出力はない。出力がないということは、行動に影響しないということです。行動に影響しない入力はその人にとっては現実ではない、ということになります。

ロータリアンにとつては他人を幸せにする能力 a を向上させ、奉仕の心を磨いていくことが何より大事なことです。

ポール・ハリスは『ロータリーの中にあるもの、それは善行だけではありません。善行というのは、その下に隠された何ものが外に姿を現わしたにすぎないのです。ロータリーの沢山の善行のかげには、「目に見えない力」が働いているのです。それは善意の力です。この世界で最も強い力の中には、「目に見えないもの」もあります。私たちの呼吸する空気にせよ、目には見えませんが、私たちの生命を支えてくれるのです。ロータリーの沢山の善行の陰にも、「目に見えない力」が働いているのです。それは善意の力であり、その善意の力によつてロータリーは存在しているのです』と語りました。

この様に見てくると奉仕とは、奉仕の行為のみを云うものではありません。困っている人の戸口へ、そつと物を置いてくるといふ行為は立派な奉仕ですが、困っている人のところへ、そつと物を届けてあげたいという心こそが真の奉仕なのです。

「見えない世界」とは、行動ではなく倫理を思索することです。では思索と実践とはどちら

が尊いのでしょうか。この問いに対する答えは明瞭です。

何故なら人生においては、実践ほど尊いものはないことは明らかです。生きることが創造することです。そしてその創造は実践行動によつてのみ実現されるからです。しかしながら、実はここにこそ最大の問題が潜んでいます。それはいつたい何を実践するのかという問題です。そしてこの時燦然と輝きだすものこそ、「見えない世界」(ロータリーの奉仕哲学)なのです。哲学のない実践は盲目的であり動物的であります。

綱領(ロータリーの目的)の前文には「ロータリーの目的は、奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある」と書かれています。時代がいかに変化しようとも、ロータリアンのなすべきことは、「見えない世界」の思索、涵養に尽きます。

参考・引用文献 *ボランテニア 金子郁容著 *バカの壁 養老孟司著

(2014年1月26日)

『寄付に対する日米の意識の違い』

第13回世界こどもハイクコンテスト“夢”がフィンランドで開かれました。大賞受賞作品はフィンランドの11歳の女の子でした。その作品をご紹介します。

「大金持ちで 何でもできるなら 施しをするわ」

“If I were rich And could do much I would give to others”

学力世界一として話題となっているフィンランドですが、その強い競争力と持続的な経済成長、高水準の福祉社会もまた世界の注目を集めています。女の子の俳句からは、北欧の高社会福祉国家であるフィンランドの宗教離れと税金がとても高いというお国柄と寄付に対する考え方がうかがえます。

以前、仕事でオーストラリアに良く参りました。シドニー空港の2階フロアーにプラスチック製の募金箱があります。シドニーR.Cの名前が大きく書かれています。ロータリーのよしみでいつも帰国の際、余ったオーストラリアのコインや小額紙幣を入れていました。ある時一人の小柄な夫人がつかつかと募金箱に近寄って何がしかのお金を入れました。

私は思わずその夫人にあなたはロータリアンですかと聞きました。いいえといって夫人は去って行きました。しばらくすると中年の男性が幾ばくかのお金を入れました。私はまた、あなたはロータリアンですかと聞きました。ノーという返事でした。時折、通りがかりの人が浄財を入れていました。キリスト教の国では寄付とか慈善という行為は宗教的習慣として広く浸透しているのだなと感じました。町の交差点でも、足の不自由なお年寄りが渡ろうとすると何人かの人がバラバラと近寄り手を貸そうとします。

神様は健常者の心を試すために障害者を作られた、だから健常者は障害者に進んで手を差し伸べる、それが神の御心に適うことなのです。

アメリカでは寄付が日常的で、お金をあまり持っていない人間でも、寄付という行為は身近にあります。ですが寄付大国アメリカの背景にあるのはなんといいっても税制です。

アメリカでは納税者全員が確定申告する義務があります。自分の収入に加えて支出も申告しますが、ここには様々な控除が含まれます。寄付は控除の大きな対象なのです。年収が上げれば上がるほど高い税率がかけられる仕組みなので、ハリウッドスター、スポーツ選手、企業経営者などの高額所得者は半端ではない金額を納めることになります。ですが、寄付による控除があると納税額もぐっと下がるわけです。

「どうせ政府に持っていかれるのなら、自分が支持する団体にあげよう」これがアメリカの

寄付文化を支える根本的な考え方となっているのです。

この考えは企業においても同じで、寄付や社会貢献に使った金額は会社の経費として法人税の控除につながります。そういった活動は節税と同時にイメージアップにもつながるので、企業にとってもメリットが多いのです。社会に必要なシステムを自分達の寄付金でもって作り出して、自分達で社会を作ろうという意識がアメリカ人にはありますが、日本人の場合は家族を養うに足る収入であればそれで十分だという、龍安寺の蹲にある知足の意識との違いです。もともとこの意識がそこまで違うので、日本では巨大な所得を得るような人がいた場合に「暴利を貪る（むさぼる）」といったことになるわけです。

こうした意識の違いはかなり社会に影響していると思います。ボランティアにしてもアメリカにとつては社会を作るために必要な行為とされるのに対し、日本では、慈善的で崇高な行為とみられます。もつと敷居の低い捉え方をしないといけないのではないかと思います

一方、日本の社会は東洋哲学（神道・仏教・儒教）が人々の生活を律してきました。特に儒教ではこの世と人間との関係は徹底した楽観主義に立っています。つまり儒教の考え方によると、この世は様々な世界のあり方の中で最上のもので、そしてキリスト教と全く逆に、人間の本性は善であり、修養すれば仏にもなれます。儒教の目指す人間の理想像は君子という表現で示されます。君子は徳が高いといわれていますが、それは道に従うことであり、この道とは一定

の理法に従う世界秩序のことです。つまり人倫の道に従うことがこの世で目指す理想となります。儒教ではそうした外面的な作法、世間体を出来るだけ守り、そのために自分を抑制します。財団への寄付金も会長さんが1000円出すなら、皆も「右へ習え」で1000円ずつ出します。日本には奉仕の動機にキリスト社会の「贖罪」といった意識はありません。

現在は、日本にも財団への寄付金は税制上の優遇処置がありますが、まだ一般にはなじみがありません。しかし、幸いガバナーの熱心な指導とまじめなロータリアンにより、日本は毎年、ロータリー財団へ高い貢献度を誇っています。

(2020年4月8日)

『奉仕とは寄付のこと・アメリカは寄付社会』

日本では、ロータリーは寄付団体ではないという認識がありますが、アメリカでは奉仕とは寄付をすることです。彼我の奉仕観の違いです。

アメリカでは、“自分達が社会を作る”という意識が強く、寄付をすることにより、社会に必要なシステムを自分達が作り出している、と感じることを大事にしています。ボランティアに対してもアメリカでは“社会を作るために必要な行為”とされていますが、日本では“慈善的で崇高な行為”という意識がまだ残っており、それらの意識の違いもこの寄付金額の格差に関与しています。

「どうせ政府に持つていかれるのなら、自分が支持する団体にあげよう」これがアメリカの寄付文化を支える根本的な考え方となっているのです。この考えは企業においても同じで、寄付や社会貢献に使った金額は会社の経費として法人税の控除につながります。そういった活動は節税と同時にイメージアップにもつながるので、企業にとってもメリットが多いのです。

アメリカでは寄付が日常的で、お金を持たない人間にも寄付という行為は身近にあります。ですが寄付大国アメリカの背景にあるのはなんといっても税制です。アメリカでは納税者全員

が確定申告する義務があります。自分の収入に加えて支出も申告しますが、ここには様々な控除が含まれます。寄付は控除の大きな対象なのです。年収が上がれば上がるほど高い税率がかかります。ハリーウッドスター、スポーツ選手、企業経営者などの高額所得者は半端ではない金額を納めることになります。ですが、寄付による控除があると納税額もぐっと下がるわけです。

アメリカの大会社の社長さんたちがなぜあんなにも大きな給料を得るか。それは寄付をするためだと言えます。アメリカでは個人の寄付金が年間約23兆円、日本の個人の寄付金は約2200億円。まずは取締役の所得がアメリカと日本で10倍近く違うというのがひとつ。10倍近く違うのでアメリカの社長さんは所得の95%を寄付しています。

社長さんに限らず、個人納税者の30%が寄付を行い、所得が1000万円以上の人々は87%が寄付をしています。日本の場合は個人納税者のうち寄付を行っているのは2・2%。社会の仕組みが全然違うのですね。アメリカはそうした寄付金でもって自分たちの地域を作る意識があるのです。で、その寄付金が機能しているということですね。いまやロータリー運動を推進させるエンジンはロータリー財団となりました。エンジンを駆動させるために寄付という燃料が未来永劫、欠かせなくなりました。

(2015年5月1日)

『罪を裁きまた赦す神 突き詰めた緊張感』

日本とアメリカの奉仕観の違い

同じ志で結ばれている世界各国のロータリークラブでも、背後にある歴史、宗教、文化により奉仕観には、かなりの温度差があると感じていました。特にアメリカと日本では、ロータリー観、奉仕観についてその背景となる宗教により本質的に明らかな違いがあります。一言でいえば、一神教と多神教との違いでしょうか。キリスト教にはカトリックとプロテスタントがあります。プロテスタントもさまざまな宗派に分かれています。

ではアメリカで生まれたロータリーの背後にあるキリスト教とは何でしょうか。ローマ・カトリック教会からイギリス国教会が独立しました。このイギリス国教会から16-17世紀にかけて、清教徒と呼ばれる多数のピューリタン諸派が出てきました。このピューリタン一派の人々が1620年にメイフラワー号でアメリカにわたり、ニューイングランドに植民地を建てました。

ロータリーの背後にある宗教は、英国のカルヴァン派の流れをくむピューリタニズムです。カトリックの場合、平凡な人間の欠陥は教会の恩寵手段、例えば懺悔の制度によって購われ

ますがカルビニストの場合はそうではありません。彼にとっては、神の意思か人間の空しさかという二者択一しかないのです。

キリスト教の根底にあるものは「禁断の木の実」を食べたアダムとイブの原罪説です。ピューリタニズムでは墮落した人間はどんなに修養を重ねても許されません。厳しいカルヴァンの訓えは、彼らにとってこの世は涙の谷であり、やがて終わるべき旅路に過ぎません。しかも彼らは神の栄光を増すためにこの世を少しでも神の国に近づけようと努力し、それが神に許される証となるのです。こうしてこの短い人生の旅路はやがて終わるのだから、我々は昼のうちに仕事をしておかねばならないという緊迫した気持ちを生みます。この世の楽しみを捨てて、すべてを隣人愛の実践にささげねばならないという巨大なエネルギーがほとばしり出るようになります。そして経済活動を、神の栄光をたたえ、隣人愛を実践する手段と考えました。これが職業天職論すなわち職業奉仕の原点なのです。

一方、日本の社会は東洋哲学（神道・仏教・儒教）が人々の生活を律してきました。特に儒教ではこの世と人間との関係は徹底した樂觀主義に立っています。つまり儒教の考え方によると、この世は様々な世界のあり方の中で最上のもの、そしてキリスト教と全く逆に、人間の本性は善であり、修養すれば仏にもなれます。儒教の目指す人間の理想像は君子という表現で示されます。

君子は徳が高いといわれていますが、それは道に従うことであり、この道とは一定の理法に従う世界秩序のことです。つまり人倫の道に従うことがこの世で目指す理想となります。儒教ではそうした外面的な作法、世間体を出来るだけ守り、そのために自分を抑制します。寄付金も会長さんが10000円出すなら、皆も「右へ習え」で10000円ずつ出します。日本には奉仕の動機に「贖罪」といった意識はありません。

このように信ずる宗教の違いにより奉仕観に決定的な差が生じます。儒教での罪は秩序と調和を破ることであり、それは償いうる過ちであって、キリスト教の原罪といったものとはあまりにも遠くかけ離れています。またアメリカと奉仕観が大きく違うもうひとつの理由は、日本にはパブリックという横の概念がなかったことです。社会は身分的な縦の人間関係で成立していました。

かつて日本の道徳規範であった儒教の四書の一つ「大学」の「修身・齐家・治国・平天下」がよく知られていますが、この縦系列の道徳律に欠落しているのは、欧米における自立した個人によって形成される「社会」（パブリック）という認識です。「齐家」と「治国」の間に「社会」が入るべきです。

日本の縦の人間関係では、人間の相互関係が働くボランティアの生まれる余地はなかったのです。日本人の控えめな態度を美德とする生き方にとって、ボランティアはそれを超える精神

的エネルギーを必要とするものでした。

外来思想のロータリーが我々にもたらした一番大きな功績は、ボランティアというと単に「困った人を助けてあげる」ことだと思っていたが、むしろ「助けられているのは自分」の方だという新しい価値観を積極的に我々に与えてくれたことです。

(2015年5月8日)

『ロータリーのバッジはいいバッジである』

国際ロータリーの戦略計画には「公共イメージと認知度の向上」があります。それは、ロータリーを外部の人に知ってもらい、そして良いイメージを持つてもらおうということです。

皆さんの襟にロータリーの記章が付いていますが、この歯車の記章を見て、それがロータリーのものだと分かる人は、ロータリアン以外ほとんどいないのではないのでしょうか。そこで、外部の方がロータリーの記章を見たとき、誰もがロータリーという名を連想し、どのような組織で何をしているかということが分かるようにしようというのが、今、国際ロータリーで進めているブランディング、つまりブランド構築ということです。

しかし我々は、いいことをしている団体だと人に知らせるためにロータリーのバッジを着けているのではなく、自分はロータリアンであるという義務と自戒を常に忘れぬために襟に着けているのです。

ロータリーのバッジはいいバッジです。デザインがいいだけというのではなく、やはりロータリーの伝統がにじみ出ているからでしょう。そのせいか、会員はいつでもどこでも、このバッジをつけています。もしバッジの着用率というものがあれば、おそらく全員100%で

しよう。これに比べて出席率の方は、なかなかそうはいきません。例会への出席は時間がかかるし、規則も面倒でなかなか簡単にはいきませんが、バッジをつけるにはそんな面倒な問題がありません。これはどだい比較する方が無理ということになりそうですが、それで片が付く問題でしょうか。

出席率の方はさて置いて、バッジの着用率は何故いいのか考えてみましょう。一口で言えば、それは我々がロータリーに誇りを持ち、バッジの効果 را認めているからでしょう。それは我々が《選ばれた人》であるという事実とその意識を持つていることも作用しているでしょう。

ロータリーは、始祖ハリスを除いて、自分からロータリアンになろうとしてなれる組織ではありません。ロータリアンはそれぞれの地域社会のなかの職業を分類してそれらの業界の代表として会員に選ばれました。ただし我々が襟に着けているロータリーのバッジは先輩が長年築いてきた信用の証しなのです。その先輩たちが築いてきた信用を我々は前借りしているのです。

ロータリーのバッジには「ノーブレス オブリージュ」の義務が伴います。「ノーブレス オブリージュ」とは「高貴なる者に伴う義務」の意味をあらわすフランス語です。我々は社会の模範となるように振る舞うべきだという社会的責任を自覚しなければなりません。つまり

ロータリーのバッジを着用するものは、先輩たちから前借りしたロータリーの信用を返していかなければなりません。ロータリーのバッジをつけることは、ロータリーの目的と精神を実現するためなのです。

他のことと同じように、立派なロータリアンになることはたやすいことではありません。けれども我々がロータリーの理想を理解し、ロータリーに負うているものを深く自省するなら誰もがよいロータリアンになれます。ロータリーのバッジはいいバッジです。それは我々の資格を表すよりも、義務を示しています。

「公共イメージと認知度の向上」は、効果がなければ意味がありません。効果の上がらなかった宣伝とは自分の主張だけで、実際の世の中の動きが黙殺したものであり、成功した宣伝とは実際の世の中の動きに追随したものであるといえます。広報宣伝は一般の人が考えてもいないことを、どんなに宣伝技術を凝らしてみたところで人々に理解させる力はないのです。

わざわざ、ロータリアンが自分たちの功績を周囲に宣伝するのではなく、あらゆる場面にロータリアンとしての矜持を持って登場すれば、それが広報になるのです。「公共イメージと認知度の向上」は、ロータリーの思想普及の精神が表裏一体となっているのでなければ、無意味なことであると思います。

(2016年1月12日)

『ロータリーを科学する・哲学する』

木を見て森を見ず“Some people cannot see the wood for the trees.”

(事物の末梢的部分にこだわらず、本質や全体をとらえられないこと)

源流の会の皆さんは、昨年亡くなられた、故道下俊一パストガバナーのことを憶えていらっしゃる方も大勢いらっしゃると思います。氏は北海道浜中町(名誉市民)霧多布村で、半世紀近く地域医療に奮闘しました。医師・道下俊一さんの半生を描いた、テレビドラマ「潮風の診療所」岬のドクター奮戦記」をご記憶の方もおられるでしょう。

私はご縁があつて20数年来、お付き合いをさせていただきました。道下さんから色々とロータリーについて御教授をいただきました。またよく「ロータリー放談会」をやりました。道下さんはいつも「最近、ロータリーを語る人がいなくなつてしまった」と嘆かれていました。ロータリーを語る人とは、「ロータリーとは何か」という原理、本質を語る人のことでしょう。

ロータリーのような文化的価値を追求する諸団体(ライオンズクラブ、キワニス、また世

界宗教と呼ばれるものは、必ず二つの要素から成り立っています。

① 最初に優れた思想・哲学を持つ団体であること

② 次に合理的組織管理原則を持つ団体であること

優れた思想には人々が集まります。そのあとで人々のマンパワーを有効に機能させるために組織管理規定が必要になります。

四国の生んだ天才宗教家、弘法大師さんの密教の秘法が全国津々浦々に及びます。その教えを慕って大勢の善男善女が集まり多くのお寺が各地にできます。それらを統括するために「ご本山」ができます。

ロータリーも同じで、先人の開発した優れた思想・職業奉仕の哲学を慕って会員が集まる、クラブが世界各国にできる、それらを統括するために国際ロータリーができました。大事なことは、「ご本山」、「RI」が最初にあつたのではなく、最初に優れた思想・哲学があつたということです。ロータリーを語る人とはロータリーの優れた思想、哲学を語る人のことです。

ロータリーを学ぶには、科学的なアプローチと哲学的なアプローチがあります。ロータリー章典や手続要覧を見てもお分かりの通り、ロータリーは実に多くの歯車から成り立っています。

「ロータリーを科学する」とは、それらの歯車を別々に分けてその一つ一つについて正確な知識を得ようとするものです。ただロータリーは年々複雑、細分化しすぎて、部分にとらわれ

ていると相互の連携が難しくなり、木を見て森を見ずの弊害が心配されます。

もう一つロータリーを知るには、哲学的なアプローチがあります。哲学的なアプローチとは、ロータリー全体が対象です。つまりロータリーとは何かという「原理、本質」を問うことです。哲学とはあらゆるものを徹底的に知り抜こうとするもの。哲学とは「生きること」ではなく「知ること」であり「行動すること」では無く「思索すること」であります。

一言で言えば哲学は「実践」ではなく「理論」であるということです。しかしここに問題があります。それはそのような思索の立場は私たちの現実の生活にとっていかなる意味を持つかということです。別の言い方をするなら「理論」と「実践」とどちらが尊いかということです。

しかしこの問いに対する答えは明瞭です。なぜなら人生において「実践」ほど尊いものの無いことは明らかです。「生きる」とは創造することです。そうして、その創造は実践行動によつてのみ実現されるからです。しかしながらここにこそ最後の、最大の、問題が潜んでいます。それは「いつたい、何を創造するのか」ということです。そうしてこのとき、燦然と輝きますものこそ、「理論」なのです。哲学を失った理論のない実践、それは盲目的であり、動物的であります。人間の行為は、どこまでも理論と理想の上に展開されねばなりません。

そしてその理論の根本をなすものこそ哲学なのです。哲学と科学は、どちらも必要であると

ともに、いずれも一方だけでは不十分であります。要するにロータリーを学ぶには哲学的アプローチと科学的アプローチが欠かせません。

謹んでこの小文を故道下先生に奉げます。

参考・引用文献　哲学と科学　澤瀉久敬

『見える世界と見えない世界』

RIの国際会議や研修会などでは、スピーチの冒頭でよくジョークが聞かれます。そこで私も最初にジョークを一つ申し上げます。それは「夜道の街燈」というジョークです。

『暗い夜道に街燈が一本立っています。その街燈の下だけが明るく、周りは真つ暗闇です。その街燈の下で何やら探し物をしている人がいます。通り掛かりの人が「どうかされましたか？」と尋ねました。するとその人は「えー、私は大事なものを落としてしまいました。落としたところは向こうの暗いところですが、ここが明るいのでここで探しています」と答えました』

このジョークは要するに、大事なものを落としたのに、落とした場所と違う別の場所を探しているというあまり笑えないジョークであります。

しかし、このジョークは、実は深い意味を持っておりまして、我々は現実の世界、つまり明るい「見える世界」だけを真実と思い、その「見える世界」を背後から支えている「見えない

世界」を、我々ロータリアンはなくしてしまいました。

ロータリーは「見える世界」と「見えない世界」から成り立っています。会員増強とかポリオ、ロータリー財団への寄付は目に見える現実の世界です。

我々は現在「見える世界」しか現実と思わないのは、全てがカネに換算される社会に生きているからです。人間と人間の関係性から生み出されたあらゆる商品がカネに換算され、すべてのものが動くわけです。そのカネを集めて財団に寄付をする。ロータリーの世界もカネという目に見える実体としてすべてのものが動くわけです。

そうすると目に見えないもの、「憐み、慈しみ、思いやり、愛情、友情」、あるいはカネへ換算できない「見えない世界」が理解できなくなってしまう。「見えない世界」を意識の下に押しこめ、すべてを実態に還元しようとするこの時代、「見えない世界」が忘れられ、分かんなくなってしまう。

元RI会長のビチャイ・ラタクルさんは、国際協議会で次のような話をされました。『ロータリーは、過去に何百万人も貧困、飢餓、疾病に苦しむ人たちに救いの手を差し伸べてきた。それは大変偉大なことである。だが今、我々はその奉仕の実践のもととなる哲学を失ってしまった。何と悲しいことだろうか』

ラタクルさんの奉仕の実践のもととなる哲学とは、「見えない世界」の思いやり、助け合い

のことでしょう。

我々は今、「奉仕の実践」の出発点となる「見える世界」と「見えない世界」の回路をつなぎ直さなければならないのです。

(2014年1月26日)

『ロータリーは今や末法時代か』

——ビチャイ・ラタクルさんの言葉——

お釈迦様が亡くなって100年余りたつと、「教え」の解釈などをめぐって、伝統を守ろうとする保守的なグループと、進歩的なグループに二分されます。そして時とともに更に両派は（小乗）と（大乘）に分化しました。

私はこの道の専門家ではありませんから、学問的に双方の論点を説明できませんが、小乗では、資質のすぐれた者が修行をすることによって悟りを得られるとしていました。戒律の条文も不変のものにしました。自分自身の悟りの為に、教えを厳格に守りました。

そのような中で広く大衆的な一派として、大乘と呼ばれるグループが誕生します。自分一個人の人間完成を目指すのではなく、広く大衆に教えを広め苦悩する衆生を救い上げるのが宗教人の使命で、そのためには戒律は変わっていい。時代とともに手法を変えてゆかなければ教団の維持もできなくなると主張しました。

同じく、ロータリーも誕生以来110年を経過してロータリーの目的が変わりました。当初、ロータリーの会員は厳しい審査を経て選ばれた人々でした。ロータリーの中心概念は「職

業奉仕」であり、個々のロータリアンの職業の倫理的水準を高めることによって社会に貢献せよということが目的でした。帰する所ロータリー運動の目的は、会員個人の人格陶冶、自己錬成に外無らなかつたのです。

しかし今のロータリーは会員増強が第一の目的となり、会員資格の規制は大幅に緩和されました。そしてラビンドランR I会長により職業奉仕の禁じ手であつた「ロータリアンはその同僚ロータリアンから、他の実業家に対する場合よりも多くの利便を期待してはならない」という項目も削られ事実上職業奉仕が無くなつてしまいました。私は理想としての大乗的ロータリー観を否定はしませんが、会員個人の人格陶冶という任務を忘れた奉仕活動は、やがてロータリーを内部から崩壊させることになるでしょう。

12月に東京でロータリー研究会が開催されました。最終日のフォーラムでラビンドランR I会長は会員増強の切り札として新しい「ロータリーグローバルワード」に触れました。

『ロータリーに入会を誘われたら、誰もがこう自問するでしょう。「自分にとってどんなメリットがあるのか？」ロータリアンになれば、ほかの人の人生だけでなく、自らの人生も豊かにできることを示すことによって、ロータリーが持つ価値をはつきりと証明する必要があるのです』

私は、敢えてここで、11月の2550地区の地区大会でビチャイ・ラタクルさんの『ロータリーにおける意志と信頼』というテーマの講演——御存じの方も多いと思いますが——の一部を抜粋してご紹介します。

『全世界のロータリアン数は、2・3年前は130万人でしたが、2014年7月1日には、ただの110万人となりました。現在のRI会長であるラビンドランさんが、エレクトの時、次のような提案をしました。ロータリーの会員に何か特典を与えましょうと。彼の考えはロータリアンが会員資格を維持するためには、何等かの利点を与えることでした。これが、ラビンドラン会長がロータリーの本来の道を外れてしまった理由でもあり、ロータリーの行動規範の第5項目（事業や職業における特典をほかのロータリアンに求めない）を削除した理由でもあるのです。

このことは、疑いもなく、RI会長が、ロータリーの中核的価値観すなわち、職業人の高い倫理基準の理念を破壊しているのです。

私たちがロータリーに在るのは、与えるためであり、何かを得るためではないのです。私は、今日のロータリーは過ぎ去りし時のロータリーではないと思います。ロータリーの中核的価値観はもう存在しません。“What a pity!”なんと残念なことでしょう！

ロータリーの最高指導者が、ロータリーの哲学とロータリーへのイデオロギーを完全に失ってしまったことは、なんと巨大な恥さらしでありましょうか。もしもロータリーの最高指導者が、世界が変化しているからロータリーも変わらなければならぬと言いつつしながら、私たちの創始者から受け継いでいるロータリーの基本原理を無視していくならば、これから先どのくらい長くロータリーが存続できるか、それを予言することはできません』

ロータリーは今や末法時代（仏教によれば釈尊の教えだけが残り、行も悟りもなくなる時代）を迎えたようです。しかし我々日本のロータリアンは、ロータリーをロータリーたらしめているDNA、つまり、ロータリーの本質と存在理由を大切にしておかねばなりません。

タイは敬虔な仏教国です。ロータリーを自己改善の倫理運動ととらえる日本人にとって仏教徒ラタクルさんの勇気ある発言に心からの敬意を表します。

（2015年12月29日）

『“standard”から“optional”へ』

R Iの組織規定を改正する規定審議会は、4月10日から15日まで、米国イリノイ州シカゴにて開催されました。今回の改正により「標準ロータリークラブ定款」は大きく改正されました。最大のトピックスは「柔軟性」という「例外規定」の導入でした。

そもそも「標準ロータリークラブ定款=standard rotary club constitution」とは、ロータリーのバッジをつけていてもそれぞれの国によってすることが皆ばらばらだ、バッジをつける以上、これだけは守ってくださいよと、ロータリークラブの基準値(standard)、尺度、手本をグローバルに示したものです。

グローバル・スタンダードとは、特定の国や地域など限定された範囲でなく、世界中のクラブで遵守すべき基準のことを云います。

そのためには対象クラブのレベルにあまり差がないことが条件です。しかしロータリーは世界200カ国に拡大しました。先進国の歴史あるロータリークラブと発展途上国のクラブは、ロータリー観、ロータリーに求めるものが違います。従ってロータリーのバッジをつけていても、ロータリークラブとして遵守すべき基準値(standard)から外れたクラブが今や数で勝

るようになりました。

そこで今回の規定審議会では、これまで15年間、試験的プログラムを実施してきた結果、すべてのロータリークラブは規定審議会が承認した新しいオプションを取り入れて例会数、会員資格、出席についてクラブが柔軟に細則を修正することが可能となりました。

これは1922年以来守ってきたロータリークラブの基準値 (standard) の決別を意味します。

今回の改正により「standard rotary club constitution」は“standard”に変わり、“optional”あるうちは“random”なクラブ定款といえそうです。

ロータリーの定款細則を、国家法を解釈するように解釈したら間違いです。R.I.の基本方針には『管理に関する定款及び手続き上の制限は、ロータリーの根本的かつ比類のない特徴を保持するために必要な最小限度にとどめられている。特に地方的実情において、国際ロータリーの方針を解釈し実行するにあたり最大の融通性を認めるものである』と明記されています。

つまり国際ロータリーの管理の根本原則は加盟ロータリークラブの『実質的な自治』(カスタマイズ) にありましたので今回の改正は、さらにその解釈を拡大したともいえなくはありません。

勿論、これらの変更を加えないことを選択するクラブは、従来と同じ基準でクラブ運営をと

り続けることができます。

「悪貨は良貨を駆逐する」という言葉があるそうです。日本のロータリークラブ群のレベルは世界で一番高いレベルにあります。今回の規定審議会の改正により、スタンダードな価値を守れない他国のクラブが蔓延（はびこ）って、日本のレベルの高いクラブが姿を消してゆくということになればと杞憂しております。我々は自信を持って従来通り、先輩から受け継いだクラブ運営の基本を守っていききたいと思えます。

（2016年7月11日）

『ボランティア経済』

「ボランティア経済」なるものが誕生してから20年近い歳月が経過しました。また、社会セクター、独立セクター、非営利セクター、よびかたはいろいろですが、そうしたセクターの出現はごく最近の現象です。

元々、第1セクターは、国や地方公共団体、第2セクターは民間企業、第3セクターというと、半官半民のことを指しました。これと違ってサードセクターと英語でいうとき、それはNPOのことをいいます。これから大切になるのは、第3のセクターで、前2者とは異質の世界です。これをボランティア経済といえます。

ボランティア経済を支える人たちの活動は、利他主義に基づきます。他人への奉仕が自己の喜びにつながる、自発的で無報酬の行為です。このように友愛哲学に支えられているところは他のセクターと根本的に違うところです。

数年前あるRI会長は、ロータリーは世界最大のNPOであると喝破しました。では公共財・サービスのプロバイダーとしてのNPOはロータリーにどのような位置づけを与えているのでしょうか。

確かにロータリーは活動の基本的目標からいってNPOの1つとして位置づけられるでしょう。しかし世の中には非営利組織であるけれど、同時に非公共的なタイプの組織も多くあります。趣味、嗜好やスポーツのクラブがそれです。このタイプはサービスといっても会員に対してだけであります。しかるにロータリーはクラブ奉仕といってもそのサービスの最終目標は、職業・社会・国際・青少年奉仕を行動化するためのエネルギーの蓄積におかれています。だから会員向けのサービスといえども実は、ロータリーを一つの大きな社会教育機関あるいは学校だとすると、クラスメイトとしての親睦を図る基本コースなのです。

だからロータリーは二重人格の性格を帯びるがごとくに見えますが、そうではないのです。職業倫理を高めるコースといつてよいかもしれませんが。同時にロータリーの学校の使命は、ビジネスや、社会各層のリーダーを育成することです。その意味からいえば、ロータリーはNPOのなかの先導役を果たすべき立場にあるとみられます。

ボランティア経済の活動領域の中でロータリーそのものが「道しるべ」の役割を果たすことが今、求められているのです。

近年、RIはこれらのロータリー運動の本質を置き去りにして、数に頼る非営利組織を目指しています。会員の退会者が多いのは、ロータリーの本質を忘れ、ロータリークラブの構成員の満足が得られないからでしょう。

(2017年2月10日)

『ロータリアン 二宮尊徳翁』

日本の奉仕観の底流にある思考

今年度のホアンＲＩ会長は、「私は儒教の祖、孔子を世界最初のロータリアンと呼んでいます。孔子はロータリアンが創立される２５００年前の人物であるにもかかわらず、ロータリアンの考え方と彼の考え方が非常によく似ているからです」とＲＩ会長就任の際に述べられました。孔子がその中心にすえたのは、「仁」すなわち人を思いやる人間関係の基本でした。

昨年の暮れに小田原の報徳二宮神社に参詣する機会を得ました。神社の入り口に、最近見られなくなった薪を背負って歩きながら本を読む二宮金次郎少年のブロンズ像がありました。皆さんは金次郎少年が読んでいる本を御存じでしょうか。二宮金次郎少年が読んでいる本は孔子が提唱した儒教の経書の一つ「大学」です。「大学」は天下を治める治世の根本原則を述べています。

従って江戸時代後期の農政家、思想家であった二宮尊徳翁の報徳＝奉仕の訓えにも儒教の「仁」が根底にあります。尊徳翁は「我が宗教は神道一割、それに儒教、仏教各半々ずつを加味したもの」であり、神道は社会のために力を尽くし、儒教は人の道を全うし、仏道は慈悲を

行うものであるといわれました。

私はかねてより二宮尊徳翁を日本のロータリアンの祖と考えていました。「人もし何か欲するところあるならまず他人のために働くがよい。そうすれば必ず人に報いられて願望を満足するであろう」。二宮尊徳翁はシェルドンの80年前に誕生、すでに「もつともよく奉仕するもの、最も多く報いられる」というシェルドンの奉仕コンセプトを提唱していました。

また尊徳翁の道徳経済一元論、「道徳なき経済は犯罪である」「経済無き道徳は寝言である」という言葉は、ロータリーの実践倫理運動の一面をよく表しています。ホアン・R・I会長（台湾）と尊徳翁（日本）の共通点は根底に儒教の訓えがあります。また韓国も儒教を信奉している国です。従ってこの東アジアの三国のロータリアンの奉仕哲学の根底にあるものは、五常（仁、義、礼、智、信）の徳性を拡充することにより、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫の道をまっとうすることでありました。

現在、企業の倫理や存在価値が問われるなか、国際標準化により「コンプライアンス」や「CSR」など、海外からの思想や経営論などが取り入れられておりますが、日本には江戸時代から、「財政再建」「格差」「貧者救済」「自然との共生」など、現代が抱える諸問題を神・儒・仏をあわせた「日本人の心」を持って考え、実践し、そして復興に導いた二宮尊徳翁がいたのです。

（2015年3月23日）

『転轍手待望論』

「奉仕」「増強」「財団」というロータリーの「お守り言葉」を離れて、もっと広くロータリーを社会科学の目で眺めてみるとロータリー運動の別の面が見えてきます。

ロータリーは110年の歴史の中で何度かパラダイムシフト（社会全体の価値観などが革命的にもしくは劇的に変化すること）を経験しました。

1905年、初期資本主義が独占体制のピークを迎え、資本主義の欠陥が至る所に現れたそのパラダイムシフトのさなか、シカゴの街でロータリーは生まれました。何か社会のためになることをしようと小事業主4人が集まりました。ロータリーの誕生です。ドイツの社会学者ウェーバーによれば歴史上、パラダイムシフトが現れた時代には、預言者が転轍手（軌道を変える人、ポイントマン）の役割を果たすといわれています。

20世紀初頭のシカゴは資本主義の欠陥溢れる街でした。その資本主義の発達というパラダイムシフトのさなか、ポール・ハリスが転轍手の役割を背負って登場しました。

米山梅吉さんには三人の御子息がおられました。三男の米山桂三氏は慶応大学の教授でした。「父を語る」という手記の中でロータリーの誕生の模様を次のように書いています。『ロー

タリー運動というものは、社会経済史的に見て、資本主義の発達という歴史的必然と、資本主義の欠陥を救おうとする人物の出現という、歴史的偶然との交錯したところで生まれた運動である』もちろん資本主義の欠陥を救おうとする人物とは、ポール・ハリスのことです。

ロータリーは誕生の時から資本主義の欠陥を救う宿命にあったのです。

当時のロータリアン達は、職業奉仕の理念である厳しい『道徳律』を真摯に学びました。そして彼らの志すところは、資本主義が人間を食い物にすることだけは許すまいということでした。もちろんロータリーは精神運動ですから、どの程度の効力があつたのかは定かではありませんが、資本の論理の勝手な横行に一応のブレーキはかけられました。

しかしそれにもかかわらず、ロータリーは変化する世界の流れを変えることはできませんでした。ロータリー自体も組織の拡大、膨張に伴って奉仕の目標も変質してしまいました。

そして現在、我々は国際ロータリーの大きな方針転換により、ロータリーの中心概念の変化というパラダイムシフトに遭遇しました。RIでは手段を選ばぬ会員増強が至上命令となり、ついに長らくロータリーの指導指針であつた職業奉仕の理念はなくなりました。職業奉仕は日本のロータリアンのDNAです。我々はいかにすべきでしょうか。

RIが世界的な人道団体へと大きく変化して、職業奉仕の精神が失われた今、ロータリーの発展を支えてきた職業奉仕こそ、ロータリーの普遍的な価値観であるということを日本から世

界へ発信すべき時ではないでしょうか。

この先ロータリーはどこへ行くのでしょうか。私の畏敬する佐藤千寿さんの言葉を頼りに三つの道を占ってみましょう。

《考えられる第一の道》

たとえロータリーの会員数が減少しても、かつてのポール・ハリスのような「転轍手」が現われて、かつてのロータリーの思想や理想の力強い復活が起こり、人間の営みが続く限り、職業奉仕こそロータリーの永遠の中心課題であるという点に目覚めること。

《考えられる第二の道》

ロータリーも今ではいよいよWe serveを標榜するライオンズと同様になり、その路線の相互乗り入れも行われるようになる。双方のクラブの会員になることも許され、最終的には世界最大の奉仕団体を誇示すべく両者の合併も考えられる。

《考えられる第三の道》

各地域がそれぞれ大幅の自由裁量権を持つ半独立組織となり、国際ロータリーは連邦政府の

役割を果たすという制度。R.I.B.I.は先見の明がありました。

理念において、またその行動規範において、成熟社会と未成熟社会を全く同一に律しようとする処に、そもそも無理がある。価値観の分裂、多様化に対処するためにこれが妥当な道かもしれない。

許されるなら、ウェーバーの言うように、我々が今抱えているロータリー内部のパラダイムシフトに正しい軌道を示すことのできる転轍手・ポイントマンの出現を熱望したいものです。

(2016年3月28日)

第五章

私の“Rotary Notes”

塚原房樹

始祖ポール・パーシー・ハリス

《“THE GOLDEN STRAND”黄金の絆》

過去を知ることにより、未来への道は開けます。ロータリーの歴史を学ぶには国際大会議事録をはじめ、RI理事会議事録、各種会合の数々の報告書、関連資料があります。しかしこれらはあくまでロータリーの運営と組織管理規定の公式記録であり、主役である肝心のロータリーアン不在で、個人の感動、情緒、情熱、哲学が埋没されています。その中で唯一といつていいくらい、日常のロータリーの人間像を生き生きと描いた本があります。

シカゴRCの60年の歴史を物語風に書き綴った、“THE GOLDEN STRAND”という本で、著者は(Oren Arnold)というシカゴRCの会員です。われわれが知っているロータリーの物語はすべてこの本に由来するといってもよいでしょう。幸い当地区の文献史料室に原書があったので10数年前、たどたどしい翻訳を試みました。ロータリーの先達が海図のない海をどのように航海してきたのかを、“THE GOLDEN STRAND”を中心に紹介をしてまいりたいと思います。全世界のロータリアンが敬愛してやまないロータリーの始祖、ポール・ハリスに敬意を表して彼の素顔を垣間見てみましょう。

《同僚の見たポール・ハリス》

我々は、謹厳で知的な雰囲気の一見近寄りがたい、ポール・ハリス像を写真で目にしています。しかし実像は少し違うようです。“THE GOLDEN STRAND”の著者 (Oren Arnold) は始祖ハリスと同じシカゴRCの仲間でした。彼によると『創立者は敬われるべきである。しかし現実の問題として、彼は白馬にまたがっていたわけでもなく、きらきら光る剣を振りかざしていたわけでもなかった。どちらかといえば、彼はごく普通の若者で、生計を立てるのに一生懸命で、外の仕事を引き受けるのには忙しすぎた。人々は彼を人は良いが、ぐずぐずするきらいがあるといえます。しかし彼はアイディアがひらめいたと同時に活動を起こしました。

彼は数人の仲間を呼び、自分の計画を伝えました。熱意は人の心を打つものです。みな一致賛同しました。そしてこのようにシカゴで、世界中で毎週一回の「黄金の時」すなわちロータリーの昼食会がやってくるのです。その若者がポール・ハリスでした』(Oren Arnold) はハリスの印象とシカゴRC誕生の発端をこのように記しています。当時のロータリアンにとって、毎週一回のロータリーの例会はまさに「黄金の時」だったのです。

《会長職を辞任したハリス》 初期シカゴRCのお家騒動

1909年1月まで2年2期、クラブ会長を務める予定のハリスは、1908年10月に3カ月を残して突然辞任しました。ハリスの手柄が今まで我々が教えられていたものと大きく相違

するのか、または我々が想像できないくらいクラブ運営に落胆、失望してしまったのでしょうか。シカゴRCの一触即発の危機は、ハリスの熱心なクラブ拡大に起因しています。ハリスはシエルドンとともにサンフランシスコRCを立ち上げようとしていました。

クラブの例会では、拡大状況の報告ばかりで、いつもゲストスピーカーの話す時間が残り少なくなっていました。「もうそんなナンセンスなことはやめる。我々は西海岸で起こっていることに興味はないんだ。少数の会員がクラブを牛耳ろうとしている」出席率も低下し、乱闘騒ぎまで起きました。会員のDr. ネフの「後少しいよいよこのクラブもお陀仏だなあ」というセリフが残っています。例会の雰囲気が悪化になるとハリスが会長を辞任した後、急遽、会長に選ばれたハリー・ラグルスが、壇上に駆け上がり、“Come on, fellows, let's sing!”（諸君、歌おうよ！）と大声で叫びました。クラブの危機を乗り切るため会員の気持ちを一つに結集させ、盛り上げる非常手段でした。これがロータリーソングの嚆矢となりました。

ボールの会長辞任でシカゴRCは解散するかもしれないと言う危機に見舞われたのに、それが無事にすんだのはシカゴRCの大勢の会員の努力があったのででしょうが、ハリー・ラグルスのソングがなかったら、今日のロータリーもどうなっていたかわからないのです。

《上杉謙信とボール・ハリス》

英雄色を好むといいますが、二人の共通点は、浮いた噂（女性の影）が全くないということ

です。ハリスの伝記をいくら読んでも、異性に関しては幼年時代、櫓遊びをした時に出合った女の子ジョージ・リリーについてのごく短い記述があるだけです。彼の関心事は女性よりロータリー運動にあつたのでしょうか。

ジーン夫人と結婚したのは42歳の時でした。ハイキングで彼が有刺鉄線をくぐった時、上着にかき裂きができました。それを見たスコットランド出身の可愛い娘さんが、「私、直してあげるわ」。彼は彼女を見てインスピレーションに打たれました。ハリスの生涯唯一のロマンスでした。二人は子宝に恵まれず、国際ロータリーが二人の養子でした。ハリスはシカゴのマウントホープ墓地に、ジーン夫人は故郷スコットランドのエジンバラの墓地に眠っています。彼女の墓石には、“SHE HATH DONE WHAT SHE COULD”と刻まれています。「ここに眠れるもの、まこと悔ゆることなき人生をおくれり」これは千種会の小堀憲助氏による名訳です。海を隔てていても二人は強いきずなで結ばれています。

ハリス夫人が「私たち二人は信仰によって永遠の力の中に結ばれている」と語ったように。心よりお二人のご冥福を祈ります。

国際ロータリーのビルダー

〈チェスレイ・ペリー〉

“THE GOLDEN STRAND”によるとポール・ハリスがロータリーの全国組織を夢見たのは、第2番目のサンフランシスコ・ロータリークラブが出来た1908年の秋であると書かれています。ペリーはロータリークラブの連合会（現在の国際ロータリーの前身）を作ること、詳細な計画を立てていました。しかしこの新しい組織の一員として忠誠を誓うことに対して、多くのシカゴクラブの会員たちは造反しました。NO1クラブを自負する彼らは「我々のクラブから自由な行動を奪う」と叫びました。またあるものは「それぞれのクラブに自治権を与えるべきです。われわれは協力をいいたしません、制限を受けようとは思いません」と主張しました。しかし他の一派はこう主張しました。「ちやうどいくつかの州がアメリカ連邦政府を作っているように、ロータリークラブの連合には力があります。統合された連合会ならもっと多くのことが遂行できるに違いありません」この見解が最終的に勝利をおさめました。そして1910年16のロータリークラブがシカゴのコンGRESホテルで第一回全米ロータリークラブ連合会が開催されました。

《デザイナーとビルダー》

ポール・ハリスは言いました。「もし自分がロータリーの設計者といわれる資格があるとすれば、チェスレイ・ペリーは間違いなく国際ロータリーの建設者である。」まことにその通りで彼のロータリーのビルダーとしての功績はハリスの陰に隠れていることが多いが、もしペリーがいなかったなら今日のロータリーは望めなかったでしょう。チェスレイがシカゴクラブに入会したのは1908年でハリー・ラグルスが紹介者でした。入会時に彼がロータリーに期待したものは「友情」でしたがその点は期待通りでした。しかしペリーはそれ以外にはるかに強く印象付けられるものを発見しました。そのとき彼は36歳で、19世紀から20世紀への変わり目に起こった「食うか食われるか」の激しい商売の世界を十分すでに知りつくしていました。ところが彼の驚いたことに、ロータリアンの実業家はお互いに助け合い、さらに競争相手と仲良くしているではないか。彼はロータリーの「奉仕の理想」を“Thoughtfulness and helpfulness to others”（他人への思いやりと助け合い）と表現しました。

これは“The Golden Rule”（黄金律）で「マタイ伝」の中の「己の欲することを人のためにせよ！」と言うキリストの言葉です。同じ意味のことは、釈迦も孔子も、モハメッドも述べている、つまり世界万人に通用する道徳律なのです。ペリーは52年の長い間ロータリアンでした。特に1910年からの32年間は国際ロータリーの事務総長（幹事）を務め、その間にロー

タリーの定款・細則を整備し、また、R Iの行うべき任務を組織化しました。彼は名利には恬淡で、数々の功績にもかかわらずR Iの会長にはならず、生涯を一ロータリアンとして、ハリスを助けロータリアンの発展に尽くした偉大な人でした。

《生涯一ロータリアン》

1954年のシアトルの国際大会でペリーを名誉事務総長に推薦する提案がなされ、会場は満場一致で賛成しようとなりました。その時会場の片隅から年老いた一人のロータリアンが立ち上がり、「ロータリアンは何一つ野望を持つべきではない。ただ一ロータリアンとしてあるのが理想である。従って彼はこの提案である名誉事務総長を辞退すべきだと考えます。かく言う私の名はチェスリー・ペリーであります。」と。会場はしばし万雷の拍手が鳴りやまなかったそうです。

彼はシカゴロータリークラブの会員であることに誇りを持ち、R Iの事務総長の職を辞した2年後に、シカゴクラブの会長を務めました。

《ペリーのロータリー観》

ペリーは、ロータリーは決して独裁的な組織であってはならない、常に各クラブの自主性を尊重しなければならないという固い信念を持っていました。さらにクラブよりロータリアン個人のほうがはるかに重要だと考えていました。世界を改造する最善の方法は、人間そのものを

改造しなくてはならない、人間個人の進歩こそ最大の重要事項であると信じて疑いませんでした。

現在 R I は各クラブの地域性などを無視して、R I の方針に従うのは当然とばかり、半強制的に世界中のクラブを判で押したような画一的なクラブにしようとしています。D L P や C L P をはじめ指導力養成マニュアルが次々開発され、クラブの自主性は薄れました。われわれは円滑なクラブ運営のためには R I 提唱の科学的組織マネジメントの弊害も心得ておかねばなりません。

〈C L P 導入の準備〉

近年、ロータリーの研修資料は C L P 採用を前提として編集されています。C L P は個々のクラブの強化のために推奨される管理体制です。R I は D L P の延長線上としてクラブに強力に採用を奨励しています。当地区としては、次年度は地区、クラブともに十分な検討期間にしたいと考えています。なぜなら導入するためにはクラブの長期的ビジョン策定推進のマニュアル作りが先決です。クラブが C L P を導入するためには、現在、次期、元クラブ指導者による長期計画の策定など 9 項目の条件をクリアしなければなりません。大切なことは R I から言われたから C L P をやるのだということではありません。日本には日本のクラブ運営の特徴がありますし、それぞれのクラブにもそれぞれの特徴があるので丸写しをすることは避けなければ

ならないというのが当地区の考えです。魅力あるクラブ作りのためまず各クラブの明確な意思とビジョンが必要なのです。

〈真のリーダーシップ〉

元RI会長のラタクルさんは、2005年のアナハイムの国際協議会で、リーダーシップについてスピーチをされました。「最も理想的な指導者とは、部下からその存在さえも意識されない。部下から敬愛される指導者は、それよりも一段劣る。これよりさらに劣るのは部下から恐れられる指導者である。良き指導者とは、功を成し遂げてでも自らはそれについて語らず、人々が『われわれが自分たちの力で成し遂げたのだ』と喜べば、それで目標は果たされたとする」という中国の思想家・老子の教えを引用しました。

1960年2月のある寒い日曜日の朝、自宅から郵便物を小脇に抱えてポストへ歩んでいたペリーは枯れ木の崩れるように倒れ、天国に召されてゆきました。享年88歳でした。遺骨は遺言によって一生、住み働いたシカゴやエバンストンの町から毎日眺めて暮らしていたミシガン湖に撒かれました。

ロータリーの哲学者

〈アーサー・フレデリック・シエルドン〉

ポール・ハリスの自伝“*This Rotarian Age*”の中に「天の祐け」という章があります。それはロータリー運動に不滅の足跡を残す二人の人物がシカゴクラブに入会してきたことです。一人は前回ご紹介したチェス・ペリーで、もう一人はミシガン州 Vernon という小さい村で生まれたアーサー・フレデリック・シエルドンでした。チェスはロータリーのハードの面、すなわち（国際ロータリーの組織）を構築し、シエルドンはロータリーのソフト面（奉仕概念の開発）に貢献しました。シエルドンはミシガン大学を優秀な成績で卒業、セールスマンとして成功をおさめた後、シカゴにビジネススクールを創設して「サービス」を根底にした「セールスマンの科学」を教えました。彼の学校はいろいろな販売の方法を教えましたが、一番力を入れて指導したのは、商業道德の重要性についてでありました。彼は商売において「永続的に利益を保証する唯一の信頼すべき方法は、よく他人のために尽くすこと、すなわちサービスがそれである」と断定しました。シエルドンは入会して2年未満にもかかわらず、シカゴのコンGRES ホテルで開かれた第一回全米ロータリークラブ連合会で次のようなスピーチをしました。

「19世紀の特徴は競争／competitionであった。それは同族相食む／dog-eat-dogの世

界であった。しかし20世紀初頭には、人類の知性が輝きを増すにつれ売り手と買い手の「協調」／cooperationの時代でなければならなくなった。なぜなら他人への公正な商行為を行うものだけが報いられることになるからである。商売は人道的サービスの科学である。すなわち『もつともよく奉仕をする者こそ最大の利益を得る』／He profits most who serves best』ちなみにこの句についてハリスは著書“THIS ROTARIAN AGE”の中で「1908年のある夕、ミネアポリスの理髪店の椅子からその組んでいた長い脚を解いて飄然と戸外にあらわれたシエルドンの頭脳には、『最もよく奉仕をする者、最大の利益を得る』という句が醸成されていた」と記しています。

《第二回大会のスピーチ》互恵主義からの決別

シエルドンはハリスから翌年のポートランドの大会でもう一度スピーチをしてほしいと頼まれました。残念ながら彼は英国に行かねばならずやむを得ず原稿を送りました。チェス・ペリーが大会でそのレポートを読みました。人々は座席から身を乗り出すように演説の朗読を熱心に聞き入りました。その内容は“THE GOLDEN STRAND”によると「経営学は／He profits most who serves bestに基づくサービス学である。いかなる団体、会社もサービスに従事した人々の成功の積み重ねである。広い意味においてすべての人はセールスマンである。各自は売るべきものを持っている。広い意味で人生の成功は幸運とかチャンスによるもの

ではなく、道徳的、物質的および精神的な法則に支配されるものである。すべてこれらの自然法則と調和して働けば、最高の成功を勝ち得られるはずである。人もし天地の理法／cosmic consciousnessを知ればおのずから万物存在の意味が解けてくる。それは人類連帯／solidarity of the raceの自覚であり、万有一如／the all-onenessの認識であり人類みな兄弟の理解である。この高い水準に立つて眺めるとき、人々は次の事実が謝らない現実であることを理解するであろう。すなわちビジネスの上であろうと、あるいはいかなる場所においても、*He profits most who serves best*でなければならぬ」

朗読が終わったとき、感極まってしわぶき一つなく、しばしの間座っていた聴衆の間から割れんばかりの拍手が起きました。そして大会決議委員長のジム・ピンカムが立ち上がり、「ロータリアンは今までに神の教え／Golden Ruleと仲間同士の商業取引の悪習慣をどう意義づけるかについて論議してきたが、この6つの単語でまとめられた言葉こそ我々の考えを明確に表現したものである。／*He profits most who serves best*こそ、この大会決議の結びの言葉にしてはどうでしょうか」と叫びました。この瞬間会場は歓声の渦と化し歓呼の声で採択されました。ロータリアンたちは「ロータリーの本当の存在意義は何か？」と問い続けてきたのです。彼らは初期の慣習である会員同士の互惠取引に皆満足していたわけではありません。取引上の利益は二次的なもので第一の目的とすべきでないと感じていたのです。そう感じ

た人々も口にするだけで、実際には全く行動には移さなかったのです。シェルドンのスピーチを聞いて実行の伴う最初の脱皮をしたのです。

《2つのモットー》

1911年ポートランドの全国大会が開かれました。大きな船でコロンビア川を下りながらの快適な大会でした。その日のスピーカーが創立後間もないミネアポリスクラブのフランク・コリンズでした。彼は「ロータリークラブでなすべきことはただ一つ、第一歩が肝心なのである。自分のために何かを得ようとして入ってくる人々は間違っている。そんな人はロータリアンとはいえない。私のクラブの設立以来遵守されている方針は『サービスだ、利己でない』／Service, Not Selfなのです」またもや／Serviceという語が登場しました。大会の参加者はコリンズの話を熱心に聞いて、彼の一句／Service, Not Selfに対して大拍手を送りました。このスピーチはシェルドンの／He profits most who serves bestが発表されたのと同じ時のものです。二つの句はやがてあちこちのロータリークラブで使われることになりましたが、そのうちに／Service, Not Selfは『超我の奉仕』／Service, Above Selfと変わりました。そしてこの二つの句がモットーとして正式に採択されたのは1950年のデトロイトの大会でした。しかし／He profits most who serves bestの方は不運に見舞われます。ロータリーに女性会員が入会するようになり、「He」は男性名詞なので差別用語に当たると

で、廃止しようという提案が規定審議会に出されたことをご記憶の方も多いと思います。幸い日本のＲＩ理事の猛烈な反対により『最もよく奉仕をする者、最大の利益を得る』という句は現在復活しました。

〈プロフィール〉

さらにシエルドンのモットーは一部の人々の誤解を受けました。それは“profit”が金や物を意味しているので気に入らないという方が多いようです。事実、英語の“profit”は金銭上の利益を意味しています。ハリスはこれを「人生の“something”である」といいました。しかし『ロータリー通解』の中でガイ・ガンディカーは“profit”をこのように表現しています。

「自己の職業を通じての活動、自己のクラブ活動、公共的慈善活動の結果、人はどのような利益／profitを期待できるのか。その利益は、売値と原価の差額から生じる近視眼的、かつ瑣末なものではない。利益とはすべてのロータリアンが、もつと立派な人物そしてもつとスケールの大きい人間になり、自己に対し、仲間に対してもまた社会に対しても、もつと優れた奉仕をする機会がもつとたくさん与えられることを言うのである」このように“profit”は金でも、ものでもないことがお分かりいただけたでしょう。

洞爺丸海難慰靈碑

〈七重浜と七飯RC〉

だいぶ前になりますが、ガバナー補佐の上野一義さん（七飯RC）から手紙をいただきました。

手紙には以前、函館のIMの時の私のスピーチのコピーと他に新聞の切り抜きが同封されていました。私のスピーチは、「七重浜の青函連絡船『洞爺丸』の慰靈碑を訪ねて遭難者のご冥福をお祈りしたいと長い間願っていたこと。特に船が沈没する際に乗っていた外国人牧師が、自分の救命具を若い学生に与え自分は亡くなったという崇高な献身的行為を聞いていたので、函館に行くたびにその外人牧師の靈に感謝の祈りをささげたいという気持ちが強くあった。幸い上磯RCさんの公式訪問の際、藪下ガバナー補佐（函館北RC）に案内されて念願がかない慰靈碑にお参りすることができたが、只大きな勘違いをしていた。七重浜に慰靈碑があるので、つまり七飯RCさんが長年清掃奉仕をされているとばかり勝手に思い込んでいたが、七飯RCさんは亀田の七飯町で同じ『ななえ』でも場所と字が違う。慰靈碑の清掃をクラブの事業として長く続けておられるのは、函館北RCさんだということを知った」という内容でした。

私はわが身を捨てて「超我の奉仕」を実践された外国人牧師については詳しいことは何一つ

知りませんでした。同封された新聞の切り抜きにより牧師と彼の子息の詳細を知ることができました。新聞の切り抜きは「核大国の祖国に何を訴えますか」という2008年4月の道新の記事でした。そこには広島平和文化センター理事長にステイブ・リーパー氏が就任したとあり、「原爆を落としたアメリカの人が?」。当初は被爆者らに当惑を広げる「サブライズ人」事と伝えていきます。その彼の父が1954年、台風で函館沖に沈んだ青函連絡船『洞爺丸』遭難の際、船に残って女性や子どもの救助に努め、最後は救命胴衣のヒモの切れた少女に自分の救命胴衣を譲って自分は命を落とした外国人牧師ディーン・リーパーさんその人だったので。母国の戦争文化に厳しい目を向けるステイブンさんはこの時6歳でした。彼は「連絡船は岸壁からあまり離れていなかったし、父は泳ぎが得意だったので、自分が死ぬとは思わなかったはず。ただ自分だけ助かろうと思えば真つ先に海に飛び込めたのに、父は船が転覆するまで女性や子供たちの救助に当たっていたそうです。自己を犠牲にしても、他の人のために尽くすことが大事だ」という教えは私たち家族の中に残っております。アメリカ人が平和センターの理事長になることは自分にも迷いがありました。が、祖国の過ちを正す行動は間違いではありません」

『洞爺丸』の海難事故からすでに半世紀を経過して今や人々の記憶から遠のいて風化しようとしています。50数年前の外人牧師の崇高な行動が今ご子息に継がれています。正しい史実を

知らせていただいた上野さんありがとうございました。長年の胸のつかえが下りました。

《ロータリーは奉仕団体か》

「ロータリーって何ですか?」「はい、奉仕団体です」この応答はかなり誤解を生む危険性をはらんでいます。毎年我々が会費として出しているお金は、ほとんどクラブの維持運営費に使われていて奉仕に支出されるお金はニコニコBOXが頼りで、決して額は多くありません。それでいて奉仕、奉仕と声高に叫ぶと世間から誤解されます。「超我の奉仕」というモットーはロータリーの主概念であります。しかしロータリアンは皆、リーパー父子の実践した崇高な「超我の奉仕」を実践できるでしょうか。ベルギー人の修道士ダミアンは、ハワイのモロカイ島で当時だれも顧みなかったハンセン病患者のケアに一生をささげ、自らも罹病して命を落としました。しかしロータリークラブは修道院でもなければ、ロータリアンは修道士でもありません。普通の善意で結ばれて集まった人たちで、決して特別の人達ではありません。「超我の奉仕」という言葉を使わなくても、出来ることならあまり悪いことはせず、良いことを心がけて生きてゆこうよという人たちの集まりであっていいと思います。その善意を育むためにロータリーの例会があり、フェローシップがあり、異業種の交流による切磋琢磨が大事なのです。自分の職業と異なる会員の知恵を毎回の例会で学び自分を高めていきます。ロータリー運動とは個人の善意を育む「人作り運動」なのです。企業の繁栄は経営者の人格の反映と言われ

ています。ロータリアン個人、個人が高められた資質を持って自分の企業を繁栄させることが最大の社会貢献であり、最大の奉仕なのです。ロータリアーはこのことを職業奉仕と呼んでいます。自己啓発こそロータリアーの最大の魅力でした。社会を改良するには社会の基である個人の心を改良しなければならぬとロータリアーは信じて疑わないのです。奉仕の実践の前にまず善意の心を涵養することが必要です。ロータリアーは奉仕団体ではなく、奉仕の心を育む人たちの集まりなのです。

《国際ロータリアーの変身》

国際ロータリアーは成人教育の場としての職業奉仕団体から、今や人道的国際ボランティア団体へと変身しました。社会の現象は一点にとどまらず、常に変化します。ロータリアーも同じで奉仕プログラムは時代とともに変わります。私はロータリアー財団がマクロな視点で世界の弱者を救済することに異議はありません。むしろロータリアーの奉仕の課題としてふさわしいものと思っております。

確かにポール・ハリスは「本当に有効かつ実効性ありという合理的な見通しがあるならばどんな革新にも応ずる用意がある」と言っています。しかし「他の慈善事業団体などと功を争うな、ロータリアーはロータリアーの目的とする範囲のことをすればいい」と釘をさしていて、「人作りロータリアー」「職業奉仕」の理念まで捨てて良いとは言っていない。つまり変えていい

のはその時代に即した活動であつて、ロータリーの本質を風化させるようなことがあつてはならないのです。本来のロータリーの目的は人を作る運動であつたはずです。それがロータリー運動の魅力でした。

「どんな言葉でも長い間使われていると手垢にまみれふやけてしまうものだ」

これは亀井勝一郎氏の言葉です。ロータリーの「奉仕」という言葉はその代表格といえます。

ロータリーの世界では右を向いても左を見ても奉仕、奉仕の掛け声ばかりで、何か大切なものが失われてしまいました。「奉仕」はもともと宗教上の言葉ですが、神への奉仕から「祈り」が失われたらどうなるのでしょうか。同じようにロータリーの奉仕から「祈り」の心が失われたら単なる慈善団体となります。人間の力には無制限がありますが、「祈り」とは限界突破のための祈りであり、意思の力であります。その祈りは不純であつてはなりません。金銭の多寡を競い、自己の名声を求めると奉仕は転落します。言い換えればそのとき奉仕は投機心になつてしまいます。われわれは外国人牧師デイン・リーパーさんのように自分を滅してまでの奉仕はできませんが、生涯学習の場、ロータリーの例会で絶えず自己の善意を高めていくことが最大の奉仕なのです。

Stigma 恥辱の烙印

《弱者救済》

シカゴクラブの会報には「世界最初の奉仕クラブ」という言葉が誇らしげに謳われています。

以前にも書きましたが、《どんな言葉でも長い間使われていると手垢にまみれふやけてしまうものです》ロータリーの「奉仕」という言葉はその代表格といえます。ロータリーの世界では右を向いても左を見ても奉仕、奉仕の掛け声ばかりで、何か大切なものが失われてしまったようです。「奉仕」はもともとキリスト教から来た言葉ですが、神への奉仕 *service* から「祈り」が失われたらどうなるでしょうか。同じようにロータリーの奉仕から「人の幸せを祈る心」が失われたらどうなるでしょうか。

仏教の「布施行」も根底にあるものは「祈りの心」です。社寺のお賽銭箱に「喜捨（喜んで捨てる）」と書かれているのを見て、疑問に思われた方もいるでしょう。「捨」とは慈・悲・喜・捨の心で、執着しないということです。「捨」はお布施のことなのです。お布施というと、すぐに「あげる」と考えられますが、本当は「させていただく」という感謝の行為が「施」なのです。一般的にモノをさしあげれば、受けとった人は「ありがとう」といいます。

しかし、布施の心からすれば、もらった人だけでなく、施した人も感謝することなのです。施させていただきまして有り難うございます。「喜捨」することで人は罪深い執着心を捨てる事ができるのです。そのために喜んで供えさせてもらうので「喜捨」というのです。

近年、ロータリーは大切な「人の幸せを祈る心」を失い、うわべだけの弱者救済に終始する寄付団体、慈善団体、ボランティア団体になってしまったように思えます。弱者救済はロータリーアンの務めですが、中でも金銭奉仕が一番やりやすい奉仕です。人は慈善や寄付をすることによって自分の精神状態は満たされます。ただしその絶対条件は自分より金銭的、精神的、肉体的に不幸な人が存在することです。われわれが幸せであることを確認するためには不均衡な社会が必要です。皆が満ち足りているなら奉仕の必要はありません。ロータリーアンにはそんな人はいませんが、一般に「弱者救済」を唱える人々が本当に守りたいのは、「気の毒な人々のために善意を示している自分」という自己満足でしかないことが多いようです。そうしたイメージは、善意の衣を着ているが故に次第に傲慢の雰囲気帯びることになります。しかし、そのような「弱者救済」の論理は、「弱者」が何時までも「弱者」であり続けることを前提にしています。「弱者救済」の論理が幅を利かせている限り、「弱者」は「強者」たることはできないのです。ロータリーの奉仕は本来このような「慈善/charity」「寄付/contribution」「施し/giving」とは異質のものです。ロータリーの奉仕とは、人の不幸を自分の問題としてとら

える純度の高い哲学的な物の考え方なのです。人の不幸に救いの手を差し伸べるとき、救われるのはむしろ手を差し伸べた自分の方だと考えます。なぜなら執着心や醜いエゴの心を捨てることができるからです。

《奉仕の難しさ》

大事なことは貧しい人々に金銭奉仕をする場合、奉仕を受ける側の気持ちの中の《貧困のスティグマ》を十分付度（そんたく）しなければなりません。スティグマ／stigmaの語源はギリシア語で、肉体上の「徴（しるし）」を指す言葉です。奴隷、罪人を表す為に体に刻みつけられるか焼き付けられた「痕」でした。いかにして貧困者に生活の保証を、スティグマ（恥辱あるいは汚名）を着せることなく与えるかということは、英、米の社会政策にとって大きな課題なのです。スティグマの概念は尊厳の喪失、市民権の否定、きまり悪さなどと多様です。貧困という問題に限定して考えれば、それは他者とのかわり合いの場合の依存性といえます。どのような依存の形であれ、依存状態に陥ることはだれも望みません。依存という概念の対語は自立であります。なぜスティグマを人は負うのでしょうか。

人間は元来、経済的存在ではなく社会的存在です。人間の本来の目的は個人的利益を守ることでなく、むしろ社会的名誉、社会的地位を確保することにあるでしょう。古くから世界に広く見られる経済規則は「贈り物には何らかのお返しをするのが至極当然である」という互惠関

係（交換）と自助の規範です。この互惠觀念の規範からはずれると、やがて依存状態にある人の身分關係を低下させます。「貧困であることが恥ずかしいこと」ではなく、「貧困のために他者に依存することが恥ずかしいこと」であるという訳なのです。我々が経済的に独立できないために、自分および家族の生活を全面的に他者ないし公的秩序に依存せざるを得ない状況を思うとき、あるいは何らかの依存状態にある時に他者から一方的な贈与を受け取る時の「惨めさ」は容易に予測できます。

ノーマルな社会とはギブ&テイクの社会です。互いに人間としての尊厳を持てる社会に施しはありません。私の年代は先の戦争直後の非日常の極限状態を経験しました。進駐軍（米兵）からガム、キャンデーを走行中のジープから投げ与えられました。また学校給食では脱脂乳のお世話になりました。脱脂乳を飲む子供たちの感謝の笑顔が報道されました。しかし子供たちの心はなぜか悲しい複雑な気持ちでした。途上国の少数民族の壁もない小学校、貧しい子供たちに絵本やノートを渡すと精一杯の笑みを浮かべてお礼を言います。しかし誇り高い彼らは与える側の善意の行為をどう受け止めるのでしょうか。依存状態に置かれた人がバランスを回復させるために、相手に与えることができるのは笑みを浮かべることと感謝の言葉だけです。ここに与えることの難しさがあります。与えられる側にも人間としての誇りがあります。我々は奉仕をする際、相手のステイグマに十分気を配らねばなりません。ガンジーは、「真の善行

は、純潔な者だけがなし得る。善行をひとつしてやろう、などと考えてから善行するような作為の人間は、もうすでに不純だ」と言いました。スティグマを和らげるには施しをするのではなく、祈りの心を持つて喜捨をさせて頂くのです。

《ロータリーのエゴ・他人の金で奉仕する団体》

ロータリーは過去に幾千万の人々に人道的な救いの手を差し伸べてきました。これは偉大なことです。あくまでロータリーの奉仕は個人個人の善意によるもので、それぞれが分に応じて喜捨することによって成り立っていました。しかし市場経済が巨大になり、それが国際的な格差増幅にまでなつてくると個人的な善意ではとても手が回らなくなつてしまいます。そこでロータリーも他人の金を集めて善行をするという虚構、つまり「他人の金で奉仕する」団体となつてしまいました。RIの特別プログラムである「ポリオ」は別格として、WCSもマッチンググラントもロータリーのある国同士の奉仕プログラムです。ロータリーの存在しない地域の弱者は浮世の荒波の中に捨て置かれます。彼らから見るとロータリーはエゴイストの集まりと映るでしょう。ロータリアンとして大事なことは、ロータリー加盟国以外の国の貧困の極限状態にある人たちへも「奉仕の心」を適用して、個人としてユニセフをはじめ、多くの人道的NGOに、心のこもった支援募金活動をするることなのです。

氣高き岩頭 (The Great Stone Face)

〈ロータリー運動の目的〉

ロータリーはうわべだけの人間を作るのではなく、人間の体質改善を行うものです。

ロータリーの内部で体験を積むにつれて、人はロータリアンになっていくのだと、ガイ・ガンディカー（元RI会長）は『ロータリー通解』"A Talking Knowledge of Rotary"の中で述べています。ガイ・ガンディカーはこの言葉をナサニエル・ホーソンの短編『氣高き岩頭』から引用しました。そのあらすじを抜粋してご紹介します。【それは深い谷間はずれに、自然がいつも見事な手法で岩肌を削り取り、その岩頭は、遠くから眺めると荘嚴な人物の像に似ていました。インディアンの子供が生まれ、その子が偉大なかつ高貴な人となるべき宿命を負うときは、その姿がかの岩頭そっくりになるといふ予言が言い伝えられていました。村の少年アーネストはこの予言をいつも心にとめ、その日の仕事が終わると何時間もじっとこの岩頭を見つめ、他の人々の気付かないことをたくさん見出したのです。やがてアーネストは進歩を続け、その部族の村の先達となりました。ある日訪れた詩人と終日語り合ったのち、日没になっていつものように村の者たちに説教をおこないました。彼の言葉は人生そのものの言葉でした。善行と崇高な愛が彼の言葉に満ち溢れていました。アーネストが群衆の前に立つのを見る

のは印象的でした。遠方にくつきりと、これから沈まんとする黄金色の夕日の中に、気高き岩頭が高くそびえ、その周りに白い霧がただよう有様は、あたかもアーネストの額に白髪が垂れ下がっているのと同じでありました。彼の仁慈、大悲をたたえる顔を見て、詩人は、その衝動に耐えかねて両手を高々と上げて叫びました。「見よ。アーネストの姿こそ気高き岩頭だ」人はロータリーのなかで、アーネストが気高き岩頭を探索したやり方に従って進歩してゆきます。ロータリアンたちは深い思索に立つて、多面的なロータリーを追求し、ロータリアン以外の人たちには見えないことを見通さなければならない」とガイ・ガンディカーは述べています。ちなみにガイ・ガンディカーは関東大震災の時、「東京壊滅する」という知らせを受けるや否や、直ちにR Iのなけなしの2万ドルの救援金を東京RCへ送ってくれた日本にとって大恩人です。

《人面の大岩》

小堀憲助氏の訳でガイ・ガンディカーの『ロータリー通解』(A Talking Knowledge of Rotary)を読んだのは20年ほど前でした。このパンフレットには初期ロータリーの先達が開発したロータリーの諸原則が書かれています。特に上記の『気高き岩頭』の文章に触れたとき、会員増強と財団支援と組織管理主体のロータリーに比べて、強いカルチャーショックを覚ええました。ロータリーは人間の体質を改善する運動だったのです。この小文に触れて以来『気

高き岩頭』は一体どこに実在するのか、あるいは作家のフィクションなのかという疑問が、寝ても覚めてもいつも私を悩ませました。そこでナサニエル・ホーソンの原文なら、あるいは実在の地名が分かるのではないかと彼の作品群を探しました。ホーソンは『緋文字』『七破風の館』の作品で注目されましたが、短編やエッセイ類はあまり日本に紹介されていません。苦心の結果、ついに『人面の大岩』という短編があることを突き止め、はやる心を抑えて一気に読み下ろしました。題名は『気高き岩頭』ではなく『人面の大岩』ですが、英文のタイトルは(The Great Stone Face)で内容も同じでした。ただどこにも場所・地名についてはまったく触れられていません。1996年、ポール・ハリスの没後50周年を機に、ロータリーの始祖の足跡(揺り籠からお墓場まで)を訪ねてまいりました。始祖にまつわるまだ知られていない貴重な発見が随所にありました。その旅行の際にも、時折『気高き岩頭』のことが頭をよぎりました。ホーソンはマサチューセッツ州の出身なので岩頭が自然に実在するならマサチューセッツのどこかであろうと推測していました。また登場するインディアン少年はおそらくマサチューセッツ州の地名の由来となったマサソイト族であろうと私なりに推測していました。しかしニュージーランドのロータリアンたちにこのことを聞いても残念ながらわかりませんでした。

《マサソイト大酋長》

ところが数年前のある日、書店で『ニューイングランド物語』（加藤恭子氏著）という本の題名が目に入りました。ニューイングランドといえばポール・ハリスが自伝の中でロータリーの故郷と言ったようにロータリーの揺籃の地です。もしやと思い買い求め読みました。なんとそこに人面岩についての記述があるではありませんか。「ユリイカ (eureka) !」と思わず叫びました。ユリイカとはアルキメデスが王冠の金の純度を量る方法を発見した時の叫び声から《見つけた！わかった！しめた！》というギリシャ語です。ついに気高き岩頭のモデルとなった場所を知ることができました。積年の胸のつかえが下りました。『ニューイングランド物語』より人面岩に関する記述の部分を抜粋します。「マサチューセッツ州アソネットにあるフリータウン州立公園。かつてはインディアンの聖地だった。車を止め、前の斜面を上がると、それが崖になっていて突然視界が開ける。崖の足元は谷。その谷の向こう側の岩山に、巨大な人面岩が突出している。マサソイト大酋長の横顔としてインディアンたちが祈りをささげたといい。マサチューセッツ州とはマサソイトの土地という意味である」

余談ですが1620年、メイフラワー号で新大陸にやってきた102人（ピルグリムズ／巡礼始祖）の人々は最初の冬がやつと過ぎたころなんと半数は冷たい土の下に眠ることになりました。だがマサソイト大酋長と友好関係を持てたことにより彼らの生活は安全なものとなり、

翌年の11月、ピルグリムズとインディアンは一緒に新大陸で最初の感謝祭が行われました。戸外のテーブルには、その年獲れた野菜、木の実、野生の七面鳥、鴨、鶉、野生のブドウから造ったブドウ酒が積み上げられました。主客のマサソイト大酋長は、90人の部下と5頭の鹿を手土産に参加したとあります。アメリカに滞在した人なら、困難な冬を生き延びた後の感謝祭がどのように大切なものかご存知でしょう。ピルグリムズはインディアンと一緒に感謝祭を祝ったことは、この国は両者の協力の上に築かれたという建国の友愛神話が根底にあります。すぐにも現地を訪ね「人面岩」を訪ねたいと思いましたが、場所が特定できたのだからいつでも行けると安心してまだ訪問は果たしておりません。せめてネットで人面岩の写真があれば見たいと思い検索しました。幸いにもフリータウン州立公園内にある“Profile Rock”の写真を見つけました。あまり鮮明ではありませんがこれが『氣高き岩頭』のモデルとなった大岩です。どうぞ老タリアンの物好きをお笑いださい。

我々はどこへ行くのか

《あらばしり・中汲み・責め》

早いもので、私の“Rotary Notes”も最終回となりました。ロータリーを愛しているがゆえに、いつもロータリーの行く末を案じて辛口の話が多くなりました。ロータリーを讀えることはやさしい。しかし物事には必ず光と影があります。自分の月信ならともかく、矢橋ガバナーの月信の軒先を借りていながら、つい身勝手なドグマティックな文章になってしまい、われながら読み返す気にもなれず内心忸怩たるものがあります。

ロータリーを学ぶには、科学的なアプローチと哲学的なアプローチがあります。手続要覧を見てもお分かりの通り、ロータリーは実に多くの歯車から成り立っています。「ロータリーを科学する」とは、それらの歯車を別々に分けてその一つ一つについて正確な知識を得ようとするものです。

ただロータリーは年々複雑、細分化しすぎて、相互の連携が難しくなり、木を見て森を見ずの弊害が心配されます。では「ロータリーを哲学する」とは、どういうことでしょうか。科学の対象は存在の一部ですが、哲学のそれはロータリーの存在の全部です。ここで注意しなければならぬのは、哲学は存在の全部であるというのは、一つ一つのものを全部知ること

でなく、全体を統一的に知るということです。私は月信に原稿を書くにあたり、「ロータリーとは何か」、「ロータリーの奉仕哲学」、「ロータリーの存在理由」など、ロータリーをトータル的にとらえてみたいと思いました。しかし、私は決して科学より哲学的アプローチが優つているとは言いません。科学と哲学はいずれも必要で、相補って完全になるのだと思います。

酒を絞る行程の言葉に「あらばしり・中汲み・責め」の三段階の名前があるそうです。最初に出てくるお酒は薄く濁っていて、これを「あらばしり」といいます。「あらばしり」が出終わると、透明なお酒が出始めます。この透明な部分を「中汲み」といい、香味のバランスにすぐれています。最後に圧力を掛けギュツと絞り取ることを「責め」といいます。私の月信への寄稿も酒を絞るときと同じようなサイクルでした。最初のころの原稿は、内容は乏しいが割合苦勞せず勢いで書きました。中盤はとて「中汲み」の銘酒とは言えませんが、最初のころに比べて、自分の書きたいものが迷わずに頭の中にスムーズに湧いてきました。しかし終盤になるにつれ頭の中が空になり、脳みそに圧力を掛け、ギュツと絞り取る「責め」の苦渋を味わいました。ものを書くには、頭の中に書きたいテーマが浮かんでこなければなりません。テーマが浮かんでも、すぐには書き出さずに、頭の中でそのテーマを自分なりに推敲し、咀嚼して熟成させ、醗酵するのを待ちます。しかし馬齢を重ねると感激が薄れ、最近は特に書きたいものが浮かんでこなくなりました。年齢のせいだけでなく「アルチュー・ハイマー」のせいでしょう。

《我々はどこへ行くのか》

久しぶりに名古屋に行き、名古屋ボストン美術館に寄る機会を得、ゴーギャン展を見ることができました。文明社会に背を向け、「楽園」を求めてタヒチにわたり、魂の叫びを表現し続けた画家の作品に直に触れることができました。大勢の人物群像を深い宗教的思索で描いたゴーギャンの大作、『我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか』という題名の絵を前にして、強いインスピレーションに打たれました。たまたま名古屋へ行く数日前、ロータリー財団は金融危機のため、およそ220億円（全世界の年次寄付2年間分）の投資損失を計上、結果として財団プログラムの大幅な縮小を余儀なくされたというニュースを知りました。「古来金銭を求めて失敗した例は枚挙にいとまがないが、心を求めて失敗した例は寡聞にして聞かず」といわれます。ロータリーは本来、心を求める精神奉仕が本筋でした。しかし今や、人の金を集めて奉仕するという財団中心の金銭奉仕団体になってしまいました。しかし「倫理なき経済は罪悪 経済なき奉仕はたわごと」の言葉通り、ロータリー財団が破綻しては、金銭奉仕は難しくなってしまうました。

ゴーギャンの絵の題名のように、我々ロータリアンは「どこへ行く」のでしょうか。何を目標に活動したらいいのでしょうか。この命題を、我々は考えて、考えて、考え抜くことが大切です。瑣末的な金銭奉仕にとらわれずに、今一度我々に課せられたロータリーの「根本使命」

を考えましょう。そのヒントとしてフランスの知の巨人、ジャック・アタリ氏の言葉をお伝えしてお別れとします。

『みんながボランティアで生きていける社会。お金を必要としない貢献主義社会です。自分が出来ることで社会貢献する。それだけで社会は機能します。今まで金儲けに知恵を出してきました。地位や名誉を得るために知恵を出してきました。その知恵やエネルギーを博愛と利他精神に変えて、超民主主義社会の実現に使って欲しいのです』

今こそ職業奉仕を！

〈ロータリーの存在理由〉

日本のロータリーの始祖は、米山梅吉氏であります。三男の桂三さんが慶応大学の教授になり、「父米山梅吉を語る」という手記の中でロータリー運動について次のように語っています。『ロータリー運動とは、社会・経済史的に見ると、資本主義の発達という歴史的必然と、資本主義の欠陥を救おうとする人物の出現という歴史的偶然との交錯したところに生まれた運動である』

1880年頃から、20世紀初頭にかけてアメリカにおける資本主義は、独占体制の段階に入りました。そうなると資本主義の欠陥がいたるところに姿を現しました。そのような時代にあつては、健全な中産階級の中から社会改良思想が生まれてくるのは、けだし当然のことで、ポール・ハリスが、三人の友人と語らつて何か世の中のためになるような集まりを作ろうじやないかと、ロータリークラブを作った1905年が、ちょうど初期資本主義が最盛期を迎えた年だったということが、私には大変に興味深いのです。なぜならロータリーは、誕生のその時から資本主義の欠陥を救う運命にあつたのだなと私流に解釈をしています。

では19世紀の末葉から20世紀初頭にかけてアメリカのシカゴには、どのような欠陥があつた

のでしょうか。資本家が政治・経済の主導権を握り、私利私欲中心の拝金主義が横行し、貧富の差の拡大により、スラム街がいたるところに姿を現し、シカゴは伝染病や犯罪の温床となり商業倫理の欠如の上にいたずらな繁栄が築かれておりました。シカゴはまさに弱肉強食の街でした。

このようなときには、中産階級の中から様々な社会改良運動が起こりました。まずセツツルメント運動ですが、これはジャン・アダムの始めたハルハウスが有名です。これはスラム街の中に拠点を移し、そこで貧民の厚生運動をするものです。他にはアル・カポネが暗躍していた当時の風潮を反映して女性キリスト教禁酒同盟や、反酒場連盟が結成されたり、貧民に無関心であつた教会も社会福音運動を展開し始めました。また救世軍活動や、YMCA、YWCAその他多くの慈善団体が現れました。

《社会改良の処方箋》

ロータリーはこのようにときに当たり、病める都市シカゴを救うために、どのような処方箋を書いたのでしょうか。ロータリーは特定の事業を標榜する奉仕団体ではなく、奉仕を志す人の集まりです。20世紀初頭の混沌としたシカゴで、ロータリーが目指した社会改良の処方箋とは、社会の基である個人の心を教化することだったのです。ロータリーは、人間の徳性の向上が人類社会発展の基本であることを信じて疑わないのです。ロータリーは一業一会員制によつ

て選ばれた地域社会の中で最も特性を重んじる職業人が、毎週一回の例会で親睦のうちに各自の識見の広さと判断力を強化して、それにより社会を改良しようというものです。ロータリーは、資本主義の病を治すのに個々の人の徳性を向上させることにより、根本的、本質的に病根を治療しようとするもののなのです。1905年の草創期に当たって一握りのロータリアン達は具体的に一体何をしようとしたのでしょうか。彼らもまた資本主義の中で生活をしなければならぬのであるから、まずその激烈な商業上の生存競争に勝利者たる栄冠を得なければならなかったのです。そこでこれらの人々がロータリー運動に参加したのは、親睦の場であるクラブの例会に彼らの企業上の問題を持ち込み、衆知を集めてその改善策を練り、それによつて劣悪な資本家との競争に打ち勝とうとしたのです。ただここで注目すべき点は、彼らはその競争の手段としてあくまでも正直、勤勉を前提とし、友愛を根本として企業経営を行い、商業道徳をあげるということに専念しました。そしてその商業道徳の高揚による運動が、やがて自己の企業に利益をもたらし、資本主義の世界で勝利者となつていきました。つまりロータリー運動は、その根底において自己の発展を目的とする実践活動であることが明らかにするとともに、その実践活動の指導原理として、正直、勤勉、犠牲、献身、他人に対する思いやりといったような平凡な原則を心の中に常時温存しようとするものです。アメリカ人は出世物語が大好きです。それでロータリー運動は20世紀初頭の貧乏商人の出世物語とも言われました。ここでその

具体的な例を一つ挙げてみましょう。

1929年、フーバー大統領のときアメリカ経済界は大恐慌に見舞われ、その影響は世界中に及びました。資本主義の過剰生産がもとで、銀行のとりつけ騒ぎが起り、倒産、破産は数知れず、人々は職を失い家を失いました。しかしそのような大恐慌の中にあっても、ごく少数の人たちは何とか倒産を免れ、仕事を続けておりました。それらの人々はみな胸に見慣れない歯車のバッジを付けていました。彼らに何故この栄枯盛衰常なきとき、安定した企業を続けてこられたのかと聞くと、自分たちはロータリアンであり、ロータリーの教えを守って商売をしている。その教えとは「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」、「超我の奉仕」というモットーであり、他人に対する思いやりの心ですと答えました。そのときのロータリアンが偉かったのは、不況の最中自分の企業を守ったばかりか、不況で倒れた同業者の救済に乗り出したのです。そればかりか32代大統領ルーズベルトのニューディール政策にも企業倫理基準高揚のため献身的に参加しました。そしてこのときからロータリーの職業奉仕は、不況に強い哲学だと評判になり、ロータリーへの入会者は引きも切らない有様でした。職業奉仕の哲学は資本主義社会の中で、ロータリアンにも非ロータリアンにも、共にベネフィットを与える普遍の真理となったのです。

《顧客の信頼を貫き通すこと》

それから75年後の今、バブル崩壊後の日本は大不況にあえいでいます。情報革命を経て地球経済は一つになり産業構造は大きく変わり、資本主義は資本の論理により巨大化しました。もはや当の主体である人間の意志を離れ市場経済、多国籍企業という暴れ馬が怒涛のように世界を瞬時に駆け巡っています。いくら投機的な商業活動を罪悪視しても国際規模に巻き込まれてしまった我々はどのように行動することが合理的であり倫理的・良心的なのでしょう。我々は新たな職業奉仕の基準をつくらねばならないのでしょうか。もはやロータリーの職業奉仕は色褪せてしまったのでしょうか。いや、ロータリーの職業奉仕の理念は資本主義社会が続く限り普遍の真理です。職業倫理と資本主義は車の両輪です。資本の論理だけの社会には人は住めません。

混沌とした今の時代に舵を取らねばならぬ企業経営者は孤独な決断を強いられます。正しい方向に進路をとり、足並みそろえてことに当たらなければ船は難破しかねません。トップの決断は会社の命運を担います。企業経営者の抛り所は職業奉仕に徹する事、つまり「顧客の信頼を貫き通すこと」そして「超我的奉仕」というロータリーテーマの実践にあります。大切な顧客の信頼を裏切れば手痛いダメージを受け企業の存亡は危うくなります。

ロータリーがかつての栄光を取り戻し、生き延びるためには、今こそ自己の企業と地域社会に大きく貢献できるロータリーの職業奉仕を再構築する事が急務です。

寄付と喜捨

〈神との緊張感〉

ロータリーの奉仕には額に汗する奉仕と、お金を出さなければ出来ない奉仕があります。ロータリー財団や米山奨学会がそれです。我々の捧げた一灯が人類平和のため、国際レベルの人道、教育的プログラムを通じて、世界の隅々を照らす万灯の灯りとなることを祈ります。我々は単なるお付き合いの「寄付」ではなく善意の心を持って「喜捨」をしたいものです。しかし時々「財団」や「米山」に寄付を取られたという表現を耳にします。そこで「寄付」と「喜捨」について考えてみました。アメリカでは「困窮者に対する寄付、慈善寄付」など日常の習慣として自然体で行っていますが、日本では寄付と聞くと、つい構えてしまいます。宗教観の違いでしょうか。

ロケット博士として有名な糸川英夫さんは、「日本の科学には神との緊張感が無い。なぜならニュートンの力学やアインシュタインの相対性理論を取り入れた時、背後にある神は置き去りにしてしまった。政治も経済も同じで、日本では失敗しても神への倫理的責任はあまり問われない」と云われました。ロータリーも同じです。ロータリーは本来中世キリスト教神学の復興運動であります。日本にやって来た時には背後にある神は置き去りにされました。ロータ

リーはピューリタンの戒律を一般生活の中で道徳として実践しようとする運動であります。特にアメリカは日常生活の中に神が遍在しています。ちなみにアメリカの全てのドル紙幣の裏には「In God We Trust (神に我々は信を置く)」というフレーズが印刷されています。社会の関係性が成立することを保証する主体が神であります。またアメリカ国歌、政治家のスピーチの中にも神に言及する表現が多くあります。ロータリークラブの例会を教会の日曜ごとの礼拝になぞらえることは飛躍しすぎることかもしれません。しかしロータリーの哲学とその組織を考えると、両者が果たしている役割には、共通したものがまったく無いとは言いきれません。哲学と宗教は紙一重です。アメリカのロータリアンの中には日曜ごとの礼拝に欠かさず出ている人はたくさんいるでしょう。彼らは教会の他にロータリークラブの例会にも出ています。ところが幸か不幸か我々の多数はほとんど日常、宗教に関心を持っておりません。その結果、現代の社会は、「物と心」の乖離により嘆かわしい倒錯の世相になりました。戦後、連合国軍総司令部は教育基本法を作り、歴史や文化、伝統、宗教を否定し続けてきたのが原因です。特に宗教観の欠如により、自分の思想で自分を律することをやめた日本人は哲学を失い、ふわふわ波間を漂う根無し草となっていました。

ロータリーでは政治と宗教の話はしません。またポール・ハリスはことさらロータリーと宗教を切り離そうと気を使っておりますが、それは宗教戦争まで起こした一神教世界の歴史が念

頭にあるからです。またロータリーを世界へ拡大するためにRもキリスト教の匂いを消そうと努めました。我々東洋の多神教思想で育ったものからすれば、ロータリーも一種の宗教であつても構わないのです。儒教は厳密な意味で宗教といえないかもしれませんが、それでもやはり宗教的な何かを持っています。人間の倫理を構築する基本になるのは結局宗教でしかありません。ポール・ハリスは「ロータリーは宗教でもなければその代用物でもない。古くからある道徳観を」などといっていますが、ポールの道徳観の根底にあるものはやはりキリスト教ではありませんか。そう考えてくると我々職業人の信奉する宗教として、ロータリーの唱える「職業奉仕」の精神を挙げたいのです。

《シドニーRCCの募金箱》

以前、仕事でオーストラリアに良く参りました。シドニー空港の2階フロアーにプラスチック製の募金箱があります。シドニーRCCの名前が大きく書かれています。ロータリーのよしみでいつも帰国の際、余ったオーストラリアのコインや小額紙幣を入れていました。ある時一人の小柄な夫人がつかつかと募金箱に近寄って何がしかのお金を入れました。私は思わずその夫人にあなたはロータリアンですかと聞きました。いいえといって夫人は去って行きました。しばらくすると中年の男性が幾ばくかのお金を入れました。私はまた、あなたはロータリアンですかと聞きました。ノーという返事でした。時折通りがかりの人が浄財を入れていました。キ

リスト教の国では寄付とか慈善という行為は宗教的習慣として広く浸透しているのだと感じました。町の交差点でも、足の不自由なお年寄りが渡ろうとすると何人かの人ガラガラと近寄り手を貸そうとします。神様は健常者の心を試すために障害者を作られた、だから健常者は障害者に進んで手を差し伸べる、それが神の御心に適うことなのです。

ロータリー財団への寄付も自分を中心にして人様に尽くすことが「良いこと」「善」だと考えていると今ひとつ判りません。国際奉仕は相手の顔がまったく見えない。誰に奉仕しているのか知らずしてそもそも奉仕ということが成り立つのが不思議です。姿の見えない人に奉仕するとは一体どういうことでしょうか。言い換えれば私たちはまだ見たことも無い、話したことも無い、知らない誰かを、本気で愛することが出来るのか。奉仕という言葉がなじみません。もともと奉仕とは神に仕えるという意味です。日本では人が人に仕える時は奉仕とは言いません。「奉仕の理想」と云っても日本人にぴんときません。奉仕という言葉を日本人に判りやすい表現に置き換えると「ご恩返し」になるでしょう。「ご恩返し」は2通りあります。受けた恩を直接相手に返すギブアンドテイク型のものと眼に見えぬものへの恩返しがあります。もともと私たちの受けている恩というものが、必ずしも見える相手からの恩ばかりでなくむしろ見えない誰かから受ける恩のほうが多いうことに思いをいたすなら見えぬ人たちへ恩を返すのは当然であります。宗教的にいえば、私たちがここに生きていることだけで、宇宙か

らの無限の恩を受けているわけで、私たちの無数の先祖の血が今この命を支えて生かしてくれているわけです。私たちが見えぬかなたの人に向かって恩返しをするのは当然であります。

《僧・叡尊》

日本にも昔から仏教や儒教という東洋哲学の教えがあります。それらもロータリー財団への理解を深め、財団への「喜捨」をいつそう強固に裏打ちしてくれるでしょう。鎌倉時代の叡尊という律宗のお坊さんはいら（ハンセン）病の人たちを収容する建物を作ったり、貧窮者に手を差し伸べたり慈善事業を行いました。私は叡尊のものの考え方を聞いてびっくりしました。それはどういふことかと申しますと、らいを病んでいる人とか、あるいは飢えに苦しんでいる人とか、家の無い子供たちというのは、実は文殊菩薩がこの世に、仮に姿を現されたものである。生きとし生けるものをこの世に作り出し、生かしている造物主といつてよろしいし、神様といつてもよろしいし、仏様といつてもよろしいが、そういう大きな存在が、そこに仮に姿を現したものである。そういう風に叡尊は解釈しましてらい病を患っている人に施しをするといふのは、施しをするのではない。文殊菩薩に礼拝をし、供養するのであるとこういう風にとつたのであります。我々もそのらい病患者も含め、一切を作っている大きな存在に対して、供養をし、礼拝するという気持ちでいささかなりとも自分に属している財物を捧げる。こういう風に考えますと、こんなことは政府のやることだなんて理屈を考えないで、恵まれない人たちに

何かを恵んでやるというような、そういう捉え方ではなく、ごく素直に奉仕が出来るのではないかという風に自分を戒めることが出来たわけであります。大いなるものに生かされていることを自覚し、自分に属するいささかの財物を「喜捨」することにより、執着心が取り除かれる、実は自分自身が救われるのです。普通は中々「財施」のチャンスは無いものです。ロータリー財団のおかげで「喜捨・財施」が出来るという風に考えてはいかがでしょうか。

ロータリーの本（忘れ得ぬ一冊の書）

《奉仕の心の育成》

四国の今治RCに森光繁さんという会員がおられました。昭和26年に「ロータリーの本」というロータリーの綱領についての小冊子を刊行されました。私にロータリーとは何かを教えてくださいました貴重な書です。昭和26年という日本はロータリーが国際ロータリーに復帰したわずか2年後のことです。この本からいかに戦前のロータリアンの質が高かったか伺い知ることが出来ます。綱領は四項目からなっていますが、その中で特に綱領の第三奉仕部門、社会奉仕について、今まで全世界のロータリアンが誰もなしえなかった素晴らしい森氏の所説をご紹介します。

『綱領の第三に、「ロータリアン全てが、その個人生活、事業生活、および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」とありますが、奉仕の理想を千差万別な、日常生活に適用しようなどということは出来ることではない。なぜなら日常の千差万別な、そして何の脈絡も無く、相互に関連性無く発生する諸現象に奉仕の理想を適用しようと身構えることがそもそも無理なことである。それはあたかもザルで水を掬うようなものである。しかしザルを水の中に入れることはたやすく行うことが出来る。人間の心の世界は無限性を持つているから、これを「奉仕の海」に浸しておく、心は「奉仕の海」に住んで常住坐臥、奉仕の世界から抜け出ることは出

来ない。したがってその心を持って淡々たる行動を日常万般の生活の中で行えば、その行動はおのずから、奉仕の心の実践という形をとる。』

これが奉仕の心の適用に当たると説くのであります。もう少し徹底して云えば、一切の生活の中に「奉仕の理想」が適用されるというよりも、一切の生活が「奉仕の理想」の中に没入している姿が最も理想的であります。

2005-06年度のステンハマーRI会長は、「超我の奉仕」をよく理解して実践してほしいといわれました。「超我の奉仕」を一片の知識(Knowledge)として理解するのなら中学生でも出来ます。よく理解して実践するとはどういうことでしょうか。ステンハマー会長は単なる知識ではなく、智慧(Wisdom)にまで昇華させて欲しいと願っておられます。「超我の奉仕」を智慧にまで高めるとは、具体的にどうすればいいのでしょうか。

我々には本来の仕事があり、そのほかにロータリーがあるというのは間違っています。つまり我々の仕事や生活の一部分にロータリーがあるのではなく、我々の仕事や生活の基本が「超我の奉仕」の中に無ければなりません。日本のロータリーの始祖、米山梅吉氏の言葉を引用させていただきます。『自分の人生に於いて判断の背後にございますものはロータリーの理論でございます。その理論はどこから来たのかというとロータリーの例会出席を通じてでありまして、その意味でロータリーの例会は人生の道場といえます。私のことをロータリーの米山と呼

んでいただいて結構です』。

森光繁氏のいわれた「奉仕の海」とは、米山さんにとつては、ロータリーの例会のことでした。また私は、公式訪問の際困っている人の戸口にそつと物を置いてくるのは立派な奉仕の実践ですが、ロータリーでは困っている人の戸口へそつと物を置いてくることよりも、むしろ困っている人に物を届けるといふ心の境地のことを奉仕だといいました。「奉仕の心の育成」がロータリーの目的で「奉仕の実践」は奉仕の心を育成する手段です。

『奉仕の心の無いままに、ただ奉仕を形に現してロータリーを示そうとすればこれは奉仕ではなく寄付であり、慈善行為となってしまう。奉仕をはじめから何か形で表そうとすることは悪く言えば安易を求めるものであつて、決してロータリーの奉仕ではありません。見せたい奉仕、後に残したい奉仕、こんな衝動に駆られる気持ちも分らないが、何故奉仕を形にしたいために、どうしてあんなに苦勞するのか。その苦勞を例会を通じてロータリーの心を育成するための努力にしたらどうだろうか。奉仕がいかに華々しい形で示されてもロータリーの心のこもらぬものならば、その活動は奉仕ではない』これも森光繁氏の言葉です。

《ロータリーの社会奉仕》

さて社会奉仕ですが、ライオンズクラブは例会のたびに寄付金を集めて団体で金銭奉仕をします。公園に時計塔を寄贈したり、町に救急車を寄付したりします。1917年メルビン・

ジョーンズによりテキサスのダラスで活動を開始し、今日のわが国の多くの地域社会において大変活発な運動を行っているライオンズクラブの奉仕に対し深い敬意を表しながら、一体ロータリーの社会奉仕は、ライオンズクラブのそれとどう違うのでしょうか。まず云えることは、ロータリーの社会奉仕活動の資金はニコニコ箱が頼りで事業資金は持っていないません。皆さんの払う年会費はクラブの運営費で、奉仕のお金は含んでいません。クラブの大小にもよりますが、大体一クラブあたり年間15万円から30万円くらいがニコニコ箱より割り当てられています。しかしロータリークラブは地域の中から選ばれた職業人の集まりです。その職業人たちが、年間15万円から30万円のお金を地域社会に還元したからといって、果たしてロータリーは奉仕クラブといえるのかという問題があります。実はこのお金は社会奉仕の事業費ではなくて、社会奉仕委員長さんが毎年、地域の中にどのような救済の手を待っているニーズがあるのかを調べる調査費であり、そしてそのニーズを会員に伝え、救済活動の働きかけをする「呼び水」なのです。

社会奉仕は、クラブ全体でも行いますが、大事なことは金銭による団体奉仕ではなくてロータリアン一人一人の個人奉仕なのです。綱領にあるとおり「ロータリアン全てが、その個人生活、事業生活、および社会生活に常に奉仕の理想を適用すること」なのです。

ロータリーの社会奉仕は「コミュニケーションサービス」の訳語です。コミュニケーションサービス

を日本語で社会奉仕と訳したものですから、おかしいことになってしまいました。社会奉仕というと、強い立場のものが弱い立場のものに対して何かを施す、恵んであげるというイメージがどうしても伴います。けれども、もともとコミュニティサービスは、「良き市民たれ」というのが本筋です。コミュニティサービスを適当な日本語に訳せないかと考えたときに浮かんだのは、「親身になる」という言葉です。「親身になる」とは「相手の身になる」ことで「友情にあふれた関係」を作ることです。

「親身になる」ということが、自分の町内で発揮されれば、それがコミュニティサービスです。お互いに友情あふれたコミュニティを作ることが社会奉仕なのです。ロータリー運動の中核をなすものすなわち一番大事なものは、何であるかということ、仮に表現したならこのようにいえます。

自分の住んでいる町や市に対して、親身になれば、商売においても親身になれば、ということが高く掲げて、そのような人に育っていく事を手助けする。一人一人の努力も勿論大切ですが、でも、一人より二人、二人より三人が、一緒に励ましあい教えあう中から、そういう「親身になることの喜びを味わえる」人々の和を広げていく事、これがロータリー運動の中核をなすものではないかと思うのです。

ロータリーと否定の論理

〈ロータリー・何を学ぶのか〉

ロータリーとは何かを考える上でもっとも大切なことは、ロータリーの精神とは何かということです。選ばれて初めて入会した人や、手続要覧に初めて出会ったロータリアンは、その難しい理屈に圧倒され、しばしば途方にくれるでしょう。このようなロータリーを管理する技術的仕組みは、もちろん重要ではありますが、第二義的なことに過ぎません。私たちはその組織規定に迷わされることなく、技術の背後にあるロータリーの精神を見抜かなければなりません。いくらロータリーの奉仕プロジェクトを学んでも、その精神がわからなければ、ロータリーがわかったとは到底いえないでしょう。ロータリーの精神とは、一言でいえば倫理であります。ロータリーは職業人の集まりです。それゆえロータリーとは何かという問いは、職業倫理とは何かという問いに置き換えられます。法学は正義を探究し、芸術は美を探究する、科学は真理を探究するという例に例えるなら、ロータリーとは職業倫理を探究することになります。だからロータリーに入会したものは、倫理を求め、職業奉仕を実現する精神を身につけなければなりません。この原点を忘れたものはロータリーについて語る資格はありません。

では職業奉仕を実現する精神はどこで身につけたらいいのでしょうか。それはロータリーの例会です。また奉仕の海を航海する者、何を一体目印にしたらいいのでしょうか。それはロータリーの開発した良質な理念なのです。理念にはロータリーの綱領、ロータリー標語、四つのテスト、ロータリー倫理訓などがあります。ロータリーのバイブルである決議23-34によると、これらの奉仕の理念を団体で学ぶこととあります。次いで各会員から自分の業界に無い知恵を学びます。つまりロータリーの例会は会員同士が切磋琢磨してロータリーの理念と異業種の知恵を学ぶ教育的な場なのです。そのためにロータリーは比類なき、特別の制度を用意しています。ロータリーは無数の歯車から成り立っています。その中で特に重要な二枚の歯車があります。それが「職業分類制度」と「例会出席」です。ロータリーはこの二つを失うとロータリーという名前は残ってももはや異質の団体となります。「職業分類制度」の原則は一業一会員制です。職種が異なるとそこから発想する人生観がそれぞれ違います。自分の業界に無い異業種の知恵を毎回の「例会出席」を通じて学び自分を高めていく、これが奉仕の心の育成にあたります。職業が違ふということは互いに『異質』であります。またロータリアンは企業の管理者としてレベルは同じです。レベルが同じだと仲良くなれます。レベルが同じということは互いに『等質』です。『異質』と『等質』が出会うと爆発的自己改善効果が起こります。ロータリーで漠然と切磋琢磨とか自己改善とか言いますが、これは『異質』と『等質』の出会いの

ことなのです。ロータリーは異業種の会員の知恵を例会の親睦を通して学ぶことなのです。近年、悲しむべきことはロータリーを隆盛に導いたこの比類なき「職業分類制度の原則」と例会への「規則的出席」がないがしろにされ、換骨奪胎、ロータリーは人を作る運動から、人道的国際ボランティア団体に移行してしまったことです。しかし奉仕の新世紀を迎えてRIは職業奉仕の再構築を提唱し、原点回帰の姿勢が見えたことは日本のロータリアンにとって朗報です。

《弁証法》

ここでもう少し例会での『切磋琢磨』という表現を認識論的に分析してみましょう。ここに否定の論理の存在を見ることが出来ます。

ロータリーはその発展過程において〈他人の立場に立つて〉という自己研鑽の原則を確立しました。しかし〈他人の立場に立つて〉という原則は、日常の例会では他の会員に対する妥協的対応のみ見られて、相手の気持ちにひたすら迎合することと誤解されています。これでは『切磋琢磨』とはほど遠い次元です。

本来の〈相手の立場に立つて〉ということは、例会場で自分の心の中にもう一人の自分をおいて、現在の自分を否定することです。もう一人の自分が他の会員の言動を見習って、自己否定（反省）することによってロータリアンの境地は進化します。

このことを明確に説明したのは、青森ロータリークラブの渡辺泰助氏でした。氏の会長時代

の会報（1968年1月4日）の（他人の立場に立つて考える）という小文を引用します。

『奉仕第一、自己第二』という標語があります。この言葉もよくロータリーを表しています。しかし私は（他人の立場に立つて考える）ことが、ロータリアンの基本とされるとき、それに最も深い意味を感じます。（他人の立場に立つて考える）ということは、人間の自覚という作用の構造を実に良くあらわしていると思うのです。考えるのはあくまで自分であって他人ではありません。ですから（他人の立場に立つて考える）ということは、自分の中に、自分ではないもうひとりの自分……非我といっておきましょう……を持ち、その立場で考えるということになります。自分で自分の目を見ることは出来ません。いったん、鏡か何かに映して見なければなりません。これと同じように、自分で自分を直接知ることとは出来ません。非我の立場に立つて自分を見て、初めて正しく自分を知りえます。つまり、いったん自分から離れることが必要です。自分についてばかりいては駄目なのです。非我の立場というものは広いものです。自分を深いところから支えている立場です。

自分……我は、空間的にも時間的にも限られたものです。これに対して非我は無限に連なるものです。ですから自分の中に非我を持ち、その立場に立つことによつて、限られた身の我が、限られたものではなくなるのです。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれということでしょう。我だけで持ちこたえられる時間は知れたものです。我は非我によつて歴史に耐えられるものな

のです。〈他人の立場に立つて考える〉という思想はロータリーに固有のものではありません。もつと普遍的なものです。非我の立場に立ちがたい、打算の世界にこれを適用しようとするところにロータリーの本領があると思うのです』

青森RCより40年前の会報を送ってもらいました。渡辺氏はロータリーの例会における否定の論理の存在を明快に解明されました。これは誰もが為しえなかつたことで私は氏をロータリーの恩人と呼んでおります。

〈自己研鑽の目的意識を持て〉

このようにしてロータリー思想の根底には、個々のロータリアンの認識の世界において、奇しくも正反合、直感・反省・自覚という弁証法が作用していることを知ります。〈相手の立場に立つて考える〉ということは、相手に迎合することではなくして、ロータリアンがその心の中に客観的自己を立てるに当たって、相手側の行動を媒体とすることを意味します。これがあればこそ個々のロータリアンがその境地の向上を果たすことが出来るとともに、例会出席およびロータリーの教育的機能の実態がわかるのであります。否定の否定は「重要な発展法則」であります。

ロータリー運動の目的は個々の会員の自己研鑽です。職業人として更に自分を高めるために他の業界の知恵を例会で謙虚に学ぶのです。そのために漠然と例会に出席するのではなく、

ロータリーの例会で自分を磨くのだという自己研鑽の目的意識を持って出席することが必要です。自己研鑽の目的意識を持つということは、〈他人の立場に立って考える〉ということなのです。

「ロータリーとは何か」、「ロータリアンとは何か」がいつも問われますが、これは簡単に答えられる問題ではありません。ロータリーは理解しやすいと同時に定義しがたいものです。ロータリーとは、対立する政治・哲学、宗教、信条の違い、文化的価値の違いが唱える「否定」を潔しとせず、これを超越することによって国際親善と理解を妨げてきた障壁の全てを乗り越えていく生きかたであります。ロータリーはこれらのイデオロギーや信条の違いに関する究極の問題に対して対決するのではなく、寛容の精神でこれらが持つ価値を止揚（他人の立場に立って考える＝否定の論理）して、人間性を高める生きかたです。

このような考え方から、ロータリーにあつては、例会における親睦活動のうちに各自の精神的境地が接触し、自己否定の論理を媒体として各自の精神的境地が高まり、支配ではなく寛容の精神によって社会集団活動が目的を達成するという理論構造を持っています。まして国際紛争を武力行使によって解決することを認めないのです。

悟後の悟り・ロータリーは生涯学習の場

〈ロータリーとの関わり合い〉

その人の人生においてロータリーと深く関わる人もいれば、ほどほどに付き合う人、ロータリーに席を置くだけの無関心の人もいるでしょう。人生とは何かという広く漠然とした問題に私は答えることは出来ません。しかし馬齢を重ねてきた自分の人生を省みて、なるほどこれが人生かとはつきり感ぜさせられるものがあります。それは私を一人の人間として育ててくれたもの、現に育ててくれつつあるものつまり出会いであります。私は自分一個の力で生きているわけではなく、自力で成長しているわけでもありません。さまざまの先人の残してくれた知恵、あるいは現在の先輩友人の導きによって人間となってきたわけで、特に私はロータリーで結ばれた友情に人生の人生たる証しを学ばせてもらっています。

ロータリーは単なる偶然の出会いや、好き嫌いでなく組織立てられた友情です。ロータリアンは自薦してなれるものではなく、他のロータリアンから推薦されてはじめて会員となれます。ただ推薦されずにロータリーの会員になった人がいます。ロータリーの始祖ポール・ハリスその人です。

では世界初のシカゴロータリークラブの第1回目の会合に出席したポール以下3人の会員は

シカゴクラブのチャーターメンバーなのでしようか。厳密に言えばチャーターメンバーとはR I 加入前に選ばれた創立会員のことで、当時はまだR I もチャーター制度も無く、したがってチャーターメンバーとは言わず、4人には敬意を表して『パイオニア・ベテラン』と呼んでいます。ではわれわれは何故ロータリーに選ばれたのでしょうか。いうまでも無くロータリーの目的を実現するためです。そしてロータリーの目的には、疑いもなく職業倫理の高揚という一つの哲学があります。つまり我々はロータリーの職業奉仕の哲学を遂行するためにロータリーの会員になりました。

ここに基本的な二つの問題があります。その一はロータリーにおける個人の問題であり、その二はロータリーにおける組織の問題です。第一に哲学をやるのですから、その基本的な主体は会員個人であります。またその活動は我々の日常生活から離れがたい、きわめて内面的なものになります。それは我々の考え方と行動の基本としての哲学であって、余暇に片手間にやればいいというものではありません。言い換えれば我々には本来の仕事があり、その外にロータリーがあると考えるのは間違っています。つまりわれわれの生活のある一部分にロータリーがあるのではなくて、我々の仕事や生活の基本がロータリー的でなければなりません。ロータリーの綱領の第三はつきりそのことを示しています。

第二に我々の哲学は、孤立していかないということです。ロータリーにおける主体は、会員個

人ですが、その主体は《知り合いを広めていく》というロータリーの基本的な行動の一つを通して、他の会員と係わり合い、他の会員を増やしていくことによって、共通の目的と精神に立つ組織を拡大し、同時にそのことによって我々の職業奉仕の哲学を普遍のものとし、みんなで力をあわせ、その理想を達成しようというのがロータリーという世界的な組織の存在する理由であることを考えれば、それは容易に理解できましょう。

職業奉仕の哲学の實踐がロータリアンの務めと申しました。しかし、ロータリーの職業奉仕には他の奉仕部門（クラブ、社会、国際奉仕）と違い具体的な実践マニュアルがありません。ロータリーのマニュアル書である『手続要覧』の職業奉仕の欄を見ても『職業宣言』《四つのテスト》などについてわずか3ページ弱しか記載されておらず、全体の1%にしかすぎません。このことはR-Iが職業奉仕をないがしろにしているのではなく、ロータリアンは各人の業界から選ばれた人たちで、すでに入会前に職業奉仕の下地は常識として出来ている、だからロータリー入会後は例会で異業種の会員と切磋琢磨して更により良い職業人になることを期待されているのです。いまさら『手続要覧』で職業奉仕についてのべる必要はないのです。ロータリーの職業奉仕の實踐は全てロータリアン個人の叡智に任されています。ロータリーのロータリーたる所以は生涯学習にあります。より良いロータリアンになることは例会で自分の業界以外の会員と知り合い「己の限界を知り以って転機を生ぜしむる」ことが必要なのです。

《悟後の悟り・聖胎長養》

今申し上げたように、ロータリアンは入会前に自分の業界の中で職業奉仕の大切さを悟ったおかげでロータリークラブの会員に推薦されました。そしてロータリー入会后、今度は異業種の会員と交わり更に悟りの道を歩むことになります。禅宗では悟りの後の悟りを「悟後の悟り」、または「聖胎長養」といっています。ロータリーは職業人の「悟後の悟り・聖胎長養」の場なのです。「聖胎長養」とは、修行者が重ねて修業に努め、仏の威儀を長く保つということです。「聖胎」とは、仏となるたねを宿した身体の意です。禅宗では厳しい修行に明け暮れ、師匠の印可を受けた後もまた更に俗世界で修行する義務が課せられます。一度悟った後更に人間社会のさまざまな苦楽を実際に経験してその後布教が許されるのです。ごく卑近な例に例えるのなら、「聖胎長養」とは医学生の「インターン」に当たります。卒業後更に実践経験を積むのです。ここでもう少し聖胎長養について申し上げるとそれは「面壁9年」の達磨大師から数え6代目の慧能は、十数年山中での聖胎長養を師から課せられたことがそもそも始まりです。また日本の大燈国師は師の大応より26歳で印可を受けましたが、京都の五条の橋の下で貧者や非人の群れの中で20年の聖胎長養の後布教をするようにと云われました。時の後醍醐天皇は当代第一の禅者は大燈をおいてないということを聞き、すぐ会いたいと云われます。それは無理でしょう。彼は五条橋下の貧者の中にいますから。帝は使者を使つて探させます。使者

は大燈が昔から好物だった「まくわ瓜」を持って河原に行き貧者の群れに向かって「脚無くして来るものにこれを与えよう」といいます。貧者たちは呆然とします。そこへぼろぼろの衣を着た貧者が来て「手無き手でそれを渡せ」といいます。この一言で大燈は見破られてしまいます。この禅問答から大燈は後醍醐天皇に付きまとわれて、とうとう帝の建立する大徳寺へ迎え入れられることになりました。この話は創作でしょうが私の好きな話です。

要するにロータリーは職業人の『悟後の悟り・聖胎長養』の場なのです。

ロータリー入会前に培ってきた自己の人生学の集大成の場なのです。そこに欠かせないのが異業種の会員同志の精神的親睦なのです。政治、宗教、職業観、人生観など各人の信条は異なります。その違いを認め合うことがポール・ハリスの『寛容論』なのです。互いの違いを認め合い、更に高い次元に切磋琢磨してスパイラルしていくために『寛容の心』は欠かせないのです。

《自分の仏性を磨く》

久しぶりに石庭で有名な京都の龍安寺へ行ってきました。案内のリーフレットに次の言葉がありました。

《禅とは「自己」を拝む宗教です》

《禅とは「自己」の自覚を深く掘り下げる宗教です》

この禅という言葉をロータリーと置き換えてみたらどうでしょうか。

《ロータリーとは「自己」を拝む運動です》

《ロータリーとは「自己」の自覚を深く掘り下げる運動です》

ロータリーも禅と同じく究極的には「自己」の仏性を磨く運動です。これは生涯通して課せられたわれわれの義務なのです。最後にもう一つ皆さんもご存知の易経の《積善の家に余慶あり。積不善の家に余殃あり》という言葉を申し上げます。

米山梅吉論

〈国際ロータリー復帰と米山基金〉

昭和20年8月15日、この日、わが国は未曾有の世界大戦の終結を迎え平和が戻ってきました。しかし国土の多くは、繰り返された戦災のために一面焦土と化していました。人々は絶望のふちに立っていました。新たな復興を目指して立ち上がり始めました。

これに先立ち昭和15年、戦争の拡大により時の官憲よりさまざまな誤解や圧迫を受けて国際ロータリーを脱退して解散を余儀なくされていた日本のロータリークラブも関係者の間で再起が熱望されていました。しかし切望されていた国際ロータリーへの復帰が叶ったのは戦後4年を待っての昭和24年のことでした。

このようにして厳しい戦時下の中で隠れキリシタンのごとく例会は続けられました。当時の職業人であるロータリアンたちが、官憲から外国のスパイと誹謗されながらロータリーの灯火を守りぬいたのは、いかにロータリーに魅力を感じ心酔していたのかということが解ります。

国際ロータリーへの復帰は戦前・戦中のオールド・ロータリアンにとって平和への深い感動と共に本来の奉仕活動に参画できることへの喜びを痛感させました。しかしながら日本のロータリーのR.I復帰を誰よりも待ちかねていたに違いない人物はその時を見ることなく、復帰に

3年先立つ昭和21年4月28日に、その奉仕の生涯を終えていました。東京RCの創立者で、日本のロータリーの生みの親とも言われた米山梅吉氏がその人でした。

奇しくも米山氏の死後一年を経ずして、国際ロータリーの創始者ポール・ハリスもまた逝去しています。昭和22年1月27日のことで、その悲しみの中で世界のロータリアンの中から『ロータリーの創始者であるポール・ハリスを記念して、何か奉仕事業を起こそうではないか』という声が広く起こった結果、ロータリー財団の国際奨学制度の誕生を実現しました。これがポール・ハリス・フェローです。わが国のロータリアンもこれを見て、『米山氏の遺業を記念する事業を……』との声が聞かれたが、こちらは敗戦国で国内はまだ戦後の混乱期であり、熱い声も夢にしか過ぎませんでした。しかし省みれば世界的に冠たる『ロータリー米山記念奨学会』の芽生えは、戦後の混乱と困窮の中から起こっていたことを我々は心に留めなければなりません。そして昭和27年に東南アジア地域を対象とする米山奨学金制度が実現しました。その二年後に米山奨学生第一号としてバンコックRCより一人の学生が来日しました。その後組織の整備がなされ、カウンセラー制度の導入も図られ今日の米山ファンด์となりました。

《米山梅吉氏の生涯》

米山氏は慶応4年（明治元年）に大和の高取藩士、和田竹蔵の三男として東京は芝、田村町

に生まれました。父は彼が4歳の時に他界しましたので、母親の郷里である三島に移りました。学業抜群、りりしい美少年であった梅吉少年は12歳の時、静岡県の長泉村の大地主・米山家に乞われて養子となりました。

14歳の時沼津中学に入学、当時の風潮はというと『いやしくも志を立てて身を為そうとするものは、まず西洋の学問を知らねばならないことは勿論、すこぶる漢文の素養を必要として、いわゆる言論・文章に達者であることを最も肝要とした』と米山さんは述懐しています。明治14年に国会開設が決まり、自由民権論の盛んな時代で『板垣死すとも、自由は死せず』で有名な板垣退助が沼津に演説に來ていました。ラジオも映画も無い時代でしたから、政治演説会が大きな呼び物でした。当時その風潮にあわせて『顕才新誌』という雑誌が学生たちの間で人気があり、全国各地の青少年が競ってこれに投稿しました。この雑誌に投稿すれば必ず掲載されるという少年が2人おりました。1人は米山梅吉少年、1人は夏目金之助、後の夏目漱石でした。そして16歳の時、青雲の志を抱いて東京へ、そして19歳の時、日本をとびだして単身アメリカに渡ります。

この間米山家の養父の怒りは当然で、東京での3年間、アメリカでの8年間は学資の仕送りも無く苦学生として勉学を続け明治28年に帰国したのであります。

帰国後、米山さんは新聞記者になりたかったのですが給料が安すぎて生活が出来ない、当時

一番大きな新聞は福沢諭吉の『時事新報』で、月給は一等記者で月12円、2等記者で月10円、そして一等記者もただ1人福沢さんだけでした。

そこで米国に立つ前に書いた『提督ペリー』という小説を出版しましたが売れ行きが芳しくなく、その時米山春子婦人と長女がおり、文筆で生きることをあきらめ三井銀行に入社しました。その後日本資本主義発達の波に乗ってとんとん拍子に出世街道を竊進する幸運に恵まれました。40歳で大阪支店長、42歳で常務となりました。大正2年ころの米山さんのボーナスは上期1万円、下期1万円でいまの金額に換算すると上期10億円、下期10億円という説もあります。が、当時の巡査の給料が12〜3円だったことを考えると上期3億円、下期3億円くらいでなかろうかと推察されます。

しかし億万長者になっても、少年時代に染まった理想主義や苦学生時代の苦い経験、あるいはアメリカ留学時代の教育を忘れなかったためか、理想主義的な社会改良思想は消えてはいませんでした。米山さんは贅沢・華美を嫌いました。会議・会合の後の宴会やお座敷には行かないのです。まっすぐ家に帰り、奥さんとお子さんたちと食事をします。財閥の大番頭で億万長者ですが、きわめて質素な暮らし向きなのです。献立は一汁一菜だけです。ただ米山さんはお酒が好きなので、米山さんのお膳だけは一汁一菜お鮎子一本となります。

東京ロータリークラブの創立は米山さんが53歳の時でした。その翌年長男の東一郎君が肺炎

のため20歳の若さで亡くなります。慶応大学ではスポーツマンで走り高跳びの選手でした。米山さんの悲嘆と一家の人の悲しみは、痛いほど周囲の人の胸を締め付けました。しかし不幸はこれだけで済まされなかったのです。5年後には次男の駿二君が21歳の若さで自殺するのです。駿二君は米山さんの芸術的才能を受け継ぎ画家志望でした。自画像を描いた作品を『帝国展覧会』に運ぶところを新聞記者に見られ『財界名士の息子帝展へ搬入』と書かれ、米山さんも驚きました。しかし『あまりにも貧しき人生、生きるに値せず』という言葉を残して青春を散らせてしまいました。このことは米山さんの生涯に決して拭い去ることの出来ない大きな精神的打撃を与えたのです。米山さんはご子息の死後、いつそうわが身の生活は質素になり、私財をなげうって青少年の教育に情熱を傾けるようになりました。晩年は青山学院の中に緑ヶ丘幼稚園と小学校を建てて自ら校長となり、先生たちの給料から学校運営の経費を皆自分で払い遂に破産するのです。

米山さんをそこまで駆り立てたものは何だったのでしょうか。アメリカ留学時代の理想主義的社會改良思想だったのでしょうか。米山さんは自分の人生の第一義とは金に変えられない精神的なものだと理解している。自分は新聞記者になりたかったのだが、生活のために断念した。財閥の番頭になって万金が入るようになった。しかし金というものは人生にとって第二義だ、この第二義的な金を自分の社会的使命である社會改良のために使う必要がある。この世の

中には運が悪くてどんなに良いことをやろうとしても中々芽の出ない人がいる。

そういう人たちが運をつかむためにこの金を使ってもらおう。じゃんじゃん使うのでいつも手許はゼロなのです。したがって当時の長者番付には、米山さんの部下たちの名前が出ていますが肝心の米山さんの名前がありません。米山さんは歌人の佐々木信綱について短歌を勉強していました。その佐々木氏から東京大学に入学したが、親が死んで学資が続かないという学生の話聞いて、米山さんは決して私の名前は出さずに、ただある篤志家から言っただけ、それで学資はいくらかかるのですか、その額では最低限でしょう。よろしい、私はその2倍出しましょう。私は近いうちにアメリカに行きますが、立つ前に留守の間の分を置いてまいりましょう。

日本のロータリーの元祖にこういう偉大な人がいたことを良く覚えておいて頂きたい。

こういう先輩がいたことを心の中にしまっておく、こういうのを守護神の理論といいます。自分は米山さんのようには振舞えないが、何かことが起こった時、心の中の米山さんが、君々、こういうときはああすべきではないか、ああいうときはこうすべきではないかと道標（みちしるべ）になってくれることを守護神の理論といいます。

さて次に米山さんのロータリー観と言いましようか、会得したロータリー哲学について振り返って見ます。1920年日本におけるNo.1クラブとして東京倶楽部が、米山梅吉氏を会長、

幹事に福島喜三次氏を置いて創立されました。

因みに福島さんは、ダラスロータリークラブのメンバーで日本人としてロータリアン第一号でありました。東京ロータリークラブは1920年の10月20日が第一回例会、次いで11月の第2水曜日が第二回例会日でありました。ところがこういう手紙が米山会長から会員に届きました。「12月は年末につき皆様お忙しい折からロータリーの例会を開くなどということは失礼至極に存ずるしだいにて、これを休会といたします」と第3回目の例会を休んでしまいます。そして一度人間は過ちを犯すと何度でも犯すもので、1月の例会も休会して、とにかく親睦も無ければ奉仕も無い。だからとやっています。ロータリー日本60年史によると「当初、会員は定款・細則に関する関心が薄く、出席も悪かったのでクラブの存続も危ぶまれるほどであった」とあります。それが1923年9月1日午前11時58分の関東大震災で目が覚めたのです。各国のロータリークラブより送られた89000ドルの多額な義捐に対して東京のロータリアンは精神的な衝撃を受けました。この大金を送ってくれるという偉大な人道的な行為の背後に何か理論が無ければならない。我々としたことが恥ずかしい。皆、襟を正してロータリーの勉強を始めました。さすが皆明治の士でありますので、東洋哲学の素養を身に付けています。瞬く間にロータリーの哲学を身に付けたのであります。

米山さんは母校青山学院で一年間特別講座を持ち、その中で人生哲学を説いています。米山

さんのロータリー哲学を知る上で貴重な資料です。「大学で勉強した人はそれぞれ最高の専門知識や技術を頭の中に入れて社会に出る、それはすべての人々にとって共通な知識だ。ところが米山先生は言うんですよね、これを使うのは誰だ。人間だ。だから温かい心の人間がこれを運用すると温かく運用する。冷酷無残な人間がこの知識を適用すると冷酷無残に適用する。だから大学で諸君たちが学んだ科学技術および原理は、それを学んだだけでは50%の道のりしか行っていないんだ。諸君が人生の経験をつんで出来るだけすべての人々の幸せにその知識を適用できるような体験を積んで、あたたかいパーソナリティを作っていかなければならない。だからどうかそのことを覚えて置いていただきたい。そのあたたかいパーソナリティを作るものを米山さんは常識と呼んだ。健全な常識をだんだん社会経験を通じて身に付けて、あの人が指導者であの人が認識している原理原則を適用する時には、我々はこんなに幸せになれるんだという人にならないと大学で学んだことが氣狂いに刃物になる恐れがある。どうか大学を出ただけではだめなんで、大学を出てから何をするかという、社会慣行の中に身をおいて、ひたすら自己反省を持って自分の心の中に健全な常識を作ってもらいたい。何故こんなことをいうかという、近年アメリカに起こった国際ロータリーを中心とする運動がある。これは地域社会に存在するありとあらゆる職種に科学的な職業分類学を適用して、地域社会の職業人の横断面を捉えて、これらの人々の健全なる良識を毎週一回の定例会を通じて切磋琢磨して、親睦活動を

続けて行くのをロータリー運動という。だからきみらも一生懸命努力して、やがて将来の諸因縁熟成の過程の中にあつて、出来たらロータリークラブの会員になって、なおいつそう自分の人格を涵養されることを期待して私の講義を終わりたい」とこうなるんですね。

「この世の中を生きようとするものは一つずつステップ・バイ・ステップ、自分の常識を涵養して行くことが人生の究極の目的なのだ」米山さんは『常識関門』という本をお書きになるに至ってロータリーの聖者になられたのです。

米山さんは、私の人生のすべて万般にわたつて、私の判断の背後にございますものはロータリーの理論でございます。この理論は何を通じて出来たのかと申しますと、ロータリーの例会出席でございます。この故にロータリーの例会は人生の道場だということが出来るのです。私をロータリーの米山、米山のロータリーとおっしゃってくださいまして結構です。実に見事なものだと言わねばなりません。米山さんはロータリーを思想の次元で把握していました。

簡単に米山さんについて述べましたが、不思議なことに米山さんの生涯はポール・ハリスの生涯と宿命的な共通点があります。

《ポール・ハリスと米山さんの宿命的な共通点》

まず2人に共通する最も大きな点は、ポール・ハリスも米山さんも共に1868年すなわち明治元年生まれであるということです。もつとも米山さんの誕生日は2月4日で、ハリ

スは4月19日生まれですので米山さんの方が2ヶ月ほど年上だということになりますが、とにかくハリスと米山さんが同年生まれであるということには何か宿命的なものを感じます。ところでその1868年にウィスコンシン州の田舎町ラシーンで生まれたハリスは3歳の時事業に失敗した失意の父親に連れられて、バーモント州のウォーリングフォードに住む祖父母の家に預けられることになりました。さてこのハリスの幼少時代の経験は、米山さんの幼少時代の経験に極めてよく似ています。先ほど申し上げたように米山さんは当時江戸に仕官していた高取藩の武士の家で生まれたのですが、すでに幕府は崩壊しておりまして、米山さんの父は武士として失意の中で他界しましたので、未亡人となった母に連れられて母親の実家に戻りその時近郊の豪農であった米山家に見込まれ養子縁組をし、その養家で幼少時代をすごしました。ところでハリスの方は祖父母の家では特に祖母の愛を一身に集め、腕白小僧として自由奔放な生活が許され、高校時代には退学処分を受けたりしましたが、1887年、19歳の時祖父母の家を離れてプリンストン大学へ入学し、また後には法律を学ぶために、アイオア大学へ移り1891年に同大学を卒業しています。他方米山さんは養子先から、かの有名な沼津兵学校の後沼津中学へ通うことになりましたが、この年頃のハリスと違う点は文学少年として同級生の注目を集めていたということです。ところが米山さんは16歳の時に自らの向学心を抑えきれず、養父の反対を押し切って家出同然東京へ出ました。そして海外で勉強することを夢見て、

再び養父の強い反対を押し切って単身渡米してアメリカの大学へ入学しましたが、それが1887年で、ちょうどハリスが祖父母の家を離れてプリンストン大学へ入学した時と偶然に一致しています。

このように米山さんは養父の強い反対を押し切って渡米したのですから、当然養父からの援助を絶たれまして、もっぱら苦学生となつて8年間ウエスレアン大学とシラキュース大学に学んだのですが、この間将来の設計はジャーナリストになることに固まっていました。ついながらハリスもアイオア大学卒業後5年間というものは、アメリカ全土そしてヨーロッパに足を延ばした放浪時代でした。それは米山さんのアメリカ滞在期間とも重複しています。1893年にシカゴで万国博覧会が開催されました。放浪中のハリスは一文無しでありましたが、友人達から金を借りて博覧会を一週間見学しました。たまたまハリスの祖父母が住んでいるパーモント州の物産を展示していたバーモント館を見学していると、きれいに着飾って見学している従兄弟達を見つけました。ハリスは自分のぼろぼろの身なりを恥じてたちまちびすを返しました。当時苦学生であつた米山さんもまた日本館で6ヶ月間、日本製品PRのアルバイトをしていましたのでハリスと出会っていた可能性があります。ハリスは放浪中、収入を得るために何度か地方新聞社に職を求めて駆け出し記者としてアルバイトをしました。当時アメリカでジャーナリスト志望が若者の間で人気があつたのかどうか解りませんが、アメリカでジャーナ

リスト志望を決めた20歳そこそこの米山さんと、地方新聞社で働いたこれまた20歳のハリスとの間には何か相通じるものがあるような気がします。こうして米山さんはハリスの放浪時代の終わったその年1896年に日本へ帰ってきたのですが志望する新聞社への就職を断念して翌1897年に三井銀行へ入社して実業家の道を歩み始めました。この米山さんの三井銀行入社と符合するかにようにハリスもアイオア大学を卒業してから5年間の放浪の生活に終止符を打って1896年に、シカゴに落ち着き法律事務所を開くことになったのでして、ハリスが弁護士として安定した生活を始めたときと、米山さんが三井銀行に入社して実業家としての生活に落ち着いた1897年との間には一年の違いしかないというわけです。ところでハリスが1896年に落ち着いたシカゴは当時アメリカを襲った経済不況の時代でありまして、シカゴ市は不潔を極め犯罪と伝染病の温床でした。こうした事態を憂えたことがハリスを弁護士にした動機のようにでした。

さてハリスはシカゴでそうした世相を憂えていた特に親しい友人3人と語り合って、ロータリークラブを作りましたが、それが1905年2月23日ハリス、37歳の時でありました。一方米山さんは前にも述べましたとおり、ハリスがシカゴに弁護士事務所を開いた翌年1897年に三井銀行に入社して以来、出世街道を歩み、1905年にロータリーが誕生した翌々年の1907年には三井銀行大阪支店長に昇進し、そのまた2年後の1909年には三井銀行が株

式会社となったのを機に常務取締役役に任命されるといった具合に銀行家としての地位は確立されました。このハリスの法律事務所開設といい、米山さんの三井銀行入社といい、この2人の職業的に安定した時期がほとんど一致しているというのも何かの因縁かとさえ思われます。

ところがハリスがロータリーを創立したのは1905年で、米山さんが日本にロータリーを創設したのは1920年ですので、その間に15年の隔たりはありますが、ハリスが19世紀後半から20世紀初頭まで続いたアメリカの経済不況の中でロータリーを創立したことで、米山さんが第一次世界大戦後の1917年から始まった日本経済の不況の中で、特に株式や商品市場が暴落し多数の銀行が取り付け騒ぎにあつた1920年という年にロータリーを日本で創設したことの間には、これまたこの2人のおおの置かれた時勢を憂えて職業を通して社会に奉仕する精神を高揚する必要を感じていたという意味で深いつながりがあるように思えるのであります。米山さんは日本にロータリーを創設してから8年後の昭和3年にハリスの伝記『ロータリーの創設者ポールハリス』を翻訳出版しておりますが、多分その中であまりにもハリスと自分の生い立ちに相通ずる点が多くあるのを知りまして、いつそう強くロータリーにそしてハリスに惹かれたものと考えられます。だから昭和10年にハリスが初めて日本を訪れた時、米山さんは感無量でハリスと固い握手を交わしたに違いありません。そしてハリスと米山さんの間で四方山話が弾んだことも想像され、ハリス帰国後の昭和11年にハリスの著書『ロー

タリーの理想と友愛』を翻訳出版しましたのもこの会見に刺激を受けたからに違いありません。冒頭にポール・ハリスと米山さんは同じ年の生まれであると申しましたが、この2人は一年違いで世を去っております。すなわちハリスの死去が昭和22年であるのに対して米山さんの死去はその一年前の昭和21年でありまして、ここにもポール・ハリスと米山さんとの間には何か宿命的なものを感じずるものであります。

昭和21年4月、米山さんは病床で日本の将来を案じながら歌を一首作りました。

『老いかつ病み 悩める身は わが国の 新しき歴史 見守りてあらむ』

それから数日後に米山さんはこの歌を辞世として亡くなりました。享年79歳でした。

長泉村の米山家累代の墓地に米山さんは眠っています。墓石には米山さんの筆跡で「いさかおもなく水満々の青田かな」という最後の一句だけが刻まれています。

地主の相続人として小作人から小作料を徴収する立場にあったが、早魃の時でも小作料納入のために農作物を作らなければならなかった小作人同士が、しばしば水争いのために殺傷事件をさえ起こすのを憂えて読んだ句でした。

この俳句からも心の奥底にはいつも労使協調主義や社会改良思想が根強くあったことが判ります。こうしたわけで1918年渡米した時、初めて社会改良をモットーとするロータリー運動を知り強く心を打たれたのは当然でありましょう。

ポール・ハリスの辞世の言葉もご紹介しましょう。『地上に平和がありますように、神よ、人の短所や国の欠点は目に入らないように、長所や良いところだけが目に付くようにお守りください』

米山さんの死後、ブラジルで農園を開き、成功した人から突然米山さんの遺族に手紙が届き米山さんの農園投資金額はいくらいくらになっているので受領証を送り次第送金すると言ってきました。しかし米山さんは投資ではなくその方の海外での活躍を祝っただけのつもりでいたので、手元には領収書など残されていませんでした。まさに米山さんの金銭援助は、「ギブ アンド テイク」でなくて、「ギブ アンド ギブ」でした。今年の7月ベトナムの元米山奨学生が、40年前にお世話になった東京大森クラブを通して、米山奨学会にお礼として100万円の寄付をしました。米山さんの精神は、米山ファンドの中に脈々と生き続けているのです。米山さんの志を伝えて行くことは我々日本のロータリアンの務めです。どうか近隣アジアの未来の指導者となる苦学生を助けて、将来の友好関係を築くために米山ファンドにご協力ください。

ロータリーの広報を考える

《ロータリー理解推進月間》

RIでは毎年1月をロータリー理解推進月間に指定しています。これはロータリアンには「ロータリー運動の本質とは何か」を理解してもらい、一般の人には「ロータリーは何をやっている団体か」を知ってもらう月間です。したがってロータリアンとロータリアン以外の人では理解してもらう内容の次元が違います。しかし最近、ロータリー理解推進月間はロータリアンへのアプローチは見られなくなり、一般の方に「私たちがどれだけ良いことをしたか、皆さんの役に立っているかという事実を知ってもらう」というイメージアップを図るための宣伝・広報の月間になってしまいました。

ロータリアンには「ロータリー運動の本質とは何か」を理解してもらうといいましたが、では本来『ロータリー』理解推進月間とは、一体全体『ロータリー』の何を理解し、何を推進するのでしょうか？そのためには最初にロータリーという言葉を峻別しておく必要があります。ロータリーという言葉は、①ロータリアン、②ロータリークラブ、③国際ロータリー、そして以上3つを包含した④ロータリーの世界/Rotary Worldという意味で使われています。我々は日常、これら4つを漠然と『ロータリー』という一語で使い分けています。ではロータリー

理解推進月間はこれら4つの内どれを理解するのでしょうか？「ロータリアン」についての理解を深めるのでしょうか？「ロータリークラブ」、「国際ロータリー」の理解を推進するのでしょうか？否、この場合のロータリーは『ロータリー哲学』を意味します。ロータリー理解推進月間に理解しなければならないのは『ロータリー哲学』なのです。その証拠はどこにあるかというと手続要覧（2007年P84）の社会奉仕の中に、1923年、セントルイスの国際大会で採択された決議23-34号があります。この決議は先人の知恵の結晶で、『ロータリー』とは何か、ロータリーとはいかにあるべきかを記したロータリー思想の殿堂であります。その第1項に“Rotary is a philosophy of life”「ロータリーとは人生の哲学のことを言う」とあります。したがってロータリー理解推進月間とは、ロータリー哲学を理解することなのです。特に日本、韓国、台湾の東洋哲学の素養のあるロータリアンはこの言葉に心酔しています。そのため決議23-34号という味気のない呼称ではなく、「セントルイス宣言」の愛称で呼んでいます。少し長くなりますが、その項目を転載します。

《ロータリーは、基本的には、一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとすることである。この哲学は奉仕——「超私の奉仕」の哲学であり、これは、

「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」という実践的な倫理原則に基づくものである」

これを一言で言うならば「ロータリーとは利己と利他との調和の哲学である」といえます。人は迷った時、導いてくれるガイドラインを必要とします。心の中で儲けたい心（利己）と他人に尽くしたい心（利他）とが綱引きをした時には明確なガイドラインが必要です。そのガイドラインの基準となるのが、「超我的奉仕」と「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」という2つのロータリーモットーなのです。この2つのモットーはロータリーの主概念なのです。つまりロータリー理解推進月間にロータリアンが学ばなければならないことは、利己と利他との調和の哲学なのです。

《会員減少と広報》

しかし近年（約10年前より）、ロータリーは大きく変身しました。原因は何でしょうか。会員の減少です。冒頭に記したようにロータリー理解推進月間はロータリアン以外の一般の人たちにロータリーの善行を強調する月間となりました。ロータリーはもともとライオンズクラブと奉仕観が違い、一般の人への広報は難しい団体です。ライオンズの奉仕は団体で金銭奉仕をします。例会のたびにドネーション（寄付）を募りそのお金で町に救急車を寄贈したり、公園

に時計塔を建てたり、ベンチを贈ったりして、街の人々に分かりやすい目に見える奉仕をします。それに比べてロータリーの奉仕の原点は「利己と利他との調和」の哲学を育むことです。そのために例会の親睦を通じて個々の職業人の質を高めるのが目的となります。つまりロータリーの奉仕は個人奉仕、精神奉仕で目に見えません。

このことはロータリアン自身でも明快に理解しがたく、まして一般の人々にはなかなか理解してもらえません。このロータリーの見えない奉仕に対して国際協議会では「新会員を募るにしても、協力団体を求めるにしても、すべてがほかの団体としてのぎを削らなければならなくなった今日、広い意味での広報が私たちの将来のカギであるといえるでしょう」と強調しました。そこでロータリーも「一般の人々の目に見える好ましい公共イメージを広報することによってロータリーに新会員を惹きつける」「メディアを惹きつけるようクラブのプロジェクトや活動を改善する」「ロータリーと報道機関との関係改善」などが強調されるようになりました。今やロータリーもライオンズも会員獲得のためにふり構わぬ生き残りをかけたサバイバルの時代となりました。ここで過去にR.I.理事会の採択した広報に関する方針の主なものをロータリー章典より年代順に追ってみましょう。

・1923年の決議34号（セントルイス宣言）

「ロータリークラブが奉仕の実践活動を選択する場合、広報宣伝を主要目的としてはならない

けれども、ロータリーの影響力を強める手段として、優れたクラブの事業計画が見事に成功した場合、妥当な広報宣伝を行わなければならない」簡単にいえば、PRはするな。ただし適切な広報媒体があればPRしてもよい。

・1971-72年の理事会方針

「新会員をロータリーに惹きつけ、現会員を引き留めておくのに、広報が重要である」

・1972-73年の理事会方針

「広報をより効果的にするには、決議23-34に従って、各ロータリークラブが奉仕活動をするのが一番望ましい姿なのである」

・1977-78年の理事会方針

「ロータリーと報道機関との関係改善のために、適切な処置を講ずるようにする」

ざっとこんな具合で、決議23-34の広報宣伝を主要目的としない基本姿勢を守ろうとする声明から、積極的に広報に焦点を合わせた活動をすべきであるという意見まで、理事会方針そのものが大きく揺れ動いているのが分かります。

広報宣伝は効果がなければ意味がありません。効果の上がらなかった宣伝とは自分の主張だけで、実際の世の中の動きが黙殺したものであり、成功した宣伝とは実際の世の中の動きに追随したものであるといえます。広報宣伝は一般の人が考えてもいないことを、どんなに宣伝技

術を凝らしてみたところで人々に理解させる力はないのです。わざわざ、ロータリアンが自分たちの功績を周囲に宣伝するのではなく、あらゆる場面にロータリアンとしての矜持を持って登場すれば、それが広報になるのです。広報宣伝は、ロータリーの思想普及の精神が表裏一体となっているのであれば、無意味なことであると思います。

第六章

最後に・
・
・

塚
原
房
樹

『自由の重荷に心をハッキングされないように』

人はなぜ組織の権威にすぐるのでしょうか。「自由の重荷」から逃げるために人は、カルト集団のようなものから政治結社、寄付を募る慈善団体、各種宗教団体に至る無数の結社やクラブに所属します。

エーリッヒ・フロムというドイツ生まれの社会心理学者の著作で、『自由からの逃走』というものがあります。この本を読んだとき、私は初めて学問というものに触れることが出来たような新鮮な感動を受けたことを今でも記憶しています。

この『自由からの逃走』という本は、1941年、第二次世界大戦が始まって間もなくの時期に刊行されました。全体主義の潮流が世界に広がっているという時代状況を背景に書かれたものですが、近代化によって共同体（コミュニティ）の絆から自由というものを手に入れたはずの人々が、なぜナチズム、ファシズムというような自由の価値とは正反対のイデオロギーを受け入れてしまうのか、受け入れてしまうどころか望みさえするのか、ということが心理学的な、精神的な手法によって描かれています。

そこでのキーワードが、「自由の重荷」という言葉です。この本の序文の中でフロムは、次

のように述べています。すなわち、「自由は近代人に独立と合理性とをあたえたが、一方個人を孤独におとしめ、そのため個人を不安な無力なものにした。この孤独は耐え難いものである。彼は自由の重荷からのがれて新しい依存と従属を求めるか、あるいは人間の独自性と個性とにもとづいた積極的な自由の完全な実現に進むかの二者択一に迫られる」というものです。

ロータリークラブの誕生の発端も孤独からの逃走でした。1905年に、弁護士のパール・ハリスがロータリークラブを創設した動機が、大都会シカゴにおける孤独の重荷から逃れるためであったことを思い出してください。クラブとは「ふるさと」の地縁、血縁から自由となった個人が、都会の孤独の中で求める「ふるさと」に代わる拠りどころであり、自己の存在を確認する場でありました。遠くに消えた「ふるさと」は悲しいけれども、すでに崩壊した故郷を、我々は復元することはできません。個人の心が失われつつある現代社会で、今我々が為しうることは、ロータリークラブが「こころ」を持った創造的連帯として可能かどうかを考えることです。

ロータリーの誕生はたしかに「孤独と自由の恐怖」からの逃走にありました。しかし私達がロータリーに心酔したのは、ロータリーが、ひたすら富と権力と名声を追い求める世俗の営みと全く正反対の志を持っていたからではありませんか。ロータリーは職業人の人生道場であり、自己啓発の場でありました。

そのロータリーが他人の金で奉仕するという、そんな世俗の営みと同じことを始めたら、もうロータリーの存在意義はありません。寄附を集めて慈善事業をやるだけの組織だったら俗界にいくらでもあります。ロータリーは宗教ではありませんが、やはり宗教に比肩し得る、あるいはあらゆる宗教を呑み込んだ高次の精神的結社でなければなりません。

精神的結社としてのロータリーが官僚支配の非営利組織となり、かつてのロータリーの栄光が失われるということが、避けられない事実となった時、その事実に対して我々はどんな態度をとるのか、その事実はどう適応し、その事実に対してどうふるまうのか、『夜と霧』の著者フランクは、「その運命を自分に課せられた「十字架」としてどう引き受けるかに、生きる意味を見いだすことができる」と云いました。態度価値とは、人間が運命を受け止める態度によって実現される価値であります。

人間に残される最後の自由は、自分の態度を選択することです。

財団中心の非営利組織となったロータリーに対するロータリアンの態度は、フロムに倣って言えば二つに分かれるでしょう。一つは従来通り、ロータリーという権威への「依存と服従」、これは「権威主義的性格」と云われるものです。この性格の持ち主は権威を好みます。一方で「権威をたたえ、それに服従しようとする」と同時に、他方では「自ら権威であろうと願ひ、他のものを服従させたいとも願っている」。つまり、一般論として自分より上のものに

は媚びへつらい、下のものには威張るような人間の性格だとフロムは言います。

もう一つは自発的な創造が自我（アイデンティティ）を育てて、本質的な独立を目指していく道です。積極的な自由とその責任を引き受け、主体的に自分達の道を自分達の手で作り上げていくことです。このかけがえのない私が主体である、目的論的な「〜へ（向かう）」という積極的な自由のありかたです。それは安易な逃避や捨て鉢的な急進的革命によつて状況を変えようとするのではなく、地道かつ積極的に新たな世界との関係を作り上げる具体的な努力によつて、この耐え難い世界を変革してゆくことです。

神が死んだことが問題であつた十九世紀に対して、二十世紀は人間が死んだことが問題でした。度重なる戦争と人間のロボット化で、真の自由を喪失した人間が「自発的な自由」の願望をも放棄してしまいました。今、ロータリアンに求められていることは、何より「自由の重荷」に心をハッキングされないようにすることです。

過去の栄光を棄てて、他人の金で慈善事業を行う官僚支配となつたロータリーと、どのような関係を構築していくのか？ロータリーに留まるのか、ロータリーを去るのか？それが問題です。

“To Be or not to Be a Rotarian? — that is the question.”

終わりに



国際ロータリー第2510地区

パストガバナー 塚原 房樹
(2005-06)

ロータリーの歴史を振り返ってみますと、過去、何度も存亡の危機に見舞われました。1929年の世界大恐慌、1935年の第二次世界大戦、2008年のリーマンショック、そして今回のコロナ・パンデミックです。

特に今回のパンデミックは、世界中のロータリアンを直撃しました。当地区も地区を始め各グループの諸行事はもとより、クラブの例会開催もままならず、ロータリー情報の交換も親睦活動も思うようにできない状態でした。そのような中、ロータリー活動の空白をいささかでも補填すべく、福井ガバナーより地区内クラブへ私の書きためていた拙文を配布したいとのご依頼があり、大変光栄なことに喜んで手持ちの資料を提供させていただきました。

私はロータリーに入会して45年が過ぎました。ロータリー入会当時を思い起こすと、先輩か

ら厳しく「ロータリーとは何か」「職業奉仕とは何か」というロータリーの原点を教えられました。そしてロータリーの本来の目的は、「人を作る運動」だということを学びました。しかし最近「ロータリーの原点」、特に「職業奉仕」は顧みられなくなり、クラブの管理運営を主体とした定款・細則中心の上辺だけのロータリー運動になりました。ロータリーは魅力を失い、会員も減少傾向にあります。会員増強と財団支援は時代の流れでしょう。しかし時代を超えても変えてはならないロータリーの精神があります。それを今一度振り返ってみたいと思いました。また「ロータリーの存在理由」を明らかにしたいと思いました。

特に最近の10年でロータリーは官僚支配に代わりました。したがってこの本の内容は、ロータリーの発祥を始め、ロータリーがNPOとなる前のロータリーについてのものがほとんどで、今話題の「ロータリーの未来形成」についても現時点では不確定のことが多く詳細には触れておりません。

パンデミックによりロータリー情報が伝達されにくくなった今、私の拙文の中から、時代とともに「変わりゆくロータリー」を感じとっていただき、これからのロータリーに真剣に向き合っていただける機会としていただければ、これに勝る喜びはございません。

塚原 房樹 (つかはら ふさき) 氏 略歴

生年月日	昭和10年(1935)10月7日
1959年3月	早稲田大学第一法学部卒業
1959年4月	(有)青樹社設立 代表取締役
1971年4月	(株)ホクビー設立 代表取締役
1977年1月	札幌東ロータリークラブ入会
1997-98年	同クラブ会長
2005-06年	国際ロータリー第2510地区ガバナー

守・破・離

ロータリー運動の原点と未来

地区大会・地区指導者育成セミナー

— 資 料 —

2021年6月発行

国際ロータリー第2510地区

2020-21年度

地区大会実行委員会